

## 翻刻と紹介 「奥田良三日記 昭和十五年」

上西晴也  
佐藤大悟  
塚原浩太郎  
谷川みらい  
志賀賢二

### はじめに

本稿は、『東京大学日本史学研究室紀要』第二十二号（二〇一八年）に掲載した「翻刻と紹介「奥田良三日記 昭和十四年」」に引き続き、内務官僚奥田良三（一九〇三～一九八九）が、昭和十五年に記した日記（以下、「日記」）を紹介するものである。「日記」の伝来経緯については、前稿の「解説」を参照されたい。

前稿と重複するが、最初に奥田良三（以下、良三）の略歴を記す。明治三十六年、奈良県生駒郡筒井村（現・郡山市筒井町）の豪農の家に生まれた良三は、第三高等学校、東京帝国大学法学部政治学科を卒業して昭和二年内務省に入省、山形県属を皮切りに、岩手・岡山・福岡の各県で課長級の職を、昭和十五年宮崎県警察部長に昇進して以降は石川・静岡・千葉の各県で部長級の職を歴任し、昭和二十二年に官選最後の群馬県知事に就任した。知事公選化後は、福岡県副知事を一

期務めた後、昭和二十六年から昭和五十五年まで八期二十九年に渡って奈良県知事に在任し、この間昭和五十一年から五十五年には全国知事会長にも就任している。今回翻刻した昭和十五年は、良三が福岡県農務課長から宮崎県警察部長に転任した時期に当たる。

「奥田良三日記 昭和十五年」の翻刻は、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程の佐藤大悟、塚原浩太郎、谷川みらい、上西晴也、同法学部政治学研究科博士課程の志賀賢二が行い、取りまとめは上西晴也と佐藤大悟、人名の推定は上西晴也が行った。なお、翻刻本文の後には、「内務官僚奥田良三と宮崎の「光輝アル二千六百年」と題して、今回翻刻した部分の大半を占める、良三の宮崎県勤務期についての解題を付している。解題の執筆は上西晴也が行った。

末尾になりますが、奥田良三日記の翻刻・紹介をお許しください、翻刻文について惜しみなくご助言くださった、上西（奥田）良子氏はじめ奥田家、森本家の親族の皆様、ならびに奥田良三の遺品の保護に快く協力された上西康晴氏に、心より感謝を申し上げます。

〔奥田良三日記 昭和十五年〕

〔凡例〕

一本「日記」の翻刻に際しては、基本的に原文に忠実に従うように努めたが、読みやすさを考慮して、句読点は適宜補足し、旧字は新字に改めた。

一「日記」原文は基本的に片仮名表記であるが、固有名詞などで見られる平仮名の使用、及び傍線の使用については、原文ママとした。

一「日記」原文に登場する人名・組織名は、推定可能な場合に限り、〔〕で名前を補い、適宜、登場時点での官職や奥田良三との関係を補足した。

一誤記や一般的でない漢字表記に関しては、基本的に原文ママとし、適宜、〔〕で一般的な表記を補った。

一月一日 月曜

久シブリニテ故郷ニテ新年ヲ迎フ。岡山以来五年振りナリ。紀元二千六百年三十八才ノ新春ナリ。

子供三人共元氣ニテ賑カナル家トナル。夕刻ヨリ気分悪ク風邪気味ニテ早く就寝。幸ヒノ帰省ニツキユツクリ養生ノ覚悟ヲナス。

一月二日 火曜

風邪ニテユツクリ静養ノ肚ヲ定ム。

朝、奈良ノ姉〔良三の実姉〕※昭和十四年五月二十一日条では「妻俊子の実姉カ」と推定したが、遺族の証言に基づき訂正〕ヨリ使アリ。

後引続キ農務課ヨリ電報アリ、村上〔清次 福岡県經濟部農務課属〕、原〔福岡県技手〕両君電車ニテ轢死トノコトナリ。紀元二千六百年元旦早々ノコトヲシク逸材ヲナクシテ残念ナルモ、風邪臥床中ニテ帰庁モ出来ズ引続キ静養。

一月三日 水曜

風邪熱モナク大シタコトナシ。

引続キ静養。子供三人ニテ賑カナ郷里ノオ正月ナリ。一日ハ寒カリシモ昨日ヨリ暖ク良キオ正月ナリ。

一月四日 木曜

起キテブラ／＼ス。老母〔奥田つね 良三の実母〕モ賑カノタメ御機嫌ヨロシ。六日帰庁ノ計画ニテ、明日子供ヲ連レテ植田へ遊ビニユクコトトス。

一月五日 金曜

風強キモ暖イ風ナリ。子供三人一張羅ヲ着セテ植田ノ老父母〔良三の妻俊子の父母〕ヲ訪フ。タコ上ゲ、蓄音機、イロハカルタ等ニテ子供ニ愉快ニ遊ベルモ午后ハ大分退縮セル如シ。夕刻老父等ニ送ラレテ帰宅。夜八時過、植田ノ老母京都ヨリ土産ヲ買ヒテ持参セラル。寒イトコロ迷惑カケテ恐縮セリ。

一月六日 土曜

本日帰庁ノ予定ノトコロ昨夜イロ／＼考ヘテ〔夕〕上、一応帰庁ニ電報照会シテ出発ノコトトシ今日ハ中止。丁度天気モ良キニツキ一人ニ

テ紀元二千六百年ノ橿原神宮ニ參拜。嘗テ參拜セルトキト全ク変リ、各種ノ奉仕ニテ神域拡張セラレ数十年後ノ神々シサヲ憶ブ。

一月七日 日曜

早朝筒井発歸序ノコトトス。

老母〔奥田つね〕ナドハ朝四時頃ヨリ起キテ何ヤカラ用意ニ忙シ。自分モ五時起床。博〔奥田博 良三の次男〕ノ寝テキルノヲ起シテ六時未明出發。大混雜ノ汽車モ案内ユツクリシテ夕刻下ノ関ニテ大橋〔峰吉カ 福岡県經濟部屬〕君ノ出迎ヲウク。博モ午后大分退窟セルラシキモ概シテオトナシ。

久シブリニテ郷里ノ話ヲス。

一月八日 月曜

西村〔五郎 福岡県經濟部商工課長〕君四日附神奈川県ニ転任トカニテ、今日經濟部ノ送別会ヲ竹葉ニ開ク。愉快ナ送別会ナリキ。

一月九日 火曜

米ノ出荷モ案内順調ニテ当分心配ナキガ如シ。只恒久対策トシテ一年間計画ノ要アリ。知事トモ相談ヲナス。

今日ハ帰宅シテ夕食。久シブリニテ官舎ニテ夕食。

一月十日 水曜

米穀対策ナドイロ／＼計画セルモノノ外、概シテ閑散ナリ。小麦最高価格ノ問題ニテ陳情多ク県農会總會ニテモヤカマシカリシト。

夜ハ互助会ノ新年会ニ招カレ深更マテ痛飲、才陰テ風邪氣味トナル。

一月十一日 木曜

米穀対策ニツキ知事以下関係部課長會議ヲ開カレ、自分ノ私案ヲ中心ニイロ／＼協議ス。一日中コレニ費ス。午后ハ風邪氣味ニテ帰宅。

一月十二日 金曜

大シタコトナキモ風邪氣味ニテ頭重ク欠勤静養。米ノ関係者ヲ知事ガ招待セルニ残念ナルモ致方ナシ。

一月十三日 土曜

大シタコトナキモ引続キ静養。極メテ米ノコトヲ考ヘヌ様ニス。オ隣リノ赤司サンニ診テ貰フ。注射ヲ受ク。

彬〔奥田彬 良三の三男〕計量二貫七百二十匁、兄ハ何レモ二貫七百五十匁ナリシト。結局大シタ差異ナク發育モ相当良シ。

一月十四日 日曜

日曜日ナルニ引続キ静養。

本年当初ヨリ内閣辭職ノ傾向次第二著シク議會、軍部共ニ現内閣ヲ援助セザルノコトトナリ、十三日愈々最後ノ腹ヲ定メ、本日午前九時最後ノ閣議ヲ開キ辭表提出。

畑〔俊六〕大将大命降下ノ下馬評ナリシガ、意外米内〔光政〕海軍大將ニ降下。新聞トニユースガ楽シミナリ。

一月十五日 月曜

米ノ問題ニテ上京ノ用務アルモ風邪欠勤ノタメ〔田村浩 福岡県〕經

済部長自分二代リテ上京。

米内大将昨夜大命拝受ト共ニ組閣ヲ始メ、本日八午前ヨリ軍部大臣モ定マリ、午后政党方面ト順調ニ進ミ、夜十時過全部決定。内務大臣ニ兎玉〔秀雄〕閣下就任。

本日昼頃ヨリ静岡市大火。

一月十六日 火曜

午前内閣親任式挙行。大粒内閣トシテ評判良キモ、ヤ、革新性ニウスク問題ノ余地アリ。兎玉〔九一 福岡県〕知事上京、兄内務大臣トノ人事工作ノタメノ如シ。

静岡大火今晚鎮火セル如キモ六千戸以上ヲ焼キ慘状言語ニ絶スト。引続キ静養。

一月十七日 水曜

内務省モ次官以下三役ノ措置ガ免〔面〕倒ト見エ大臣モ苦慮シ居ラルルガ如シ。

風邪モ治レルニツキ本日ヨリ一寸県庁ニ出ルコトトス。暫ラク居リテ退庁。

一月十八日 木曜

県庁へモオソク出勤。  
農会技術員ヲ集メテ協議会アリ。未夕風邪、気分ハツキリセザルモ出席シテ演説ヲナス。夕刻寒風ノナカラ徒歩帰宅ノタメ閉口。

一月十九日 金曜

知事、部長不在ニテ暢気ナリ。

午后米商連中陳情アリ、飼料対策ニツキ協議。  
内務三役中一人ノ欠員ノミトナリ楽シミ少クナレリ。体ガ回復。

一月二十日 土曜

風邪モ全ク回復シテ本日ヨリ徒歩出勤。時間モ定刻早ク出勤。  
或ハ転任ノコトモアランカト水田村ノ元ノネーヤノトコロへ手紙出サシメオキタルトコロ、本日来テクレテ一寸都合良クナレリ。

一月二十一日 日曜

朝寒カリシモ午后ヨリ順次暖ク風モ少クナリ。今日ハ家庭奉仕デートモ言フベク、掃除ノ手伝ヲナス。  
明日位ハ部長級ノ移〔異〕動アランカト期待。

一日中働イテ機〔器〕械体操ナドシテ氣持チ良シ。

一月二十二日 月曜 (隣人に対する愛)  
月給日ナリ。内務省ノ部長級異動アル筈ニテ鶴首セルニ何ノ通知モナシ。

知事、部長帰庁セラレ、何かト忙シ。

久シブリニテ感冒ノ気分モ治リ奥村〔利雄 福岡県經濟部農務課地方農林技師〕、東〔房太 福岡県經濟部農務課〕君ナドト泉ニテ会食。

一月二十三日 火曜

山川〔寛カ 鉄道省門司運輸事務所長 良三と三高・東大同期〕君来

訪。

博計量セル二三貫八百七十匁ナリ。大体満三才ナルガ満四才以上ノ目方ナリ。子供ハ何レモ一年以上目方重シ。家ニ帰ヘリテ夕食。

一月二十四日 水曜

山川君来訪。

明日ノ米ノ經濟協議会提出議案ソノ他米ニ関スル問題ニツキオソクマデ審議。

夜ハ鮎里ニテ〔小泉梧郎〕警察部長御馳走ノオ伴ヲ仰セツカリ共ニ飲ム。夜十二時頃今川橋ニテガソリン切レタクシー動カズ、寒風吹キスサブ中徒歩帰宅。モウ一度〔二度〕ト夜オソク帰ヘラス覚悟、閉口。

一月二十五日 木曜

米ノ經濟協議会開催。

本米穀年度ノ需給計画、政府買上米ノ措置等ニツキ協議。米ノ問題モ昨年九月ヨリニテ全ク閉口。

明日飼料ノ協議会ヲ開クニツキ之ガ対策決定ノタメ知事官舎ニ行キ知事ト協議。

八百重ニテ農務課員ヲ御馳走ス。来会者二十五名盛会。

一月二十六日 金曜

飼料対策ニツキ越ノ仲買人〔特約店〕會議開ク。ムツカシイ会合ノツモリノトコロ、案ズルヨリ生ムガ安シトイフ如ク割合ウマク進捗。

午后ハ政府米買上ニツキ県関係団体長會議ヲ開ク。

一月二十七日 土曜

午后農務課囲碁大会、学士會館ニ開ク。囲碁会ニ出席スルノ余裕ヲ得テ愉快ナリ。

先日来農務課分課問題ニツキヤカマシ、アマリ愉快ナ問題ニアラズ。

一月二十八日 日曜

天氣良口シカラズ。一日中家ニ在リテ家事手伝ヲナス。

子供ヲ郷里ニオイテカラ大分日数モ経チ、良彦〔奥田良彦 良三の長男〕ハ元氣ダガ咳ガ出ルトノコトデアルシ、良子〔奥田良子 良三の長女〕ハ風邪ニカ、リタルトカニテ心配トナル。

一月二十九日 月曜

先日来寒サ特ニ甚シカリシガ、昨夜来降雪アリ。国民馬事訓練所ト競馬場候補地視察ノタメ農林省ヨリ今村〔方策カ 陸軍砲兵少佐・馬政局事務官〕少佐来県セラル。森聯合會長ト共ニ各所案内。夜ハ清流莊ニテ夕食。寒イトコロラ電車ニテ帰宅。

一月三十日 火曜

農務課機構改革ノ問題ニツキ関係者ヨリイロ／＼ノ陳情アル様ニテ、今日ハソノ間ノ事情ヲ関係者ニ述ベテ県ノ態度決定ノ参考トス。明日ヨリ上京。

一月三十一日 水曜

今夕発上京、今回ハ特二三等ニテ上京ノコトトス。出勤前帰省ノ用意ニ時間ヲ要ス。

午后大体ノ用意終リ、一寸早ク出發シテ午后七時五分下ノ関發京都市ノ車中ノ人トナル。

二月一日 木曜

早朝大阪駅着。老母〔奥田つね 良三の実母〕及子供待望ノ郷里ニ急グ。九時過筒井停留所着。老母ト子供ト迎ヒニ來テ待テリ。子供ガ百日咳ニテ良子ハ特ニ衰弱シ居リ、可愛想ナ格好ナリ。昼食後京都ヨリ「かもめ」ニ乗リテ上京、夜九時東京着。山本〔清治〕愛知県山林課長ト名古屋ヨリ同車。

二月二日 金曜

昨夜ハ東岳館ニ投宿予定ノトコロ、満員ニテ東岳館ノ斡旋ニヨリ一橋館トカニ投宿、安宿ニテ風邪ヲ引ク。今夜ヨリ学士会館ニ投宿ノコトトス。

農林省ニ出頭。米穀局ニテ米ノ払下ノ打合。肥料、人事、等打合事項盛沢山ナリ。  
風邪氣味ニテ早ク帰宿。

二月三日 土曜

農林省ニ出頭。一応事務打合ヲ終了。午后熊本県産米十萬俵払下ノ諒解ヲ得テ欣喜。時間ニ余裕アリテデパートヲ見物。尤モ買フヘキモノ買ヒタキモノモナシ。早ク帰館就寝。降雪アリ。

二月四日 日曜

天気晴明ニシテ氣温低シ。本日ハズツト氣分良シ。

特別ニ訪フベキ人モナク、午前中ヨリアチコチ見物、活動ナド見テ無聊ノ日ヲ過ス。風邪氣味ニテアマリ雑沓中ニ出ルノモ如何カト思ヒ早ク帰宿。

今日ハユツクリ入浴、熟睡ス。

二月五日 月曜

児玉〔九一〕知事昨日上京トノコトニテ、本日ハ朝神社局書記室ニテ面接後、石井〔政一カ 内務省大臣官房文書課長 奈良県出身〕サント町田課長トニ面会。今日一時発つばめニテ離京ノ予定ノトコロ公務ノタメ変更、日本劇場ニテレビユーヲ見テ、夜七時頃農林省ニテ政府買上米五十萬俵ノ指令ヲウク。  
用事ヲ全部終リユツクリ就寝。

二月六日 火曜

朝九時発歸省。名古屋辺ヨリ降雨目立チ奈良一帶モ積雪アリ。麦ニヨロシカラン。子供ヲ入浴セシメテ良彦ト共ニ就寝。夜中大分咳ヲスルシ、今回ハ他ノ子供ニ移ツテハ大變ナノデ連レテ帰ヘラスコトトス。

二月七日 水曜

良子百日咳ニテ片岡医師ノ來診ヲウ〔ク〕。大シタコトナシト。夕刻発歸序ノ途ニツク。病氣ノ子供ト風邪氣味ノ老母ト後ニ残り居リ氣ガカリナリ。

二月八日 木曜

十時過博多駅着。直チニ出勤、早々多忙ニテ閉口。

博、彬ヲ入浴セシメテユツクリト寝ル。

二月九日 金曜

咳が出テ風邪気味ナリ。頭ガフラ／＼シテ氣持悪シ。コンナ変ナコトハ始メテナリ。

農機具価格ノ九州ブロック會議アリテ、農林省ヨリ出席ノ係官ト會食ノ予定アルモ、出席セズ帰行。

二月十日 土曜

知事、部長不在ニテ早く帰宅。夜部長ヨリ電話アリ。米ノ問題知事モ亦相当ニアワテ居ラルル様ナリ。

イツマデモ米ノ問題ニテ閉口。

二月十一日 日曜

紀元二千六百年紀元節ナリ。千歳一週、榮ユル御世ニ會ヘルヲ想ツテ愉快ナリ。

九時ヨリ拝賀式後、住吉宮ニ庁員一同参拝。十一時ヨリ表彰式例ニヨリ執行。

午后一時半ヨリ知事官舎ニテ米ノ需給打合アリ。情ナキ二千六百年紀元節ナリ。

支那軍空襲アルトカニテ警戒中。

二月十二日 月曜

米ノ私下問題ニテ上京スベキトコロ、成ルベク之ヲヤメル方針ノ下ニ門司米穀事務所ニ接渉、夕刻三万俵私下ノ指令ヲウケテヤツト安心。

農地調整法特ニ小作料統制令講演ノタメ西下ノ戸島〔芳雄カ 農林省農務局〕事務官歓迎會、泉ニ開ク。「フク」モ久シブリニ食ベルト甘シ。

二月十三日 火曜

小作料統制令打合會議長ヲ勤ム。午后ハ蹄鉄工組合組合長トシテ總會ニ臨ム。

彬、二貫八百四十匁アリテ兄二人ト發育優レルトモ劣ラザルガ如シ。

五日目ニ本日入浴。ユツクリ汗ヲ流ス。コノ頃風邪気味ナルハ百日咳ヲウツリタルモノノ如シ。

二月十四日 水曜

県養聯評議員會、總會アリ。夜ハ間瀬〔一カ 農林省蚕糸局〕事務官ト西田〔峯吉カ 農林省蚕糸局〕技師歓迎會清流莊ニ開ク。老松ニテ二次會。深更、自動車ナク電車ニテ帰ヘル。中洲方面モ大部分消灯シテ時局意識ヨミガヘル。

二月十五日 木曜

畜産関係者會議、午后ハ早く帰宅シテユツクリス。本日ハ陽春ノ天氣ニテ朝ハ機〔器〕械体操、昼散歩。

氣持良キ一日ナリキ。

二月十六日 金曜

熊本県産政府米ノ私下十萬俵ヲ得タルニツキ、其ノ督励ノタメ熊本ニ行ク。関係方面ヲ歴訪シテ依頼。大体用事モ終レルニツキ、帰途久シ

ブリニテ静養ノツモリニテ立願寺温泉紅葉館ニ投宿セルニ、設備、  
サービス、湯、何レモ悪ク気分悪シ。

風邪気味ニテ咳盛ニ出テ閉口。安眠セザルマ、ナリ。食事亦悪シ。

二月十七日 土曜

早朝出発、ユツクリスル積リナリシガ、感ジ悪ク居ツテモ致方ナキタ  
メ早ク出発。

正午頃帰福。出勤シテ公務打合ヲナシ、快晴気持チ良キ日ニテ早ク帰  
宅。暇多ク家内掃除ヲナス。

二月十八日 日曜

久シブリニテ気分モユツクリシ、日曜日モ家ニ在リテ過スコトトナル。  
家ノ掃除手伝ヲナス。禅寺ニ修行セルノ気分ヲ以テ勉ム。

午后一寸用事ニテ県庁ニ出テスグ帰ル。

二月十九日 月曜

都市ノ飯米相当逼迫セルニツキ、門司米穀事務所ニ到リ至急政府米払  
下ヲ要請。夕刻帰庁。

二月二十日 火曜

経済更生ニツイテノ協議会アリ。経済更生モ時局柄言葉ガピント来ナ  
イタメ迫力モツカズ面白クナシ。午后八幡市商工会議所米穀委員トカ  
称シ陳情アリ。

八幡製鉄所安永（渡平カ 日本製鉄八幡製鉄所庶務）部長来庁。

清流荘ニテ会食。早ク帰宅。

二月二十一日 水曜

公務ヤ、小康ヲ得。（田村浩）経済部長、明夜発上京ノコトトナル。  
何ンダカ今度ハ辞職ノ考ラシ。

二月二十二日 木曜

消費地ノ飯米逼迫シ、門司事務所ニ電話依頼ス。部長上京ニツキ米穀  
打合セノ資料準備ヲナス。久シブリデ県庁モユツクリシ気分トナリ、  
課僚ニ菓子ヲ振舞フ。

二月二十三日 金曜

午后ヨリ苧麻協会総会ヲ開ク。予算総額一千円ナリ。  
畜聯ニテ国民馬事訓練所ト競馬場ノ敷地決定ノ打合会開カレ、コレニ  
出席。訓練所モ愈々設置ノ運ビトナリ欣快ニタヘズ。

二月二十四日 土曜

軍事援護事業視察ノタメ（岡部長章）侍従御差遣遊バサレ、午后侍従  
ハ県庁ニオ出デニナルニツキオ迎ヘ申シ上ゲ。  
朝ハ寒キモ快晴ノタメ日中暖ク気持チ良キ時候トナル。

二月二十五日 日曜

昨夜来ノ降雨晴レ朝来次第二天気良クナル。彬ハ母ト病院ニ行き、帰  
宅後家ノ横ノ道ニテ写真ヲ撮ル。彬ハ未ダ一度モ写真屋ノ写真ヲ撮ラ  
ズ。久シブリニテ撮影。

快晴ニテ一日中家ニ在リテ日光浴ヤラブラ〜シテキタガ、夜計量ス  
ルト珍ラシク十五貫六百八十匁アリ。近来ノ傑作ナリ。



二月二十六日 月曜

出勤前、博ノ撮影ヲナス。

本日ハ米穀取扱ニ関スル機構改革ニ関シ関係課長會議、総務部長室ニ開カレ一日中ソレニ勃〔没〕頭。生悦住〔求馬カ 内務省地方局監査〕課長來唄。懇談ヲナス。

夕刻農林局ヨリ蕪湖〔安徽省〕米三万袋払下ノ内示ヲウク。

〔村田五郎 福岡県〕総務部長ノトコロコデ衛生上ノコトヲイロく話シ合ヒ、健康ニ留意スルノ意ヲ固ム。

二月二十七日 火曜

最近ハ朝成ルベク早く起キテ掃除ヲシタリシテ運動ヲナシ、県庁ノコトモアマリ氣ニカケヌ様ニセルタメ氣分良シ。

役ニ立タヌコトヲクヨく考ヘヌガ肝要ナリ。

三万俵ノ蕪湖米払下ノ手續ナドニ関シ東京ト電話接渉。

二月二十八日 水曜

〔田村浩〕經濟部長帰庁午后出勤サル。先日来ハ退職善後措置相談ノタメ上京シ居ラレタルガ如ク、本日自分ニダケ打チ明ケラル。人間一度ハ其ノ時期到来スベク、部長ノ態度モ本日ハ俄然落チツキナキガ如シ。心自ラ平然タリ得サルモノアラン。

警察部長心接室ニテ米商聯久野〔勘助カ〕理事長ヲ交ヘ米ノ小売価格ヲ中心ニ米ニ関スル懇談会ヲ開ク。

二月二十九日 木曜

米ノ問題ニテ上京ノ必要迫リアリ。都合ニヨリ今晚位ヨリ上京ノ要ア

ルカト待チタルガ、大体明日ヨリトノコト。

經濟部機構改革ニ関シ米穀課ヲ特設スルコトノ案確定シ、明三月一日ヨリ実施ノコトトナル。

三月一日 金曜

午前中參事會開會。米穀課新設ノ件施行セラル。今夜発上京スルコトナリ、夕刻出発。寝台券モナク閉口セルガ車中ウマク入手。特急ニテ悠々上京。

三月二日 土曜

午后三時半過着京。直チニ農林省ヲ訪ヒ米ノ配給ノ依頼ヲナシ、約十五万俵払下ゲノ内諾ヲ得テ東岳館ニ投宿。

下痢ヲシテ腹ノ調子悪シ。

三月三日 日曜

節句ナリ。腹ノ調子悪ク食事ヲ差シ控ヘタルマ、外出、空腹ニテ閉口。然モ途中用便ノ必要アリ。宝生ノ能ヲ見ントセルモ、場所モハツキリワカラス腹ノ調子モ悪ク、仕方ナク活動モ見ザルマ、早く帰宅、静養。

三月四日 月曜

午前中内務省挨拶、農林省ニモ出頭、事務打合ヲナシ早々特急ニテ離京。夜筒井ニツク。子供ノ病氣モ殆ンド治リ、コノ分ナレバ連レテカヘリテ差支ナキガ如シ。

三月五日 火曜

家ニ在リテユツクリス。夕刻子供ヲ連レテ京都ヨリ汽車ニ乗ル。  
途中岡山ノ星島氏ニ会フ。

寢台モ子供ト三人寢ルト狭クテ閉口。

三月六日 水曜

朝帰庁。相当ニ疲勞。

部長ノ退職モ愈々近ヅキタルガ如シ。

三月七日 木曜

米糠ノ配給統制ニツキ懇談。夕刻米穀配給ノ件ニツキ知事官舎へ大塚  
〔政次郎カ 福岡県經濟部〕事務官ト行ケルトコロ、宮崎県ノ警察部  
長ニ転任ノニュース入ル。警察部長トハ全ク寝耳ニ水ニテビツクリセ  
ルモ、〔見玉九一〕知事ノ喜ビモ大シタモノナリ。山座〔三郎カ 福  
岡県經濟部属〕君ト泉ニテ鯛チリヲ食ヒテ深更帰宅。

三月八日 金曜

昼過ギ公電入ル。各方面ニ対スルオ札電報ヲ打ツノニ大変ナリ。  
早速經濟部内各課長ノ送別会開カル。鮎里ニテ飲ム。中牟田氏ノ懇望  
ニヨリ才政ヘモ行ク。  
愉快ナリ。佐賀ヨリ吉江〔勝保 佐賀県警察部長 良三ト三高・東  
大・入省同期〕君来リ、小泉〔梧郎 福岡県警察〕部長ト三人ニテ飲  
ム。

三月九日 土曜

宮崎ヨリ西川〔嘉次カ 宮崎県警察部警務課〕警部来ル。佐賀ヨリハ

吉江来リ、三人ニテ市内ヲ歩キ正服ノ註文ヲモナス。一応十三日発赴  
任ノコトトス。更ニ種々考慮ノ結果十二、十三兩日ノ用務ノタメ、十  
一日一度単身赴任ノコトトス。製鉄所ノ送別会ニ臨ム。

三月十日 日曜

内倉〔武 宮崎県警察部〕情報課長来ル。転任荷物ノ編成ニ大変ナリ。  
明日早朝出発スルコトトシ、今夜ハ原田氏ノ送別会ニ臨ム。  
今回ハ外部ノ送別会ハ殆ンド断レルタメユツクリシテ良シ。

三月十一日 月曜

朝七時何分博多発ニテ単身赴任。内倉情報課長同伴。午后四時半宮崎  
着ナルガ途中延岡、富島、高鍋何レモ署員駅頭ニ迎フ。延岡ニテ本田  
〔忠男〕前部長ト同車。警察部長トシテノ乗り込ミハ愉快ナリ。神田  
橋旅館ニ投宿。旅館ニテ簡素ニ会食。

三月十二日 火曜

中本氏ガ競馬ノタメ来宮セラレアリテ、朝ヒヨツコリ部屋ニ来ラル。  
朝、福岡ヨリ由良君正服ヲ全部揃ヘテ持参。全部揃ツテ今日ノ晴レノ  
式典ニ参列シ得ルハ幸ナリ。旅館ニテ写真ヲ撮ル。  
大西〔健太郎〕巡查部長功勞記章伝達式、警防協会幹事会ニ臨ミ、夜  
ハ紫明館ニテ晚餐会。コレカラ何辺コノ料理屋ニ来ルコトヤラ。

三月十三日 水曜

慰霊祭、警防協会総会ニ出席。富士越ニテ会食。  
夜十時十六分発ニテ出発、一応福岡ニ引キカヘスコトトス。

三月十四日 木曜

朝十時過博多着。一応帰宅。荷物ハ全部發送済ニシテガラントセリ。午后ヨリ市内各方面ニ対スル挨拶廻ハリヲナス。迷惑ナコトナリ。夜ハ記者倶楽部ノ連中ト竹葉ニテ呑ム。〔田村浩 福岡県〕經濟部長モマデリ賑カナリ。後、新三浦ニユク。

三月十五日 金曜

挨拶廻ハリノ残りヲヤリ、昼ハ九水〔九州水力電気〕ノ連中ト博多ホテルニテ昼食。夜ハ農務課ノ宴会ニ臨ミ、内倉君ワザク来博ニツキ鮎里ニテ歓迎ス。知事官舎ヲ訪ヒ最後ノ挨拶ヲナス。挨拶廻ハリ県庁内尚少シ残り残念ナリ。土産物モ大体本日全部整頓。

田村前部長ヲ駅頭ニ送り感慨無量ナリキ。

三月十六日 土曜

早朝起床。手荷物ノ造リツケが大変ナリ。県庁ノ挨拶ト買物ノ残りヲナスタメニ出テ十二時頃帰宅。二時十七分愈々博多ニ左様奈良ヲナス。立ツ間際トイフモノハ忙ハシキモノナリ。途中無事旅行ヲナシ別府ニ投宿。ユツクリ夕食ヲナス。

三月十七日 日曜

才湯ニ入り、昼別府発。午後四時半着宮。知事官舎ニ挨拶ニユキ、官舎ニ入ル。大勢手伝ヒニ来ラレ賑ヤカナリ。旅装ヲ解キユツクリト寝ル。コレカラ何時マデコノ官舎ノ御厄介ニナルコトヤラ。

三月十八日 月曜

午前午後引続キ県庁、市内、新聞社方面ノ挨拶廻ハリヲナス。挨拶廻ハリハ相当疲労スルモノナリ。小サイ新聞ノ多イノニハ一驚。今晚モユツクリ家ニ在リテ食事。

三月十九日 火曜

部内課長、新聞記者ノ招待ヲ紫明館ニテ行フ。痛飲馬食、愉快ナリキ。

三月二十日 水曜

佐野部隊〔歩兵第二十三連隊 都城駐屯・連隊長佐野虎太〕帰還ニツキ都城駅頭マテ之ヲ歓迎スルノ要務ヲ兼ネ初巡視ニ出カク。警察官整列シテ迎フルトコロヲ各署ニ入り、一応署長ヨリ報告ヲウケ、監督者挨拶、部長訓示トイフ順序ナリ。駅頭佐野部隊ヲ迎ヘテ大演説ヲナス。都城、小林、高岡三署初巡視。夕刻帰ヘリ大橋〔峰吉カ〕君慰労宴ヲ紫明館ニ開ク。

三月二十一日 木曜

早朝出発、初巡視続行。大橋君本日出発、鹿児島ヲ巡リ帰ヘルト。高鍋、富島ヲ巡視セルガ、延岡ハ火災アリテ巡視ヲ延期シ、高千穂ニ至リ今国屋ニ投宿。閑散ナ静カナ良キ旅館ナリ。

三月二十二日 金曜

高千穂警察署巡視。彼岸ノ中日過ギテ、淡雪ニテ清浄セラレタル気持ち良キ朝ナリ。

国見ヶ丘ノ寒風亦身ニ沁メリ。高千穂峽見物。古代ノ神事ヲ偲ブ。延

岡署ヲ経テ夕刻帰宅。一応北部ノ巡視ヲ終ル。

三月二十三日 土曜

自動車協会ノ各種行事アリテ多忙。夜ハ紫明館ニテ宴会。全クノ多忙ナリ。

三月二十四日 日曜

早朝出発。宮崎署巡視ニテ元氣ヲツケテ後、妻署ニ至ル。中部以北ヲ終リ、飲肥署ヲ経テ油津町ニ投宿。途中鶴戸神宮ニ参拜。豪壯雄大な神域ニ感激オクトコロヲ知ラズ。全ク他ニ類ヲ見ザル結構ナ神様ナリ。

三月二十五日 月曜

油津署、バルブ工場〔日本バルブ工業、飲肥工場〕ヲ経テ県南端福島署ヲ最後トシテ一応巡視ヲ完了。都井岬、灯台ヲモ見物、馬ノ放牧ヲモ見ル。他ニ見ラレザルノ景色ナリ。七時半帰宅。コレニテ気分モ落ちツケリ。

三月二十六日 火曜

巡視モ終リ一段落ナリ。一寸ユツクリシタ気分トナル。〔長谷川透 宮崎県〕知事ト要務打合。

夜ハ宮崎クラブノ歓迎宴ニ臨ム。愉快ナ会合ナリ。

三月二十七日 水曜

武徳会支部予算。

泉亭ニテ通信局青木〔誠之カ 熊本通信局電気課〕課長ノ歓迎会ヲ開キ、情報課連中ノ慰安会ヲ別室ニテ開ク。コノ頃酒モ大分強クナレリ。

三月二十八日 木曜

賃金委員会、防空委員会ナド引続キ行フ。年度末ニテ会合多シ。夜ハ〔青山春斎カ 宮崎地方裁判所〕検事正ノ招待ヲウケ公会堂ニテ会食。

三月二十九日 金曜

警部考試、口述、社会常識ノ試験ヲ行フ。先日來、鼻ノ上ニ腫物ガ出來テ県立病院ニ通ヒ居タルガ、次第ニワルクナリ閉口。

三月三十日 土曜

腫物ノタメ気分最モ悪シ。此ノ頃ハ着任早々ノコトトテ土曜日ナルモ失念セル狀況ナリ。夜ハ宴会アルモ失敬シテ早く就寝セルガ、夜半高千穂町ニ火災アリテ度々電話アリテユツクリ寝メズ。

三月三十一日 日曜

県庁ニ出テ火災ノ善後措置ヲ講ズ。帰宅シテ静養。

四月一日 月曜

春雨降りソ、ダ中、郷土木島部〔隊〕〔歩兵第百二十三連隊 連隊長 木島袈裟雄〕陸続帰還。警察官モ数名凱旋。凱旋者ノ家族ノ喜ビ察スルニ余リアリ。転任後次第ニ落ちツイテ、愈々勉強ノ要迫レリ。

四月二日 火曜

鼻疽予防協議会アリ。

田中〔栄一〕大分県警察部長来県。夜ハ紫明館ニテ会食。遠山〔信一〕宮崎県〕総務部長、会議ノタメ今夜発上京。

四月三日 水曜

神武天皇祭ノ佳キ日、八紘ノ基柱徐草〔除幕〕式並定礎式举行。折アシク風雨強ク、会場ノ設備悪シキタメ参列者一同閉口。又神厳ヲオカセルノ嫌ヒアリテ甚ダ遺憾ナリキ。

夜ハ紫明館ニテ在郷軍人大会連中ノ歓迎宴アリ。

四月四日 木曜

石油委員会ヲ開ク。大和田〔悌二〕通信次官来県サレ、泉亭ニテ歓迎会アリ。毎日宴会ニテ身体ノ都合悪シ。

四月五日 金曜

県営電気通水式並之ニ関連スル祝賀会等開カル。知事、総務部長共ニ不在ニテ調子抜ケノ観アリ。  
夜ハ宴会。泉亭、盛会ナリ。

四月六日 土曜

電気協会九州支部総会開カル。夜ハ紫明館。

四月七日 日曜

工場協会解散、産業報国会機構改革等ニ関スル役員会総会続会。稀ナ

ル晴天ナル上、本日ハ「愛馬ノ日」ニテ乗馬スル人アルニ、会議ニテ残念。

会議終了後、紫明館ニテ宴会。

帰途知事官舎ニ立チヨリ、警察部人事異動ニツキ隔意ナキ意見交換。

四月八日 月曜

坊ヤ〔奥田良彦〕ノ誕生日ナリ。署長異動ニツキ順次肚ヲ定メ、打診ヲ進ム。〔長谷川透〕長官不在ニテユツクリス。

四月九日 火曜

柿原〔政一郎〕県会議長辞職ニ伴フ後任議長選挙ヲ臨時県会開会ノ十三日執行セラルルニツキ、政界ノ空気アハタダシクナル。署長異動ノ肚ヲ定ム。

四月十日 水曜

快晴ナリ。招魂祭執行、コレニ参列。署長異動計画ヲ〔長谷川透〕知事ニ話ス。夜ハ女中ナドガ子供ト共ニ花火ヲ見ニ行キ、留守番ヲナス。

四月十一日 木曜

熟慮ノ結果署長異動ヲ断行スルコトトシ、本日鈴木〔重信〕宮崎署長ヲ呼ンデ勇退ヲ迫ル。案外アツサリト諒解シ、善後措置ナド懇談。夜ハ自分モ朗カトナル。

四月十二日 金曜

山元〔広次〕延岡署長ヲ呼び退職ノ申渡ヲナス。アマリ気持ノ良キモ

ノニアラズ。夜中速達ニテ辭職願官舎ニツク。コレニテ整備セルワケナリ。

議長選挙ノ協議会ハ穩便ナル措置ヲ採ルコトナリ、好結果ヲ得。

#### 四月十三日 土曜

臨時県会開會。午前ヨリ午后ニ総会。県参与員トシテ照会ヲ受ク。夜ハ紫明館ニテ懇親会アリ。愉快ナ懇親会ナリ。尚本日ハ石油打合ノタメ商工省ヨリ吉田事務官来県、同ジク紫明館ニテ宴会。  
夜十時十六分発上リ列車ニテ新任挨拶ノタメ上京。

#### 四月十四日 日曜

東海道線車中。朝、門司ニテ福岡ノ島中運転手ニ会フ。正午過、下ノ関発列車ニノリ、車中福岡ノ林〔雍 福岡県經濟部〕農務課長ニ会ヒ種々懇談。

#### 四月十五日 月曜

東京着、直チニ内務省ヲ訪ヒ、石井〔政一 大臣官房文書課長〕サン、〔町村金吾 大臣官房〕人事課長ソノ他関係者ニ遇フ。部長トシテノ初上京ナルニツキアチコチ挨拶ヲナス。  
東久邇宮〔稔彦王〕殿下御来県ニツキ、御来県ノコトニツキ御打合ノタメ宮廷ニ参上、長谷川〔務 陸軍歩兵少佐 稔彦王附武官〕御附武官ニ会フ。東岳館ニ投宿。

#### 四月十六日 火曜

更〔厚〕生省、内務省、農林省トアチコチ挨拶廻ハリヲナス。〔山崎

巖〕警保局長、〔大達茂雄カ 内務〕次官、〔狭間茂〕地方局長ナドトオ歴々ノ人ニモ会フ。河原田〔稼吉 健康保険組合連合会〕会長ヲオ宅ニ訪ヒ、保険組合大会〔健康保険組合連合会総会・全国大会〕ニテ御来県ノ序ニ県内ニテ御講演ヲ願フコトトス。

#### 四月十七日 水曜

午前十時半発退京。名古屋ヨリ内倉〔武カ〕君ト別レ夜八時半帰宅。一月半振りニテ老母ノ健在ヲ喜ブ。

#### 四月十八日 木曜

大阪ヨリ乗車シテ帰任ノ途ニツク。相変ラズ満員ノ列車ナリ。下ノ関ヨリ内倉君ニ会ヒ寝台ニ乗ル。

#### 四月十九日 金曜

朝七時過宮崎駅着歸庁。一応官舎ニ落チツキ、九州各県刑事課長ノブロック会議開會ノタメ出勤。宮崎神宮ニモ参拜。

山川〔寛 鉄道省門司運輸事務所長 良三と三高・東大同期〕君門司ヨリ来リ居リ、今晚拙宅ニ投宿。夜ハ刑事課長ノ方ト山川君ノ方ト両方ノ宴会アリ。山川君ト共ニ深更帰宅。

#### 四月二十日 土曜

刑事課長連中ハ聖蹟巡拜。山川君ト県庁ニテ要談。夜ハ久シブリニテ家ニテ食事ヲナシユツクリトス。

#### 四月二十一日 日曜

初メテユツクリトセル日曜日ヲナスコトトナリ、〔木下英一 宮崎県警察部〕特高課長ト共ニ乗馬。良キ馬ニアラザルモ、氣持チ良ク一ツ葉方面乗り廻ハス。

散髪ヲナシテ〔湯浅定晴 宮崎県警察部〕警務課長ナドト共ニ帝國館ニテ映画ヲ見ル。

署長異動ノ計画ヲ一応定ム。

四月二十二日 月曜

署長異動順調ニ進ム。太田〔慶太郎〕小林署長ヲ呼び勇退セシムルコトトス。コレニテ申渡シハ一段落。夜ハ土建大会宴会ヲコトワル。

四月二十三日 火曜

明日署長異動発令アルコトトナリ〔長谷川透〕知事ニ案ヲ示セルトコロ、知事ニモイロ／＼意見アリ。結局最後ニ知事官舎ニテ相談ヲナス。夜一時過ヤツト知事トノ意見纏リ帰宅。

尚本日ハ精動運動、宮殿下御迎へ要務ニツキ一日中部課長会議アリテ閉口。

四月二十四日 水曜

渡辺〔喜逸〕君刑事課長ソノ他ノ案ヲ決定、立案セシム。

午后二時頃本省ヨリ電報アリ、県ノ案モ決定シテ発表。コレニテ着任以來ノ懸案解決、重荷ヲ下ス。

夜ハ中井〔良太郎 陸軍中将・前第百六師団長〕凱旋師団長、利光〔晟カ〕君ノ歓迎会ト榮転シタ者ノ送別ト三ツ競合。忙ハシクアハタゞシキ晩ナリキ。

異動評判良キガ如シ。

四月二十五日 木曜

大異動断行ニテホット一イキナリ。各新聞大体評判良シ。

一日中家ニ在リ。天気モ悪ク致シ方ナシ。アチコチ挨拶ニ来ル者アリ。書齋ノ整理ヲナス。

四月二十六日 金曜

警視署長ソレ／＼赴任。喜バシキ限りナリ。

久シク山積セシ書類ノ決裁ニ多忙ナリ。異動益々評判良シ。

夜ハ宮崎クラブノ会合アリテ後、知事部長水入ラズニテ紫明館ニテユツクリ飲ム。

深更帰宅。

四月二十七日 土曜

早く帰宅。夜ハ明日ノ署長会議ノ用意ヲナス。

四月二十八日 日曜

大異動最初ノ署長会議ヲ開ク。宮崎神宮ニ参拝。約一時間ニ互リ所信ヲ披歴ス。相当ノ感銘ヲ与ヘタル筈ナリ。

夜ハ鈴木〔重信〕前署長ノ送別宴ヲ紫明館ニ開ク。ユツクリス。子供ヲ連レテ宮崎宮参拝。活動写真〔白蓮〔蘭〕〕ノ歌ヲ見ル。

四月二十九日 月曜

天長節ナリ。喪中ニテ簡單ナ式典アリタルノミナリ。昼、〔長谷川

透)長官ガ地方長官會議ニ出席サルルニツキ宮崎駅ニ送ル。  
夜ハ久シブリニテ家ニ在リテ食事ヲナス。

四月三十日 火曜

(遠山信一郎) 総務部長モ病氣欠勤ニテ一人留守ノタメ多忙ナリ。

五月一日 水曜

興亜奉公日ナリ。警察官一同ト共ニ宮崎神宮參拜。本日ヨリ健康増進  
週間ニテ冷水摩擦ヲ始ム。ズツト続ケタキモノナリ。健康増進結核撲  
滅式典(令旨捧読)、右訓示共ニ他二人ナク自分デ之ヲ努ム。  
夜ハ結核予防ニツキラヂオ講演ヲナス。

五月二日 木曜

結核予防講演会ニテ挨拶ヲナス。約二千人ノ大講演会ナリ。  
午后四時半、河原田(稼吉) 健康保険組合連合会会長) 閣下、保険組  
合大会(健康保険組合連合会總會・全国大会)ノタメ来宮。夜ハ閣下  
外厚生省、各府県課長約七十人ヲ招キ泉亭ニテ宴会ヲ催ス。

五月三日 金曜

健康保険組合大会ニテ宮崎神宮祈願祭。八紘基柱前開会式後青島、鵜  
戸巡拜アリ。夜ハ紫明館ニテ約四百五十人ノ大宴会ヲ張ル。連日トナ  
リ閉口。  
女中二人共帰ツテシマヒ困却。

五月四日 土曜

午前中大会終了。午后ハ河原田氏講演。夜ハ市内中等学校生徒ヲ主  
ル対象トシテ講演。  
連中ノ案内ニテ疲労。

五月五日 日曜

昨日ハ雨ナリシモ本日ハ天候良シ。河原田氏ヲ西土(都)原ニ案内シ  
テ、午后ハ延岡ニテ河原田氏ノ講演アリ、子供シテ出席。夜十時半帰  
宮。

五月六日 月曜

久シブリニテ出勤。来訪者多シ。午后ハ府県制發布五十周年記念事業  
打合ノ部課長會議アリ。夜ハ家ニ在リテユツクリス。

五月七日 火曜

九州沖繩都市衛生課長會議アリテ知事代理トシテ出席。  
夜ハ九水(九州水力電気)ノ地方電気合併ニ伴フ披露宴アリテコレニ  
出席。相変ラズ美味シイ御飯ヲ頂イテ帰宅。泉亭。

五月八日 水曜

風邪気味ニテ気分悪シ。  
独乙青年三人視察ニ来訪。

五月九日 木曜

午前中来訪客引キモ切ラズ。最モ多忙ナリ。然シ来訪客多キハ氣持チ  
ノ悪キモノニアラズ。午后ハ気分悪キタメ早く退庁シテ熟睡、気分ヲ



採りナホセリ。

五月十日 金曜

普通二出勤。一寸気分悪キ程度ナリ。宮様〔東久邇宮稔彦王〕御成リニツキ健康診断ヲ受ク。

殿下ノ御通路下見分ノ要アリ、関係ノ者ト視察ヲナス。

夜ハ〔遠山信一郎〕総務部長ヲ中心ニシテ泉亭ニテ部長懇談会。愛婦

〔愛国婦人会宮崎〕支部総会今秋催サルニツキ会場、寄附募集打合ヲ行フ。

五月十一日 土曜

宮殿下御成関係用意モ終リ、夜ハ紫明館ニ於ケル学校歯科医宴会〔全国会〕ニ臨ム。

五月十二日 日曜

朝ヨリ天候悪シ。細雨降ル。

総務部長ト大分県佐伯マデ〔東久邇宮稔彦王〕殿下ヲオ迎ヘニ行ク。

兩次第二強クナル。佐伯ニテ約三時間待チ殿下ヲ迎ヘタリ。県堺ニテ

拝謁ヲ賜フ。宮崎駅到着ノ頃晴レ、奉迎者モ喜ビ居タルガ如シ。

夜ハ総務部長以下殿下御陪食ノ榮ヲ得。有リ難ク亦愉快ナリキ。

五月十三日 月曜

本日ガ殿下御警衛上最モ戒心ヲ要スルノ日デアル。朝御予定通り宿所御出発、市内外ノ聖地御巡覽、新聞協会大会、県庁御成リノ上、夜ハ紫明館ニテ協会ノ晩餐会ニ御台臨。引続キ晩餐ニ御陪食ヲ許サル。夜

十時十六分発東上、警察部長会臨席ノコトトス。

五月十四日 火曜

昨夜モ今夜モ寝台アリテ少シハ助カレルモ、一日中車中ハ閉口ナリ。会議ノ参考事項ナドヲ勉強シテ一日ヲ過ス。

五月十五日 水曜

朝七時過品川駅ニテ下車。渋谷、原宿行キニ乗リカヘテ明治神宮ニ八時一寸前着。

〔山崎巖〕警保局長以下一同神宮正式参拝、靖国神社ニモ参拝。

会議ハ午前十時ヨリ始マリ、夕刻マデ盛沢山ノ熱心ナ会議ナリ。警察

部長トシテ始メテノ会議ナルガ洵ニ愉快ナリ。

正午ハ〔米内光政〕総理大臣、夜ハ〔見玉秀雄〕内務大臣ノ晩餐会ア

リ。夜、引続キ昭和会〔昭和二年内務省入省者の同期会〕ノ懇親会アリ。十一時過帰宿。

五月十六日 木曜

警察部長会議第二日ナリ。午前ハ經濟保安、午后ハ農林、商工兩省ノ関係会議アリ。一応本日ニテ会議ハ終了。夜ハ神谷〔秀夫カ 厚生省衛生局事務官〕君ト共ニ篠原〔英太郎カ 元内務次官〕氏ヲ訪フ。久シブリニテ色々話ヲキキ深更マデ愉快ニ話シ、マタ夜十一時過帰宿。

五月十七日 金曜

学士会館ハ十一時過ギルト風呂ニ入レヌノデ閉口ナリ。先日來四晩入浴セズ、本日モ亦出来ザルコトトナレリ。

午前中〔須磨弥吉郎〕外務省情報部長講演、参謀本部員講演。正午ハ〔岩村通世〕検事総長、〔木村尚達〕司法大臣訓示、午餐会。午后ハ遣外事務官報告アリ。睡シ。夜ハ警保局長中心ノ懇談会アリテマタ十一時半帰宿。

五月十八日 土曜

内務省、更〔厚〕生省ヲ出来ルダケ挨拶廻ハリヲナス。石井〔政一カ内務省大臣官房文書課長〕氏ニダケ会ヘズ残念ナリ。午后ハアチコチ買物ヲナシ、夜ハ学士会館ニテ関係者ヲ御馳走ス。酒、ビール共ニナク、仕方ナク外出シテNew Yorkトカニテ生ビールヲ呑ム。六日ブリニテ入浴。

五月十九日 日曜

買物ヲナシ街ヲブラ／＼見物。活動写真ヲ見ル。夜九時半ノ汽車ニテ退京。

五月二十日 月曜

朝七時半京到着。〔木島歳次郎 宮崎県警察部〕保安課長、〔古藤一衛 宮崎県警察部〕情報課長同伴ニテ京都、桃山巡拝巡覧、午后三時頃帰宅。一月振りニテ老母〔奥田つね〕ニ会フ。兩人ハ一時間余滞在シテ出発。夜ハ老人ト話セルウチネムクナリ早く就寝。

五月二十一日 火曜

天気良ク家ニ在リテブラ／＼トス。夕刻京都発ノ汽車ニテ帰庁ノ途ニソク。今後何日帰省出来ルカ一寸見当ノツカヌ別レナリ。

五月二十二日 水曜

午后二時頃博多着、直チニ県庁ヲ訪フ。農務課ニテ関係者ニ会フ。愉快ナモノナリ。百道官舎ヲ訪レ旧知ノ家々ヲ訪フ。夜ハ待望ノ泉ノ鯛チリヲ食フ。時間アマリナク急ガシキモノナリ。夜行ニテ宮崎ニ向フ。

五月二十三日 木曜

〔渡辺喜逸 宮崎県警察部〕刑事課長県堺マテ来車。不在中宮崎署巡查ノ過失致死事件アリテ報告ヲウク。一度帰宅シテ後登庁。会議ノ模様ナドヲ報告。夜ハ家ニテ食事ヲナシ早く就寝。

五月二十四日 金曜

昨夜都城署ニテ放火事件アリテ今朝報告ヲウク。マタ／＼失態ヲ演ズ。登庁、新聞記者ト懇談、取扱ヒ免〔面〕倒トナル。

五月二十五日 土曜

本月ニ入りテ初メテ土曜日トナル。ユツクリシタイトコロナルモ書類山積、一応全部片付ク。

五月二十六日 日曜

良キ日曜日ナリ。来客多シ。午后、子供ト共ニ活動見物ニ行ク。県庁社会記者倶楽部発会式ニテ神宮参拝後、泉亭ニテ会食。

五月二十七日 月曜

帰庁後事務打合せノタメ部内課長会議ヲ開ク。署長会議ヲ三十、三十一兩日開クコトトス。

五月二十八日 火曜

官舎ノ庭ニ植込ミガ出来タノデ、ソノ披露宴ヲ官舎ニテ行フ。全部来宅アリ。愉快ナリ。

五月二十九日 水曜

明日ハ署長会議ニテ一応ノ用意出来。(青山春斎カ 宮崎地方裁判所 検事局) 検事正ノ招待ヲウケ泉亭ニテ懇談。

五月三十日 木曜

午前八時宮崎神宮大前ニ参集。署課長一同ト共ニ参拝、八時半ヨリ署長会議。長官、部長訓示ヨリ指示ニ入りユツクリ懇談。夜モ(長谷川透) 長官列席ノ下ニ懇談会ヲ開ク。

五月三十一日 金曜

引続キ署長会議。午后三時漸ク終了。久シブリニテ散髪。夜ハ泉亭ニテ代議士連中ト会食、御馳走ニナル。

六月一日 土曜

早朝神宮参拝。午后ハ県庁員振興隊一同、空閑地利用ノ大運動トシテ開墾ヲナス。疲労シテ夜ハ早く就寝。

六月二日 日曜

暫ラク振りノ暢氣ナ日曜日ナリ。天気良シ、家事ノ整理ナドヲナス。午后ハ一人ニテ市北部ノ散歩ヲナシ、疲労シテビールヲ一本傾ケテ就寝。

六月三日 月曜

市町村長会議ナリ。知事訓示等型ノ如クアルモ、八十人前後ノ市町村長ニテハ張り合ヒモナシ。突然霧島山登山シテ天孫降臨祭ニ出席サレタキ旨(遠山信一郎) 総務部長ヨリ申出アリ、突然ノ申出ニテ憤概。夜ハ市町村長懇談会アリテ之ニ出席。十時過マデ意見続出。

六月四日 火曜

市町村長会議第二日ナリ。他二人ナク、天孫降臨祭臨場ヲ引キ受ケ今夜ヨリ出発ノコトトス。三好(重夫 内務省地方局) 財政課長来県、観光協会ノタメ市来君ナド来県。晚餐会ニ臨ミ、夜八時六分発下リニテ霧島山麓高原ニ至リ、夜十一時頃駅前旅館ニテ小憩。

六月五日 水曜

一睡モセズ夜中零時ヨリ登山ヲ始ム。軽装ノタメ疲労セズ。途中降雨チヨイ／＼アリテ頂上ノ暴風雨ヲ懸念。案ノ定頂上デハ午前五時降臨祭執行前後ヨリ暴風トナリ降雨亦強クナル。挙式敢行。一場ノ挨拶ヲモスマセ下山。山麓狭野神社ニテ直会。「ヘコ踊」ヲ見ル。珍ラシキ踊ナリ。午后四時帰宅。疲労セルニツキ早く就寝。

六月六日 木曜

疲労セルニツキ午前十時頃出勤。精動運動推進班来県、懇談会アリ。夜ハ紫明館ニテ晚餐ヲ共ニス。

六月七日 金曜

都城市会議員選挙近ツキ、ソノ取締状況視察ノタメ、且ツハ本日ヨリ一週間防空訓練、警報伝達訓練行ハルルニヨリソノ視察ヲ兼ね、都城署視察ニ向フ。ソノ序デニ高城町ヲモ視察シテ夕刻帰宅。

六月八日 土曜

数日来ノ書類山積セルニツキ今日ハ一日書類ノ整理ニ勉強。三時過帰宅。

六月九日 日曜

家庭奉仕デイトス。子供三人俊子（奥田俊子 良三の妻）合計五人ニテ八絃台ハハイキングヲナス。握り飯持参。天気良ク少シ疲労シテ気持良シ。

杉山君来県、深更マデ晚餐。

六月十日 月曜

引続キ降雨ナク、今年モ旱魃ナリトノ風評次第ニ強クナリ、食糧問題益々懸念サル。

〔長谷川透〕長官今夜上京ニテ、米ノ問題ニツイテノ打合会午後開カル。

竹下〔豊次 貴族院多額納税者議員（宮崎県選出）〕上院議員北支ヨ

リ帰ヘリ晚餐ヲ御馳走セラル。

六月十一日 火曜

〔湯浅定晴〕警務課長同伴、防空訓練状況視察。夜ハ〔岩崎義一〕宮崎署長来訪。懇談。

六月十二日 水曜

知事不在ニテ事務整理進捗。暑サ次第ニ加ハル。某重大刑事事件内偵次第ニ進ミ、各方面ニ手ヲ配ル。

六月十三日 木曜

春各種ノ催アリタルモ一応一段落トナリ、宴会モ少クユツクリシタ気分トナル。

六月十四日 金曜

県立保健所〔宮崎県立健康保険相談所〕地鎮祭ヲ行フ。午后ハ長官東京ヨリ帰庁サレ、直チニ関係部長会議ヲ開カル。米穀集荷配給統制ニツキ協議。一両日来入梅ノ模様トナリ鬱陶シキ雨アリ。

六月十五日 土曜

米ノ集荷配給統制ニツキ部課長会議開カル。本日ハ部内課長ト共ニ霧島登山ノ予定ノトコロ、降雨アリテ中止。残念ナリ。

六月十六日 日曜

鬱陶シキ天候ナリ。青少年武道大会アリテ出席挨拶ヲナス。満洲国ヨ

リ聖地巡拝ノ青年來県ニツキ、正午公会堂ニ行ク。五十子卷三〔滿洲  
國開拓總局總務處長〕氏總隊長トシテ來県、オ目ニカ、リビツクリ。  
降雨中駄頭ニ帰還將兵ヲ迎フ。

六月十七日 月曜

物価統制協力会議開催セラル。本位田〔祥男〕博士ワザ／＼來県、午  
后ハ一般ニ講演サル。夜、泉亭ニテ先生ノ歡迎会開カル。先生ハ宮本  
武藏ノ本位田又ハノ末孫トカ。

六月十八日 火曜

昨夜〔長谷川透〕知事上京、本日ヨリ不在ニテ暢氣ナリ。暑サ次第第ニ  
加ハル。コノ頃書類激増。

六月十九日 水曜

檀原神宮ニテ紀元二千六百年奉祝会主催全国祈誓大会開カレルニツキ、  
本日ハ七時宮崎神宮参拝。午前十一時三十七分ヨリノ秩宮〔秩父宮雍  
仁親王〕殿下ノ勅語捧読ヲラヂオニヨリ庁員一同ト共ニ拝聴式ヲ行ハ  
ル。殿下ノ捧読、近衛〔文麿〕公ノ式辞等拝聴。感激ニ不堪。

六月二十日 木曜

書類ノ整理ヲ急グ。目下内偵中ノ刑事事件モ次第ニ進捗。

六月二十一日 金曜

〔長谷川透〕長官帰庁サレ、賃金委員会開カル。土木関係ノ賃金ヲ中  
心ニ協議決定。

六月二十二日 土曜

米穀集荷配給統制ニツキ協議アリ。午后久シブリニテ馬場ヘ行キテ乘  
馬。天氣良ク気分朗カトナル。夜ハ県医師会ノ連中ト泉亭ニテ呑ム。

六月二十三日 日曜

天氣晴朗ナリ。梅雨中トハ考ヘラレズ。先日ノ降雨ニテ一応田植出來  
サウナリシモコノ分デハ又心配トナル。  
午后ヨリ子供三人ヲ連レテ一ツ葉方面ニビクニツクニ行ク。博モコノ  
頃ハドシ／＼歩クヤウニナリ都合良シ。

夜ハ泉亭ニテ宮崎バスノ總會披露宴恒例ニヨルモノ、コレニ出席。

六月二十四日 月曜

県営電気渡辺〔秀幸 宮崎県県営電気建設部〕工務課長退職ノ問題ニ  
ツキ、同氏ヨリ知事ノ申渡ニ応ゼザル旨ノ回答アリタルニヨリ、黒幕  
柿原〔政一郎 宮崎県議員・前宮崎市長〕氏ト懇談。同氏早朝拙宅  
ニ來ル。夜ハ吉松〔忠俊〕県議ト泉亭ニテ懇談。同氏ニヨリ柿原氏ノ  
自重方要望。

六月二十五日 火曜

県営電気愈々クスブル。夜ハ柿原氏吉松氏ナドト泉亭ニテ情談。  
昼間經濟警察主任ヲ集メ居リテ一場ノ訓示ヲナス。

六月二十六日 水曜

ツマラス問題起リテ忙シ。  
県電問題モ新聞ニ出タリシテ事免〔面〕倒トナル。

六月二十七日 木曜

〔遠山信一郎〕総務部長ズツト静養中ニテ出勤セズ、県電問題モ自分一人ニテ引受ケネバナラヌノデ閉口。

六月二十八日 金曜

柿原氏、野村〔嘉久馬 宮崎県会〕議長、小田〔彦太郎 宮崎県会〕副議長三者協議ノ上〔長谷川透〕知事ニ面会セシメントセルモ、ウマク行カズ、流会トナル。

知事渡辺〔秀幸〕技師ニ会ヒ、結局渡辺技師ハ上京諒解ヲ得ルコトトナル。

六月二十九日 土曜

書類ヲ持チカヘリテ自宅ニテ勉強。

六月三十日 日曜

高鍋武徳殿落成ニテ早朝ヨリ関係者ト共ニ出張。立派ナ武徳殿ナリ。終日緊張セル。本県トシテハ稀ニ見ル豪華武徳大会ヲ終リ、四季亭ニテ夕食。

七月一日 月曜

事変第三周年ノ興亜奉公日デアル。三年ト言ハバ一口ニ言ヘルガ長期聖戦ダ。日露、日清ノ両役ハ一年半位テ終ツタノダカラ。午后一時ヨリ紀元二千六百年奉祝会特別委員会開カル。夜ハ興亜奉公日ノ自祝〔肅〕状況視察ノタメニ時間余リ市内散歩。サスガニ暗黒ナ氣持チノ悪イヤウナ街ナリ。

七月二日 火曜

第三回警察署長会議ナリ。午前〔宮崎地方裁判所〕検事局、午后〔宮崎県〕警察部ヲヤル。検事局指示ハ案外ツマラヌモノナリキ。終日多忙。

署長会議ニテ、署員健康増進ノタメ日光浴運動ヲ提唱。

七月三日 水曜

良彦五、〇五〇匁。  
博 四、一八〇匁。

県庁ニ出勤後、検事局へ昨日ノ会議ノオ礼ヲ兼不出向キ、仲道〔政治宮崎新聞社長〕ノ問題ニツキ検事局ト懇談。同問題ハ大体今一步トイフトコロマデ来タリ。ズツト気分ノ緊張スルヲ覚ユ。

暑サ三五度九トカニテ全ク殺人的暑サナリ。

七月四日 木曜

暑サ厳シク閉口。仲道ノ問題モ愈々最後ノ大詰ニ来レルガ如シ。俊子先日來身体調子悪イヤウニテ如何ト思ヒ居リタルトコロ、愈々妊娠ト決定。

興亜奉公日ニ於ケル風紀問題ニテ一ツ葉方面不都合アリ。時節柄遺憾ニ不堪。

七月五日 金曜

此頃ハ全ク宴会無シ。連日ノ宴会モ迷惑ダガ、全ク宴会ガナイト又退窟ナモノナリ。  
渡辺〔秀幸〕技師上京シテ、退職ノ意思ナキ旨ノ回答〔長谷川透〕知

事ニアリタリ。善後措置ニツキ遅クマデ協議。遠山〔信一郎〕総務部長ノヤリ方ニハ閉口。

七月六日 土曜

仲道ノ問題大体一段落ニテ、後ハ勾引状サへ出レバ良イト言フ程度トナル。然シナカク心配ナモノナリ。  
夕刻〔渡辺喜逸〕刑事課長来訪。立岡〔辰馬カ 巡查部長・情報課勤務〕部長マタ来訪、キハドイ所ニテ見ツカルトコロナリキ。

七月七日 日曜

事変記念日デアル。満三周年、多数ノ同肥〔胞〕ヲ犠牲ニ供シ、未ダ前途多難。銃後一層ノ緊張ヲ要ス。  
午前六時ヨリ県市合同ノ祈誓大会宮崎神宮ニテ開会。会スル者男女約一万五千ヲ算シ盛会ヲ極ム。  
子供三人連レニテ青島ニ海水浴。  
本日勾引状出サル。一段ノ緊張ヲ要ス。

七月八日 月曜

仲道ノ問題進展ト共ニ之ヲ極秘ニ取扱フノ必要アリ。刑事課谷口部長ナドチヨイ／＼宅ニ来テ密談。刑事課長上京中ニテ宮地〔昌幸カ〕次席ト連絡。

渡辺〔秀幸〕工務課長退職問題ニツキ、知事部長相談ノ上場合ニヨリ懲戒免職ノコトトシ、ソノ前提トシテ停職発令。〔寺田甫 宮崎県経済部〕土木課長後任トナル。夜ハ知事ニ部長ヲ紫明館ニ招キ快談痛飲。

七月九日 火曜

中堅幹部講習会本日ヨリ五日間修養道場ニテ開カレ、開会式ニ挨拶ヲナス。

仲道ノ問題漏レルヤノ疑アリテ心配ナリ。

「我大事ヲ為スハ正ニ今夕ニ在リ」ヲ叫バザルヲ得ズ。

七月十日 水曜

県電問題ニツキ参事会員ニモ色々意見アルヤウニテ、定例参事会終了後懇談アリ。昼食ヲモ共ニス。  
良子計量セルニ五、〇八〇匁ニシテ、細イヤウナルガ矢張り良彦ヨリモ一寸ヅツ重シ。  
中川〔望〕赤十字副社長来県サレ紫明館ニテ会食。

七月十一日 木曜

渡辺技師本日帰庁ノ予定ニテ、帰庁スレバ直チニ処分スベク待機セルニ、本朝帰庁セズ。致シ方ナク処分一日延期サル。午前十時ヨリ電気委員会アリ。睡クテ仕方ナシ。神経衰弱ニアラザルヤノ疑アリ。  
渡辺技師辞職ニ伴ヒ部下技師技手全部辞表取纏メ出県。行政上注意スベキ問題ナリ。  
早く就寝。

七月十二日 金曜

昨日位ヨリ仲道逮捕ノ電報鶴首セルニ来ラズ。次第ニ気分落ちツカザルコトトナル。

七月十三日 土曜

今秋秩宮〔秩父宮雍仁親王〕殿下御来県ツキ、関係ノ各種行事打合ヲナス。午前十一時ヨリ幹部講習ノ終了式アリテ臨場。降雨アリ。本日モ天候ノ関係ニテ飛行機モ飛バナイヤウニテ仕方ナシ。

夜ハ〔長谷川透〕知事ガ新聞記者ト紫明館ニテ懇談会ヲヤルニツキ出席。途中仲道ノ事件ガ情報課ヨリ三輪ニ漏レタルヤノ疑アリテ早く帰宅。三輪ヲ呼びヨス。

七月十四日 日曜

朝早く三輪氏来宅。三輪氏ヨリ仲道君ノ件ヲ一応調取。三輪氏帰延ノトコロ、刑事課トノ連絡ニヨリ更ニ呼びヨセタ刻来宮、更メテ検事局ニテ予審判事ノ訊問書ヲ採ル。一日中アレヤコレヤト心配、コレガ手当てニ腐心。食事モ取レヌ位ナリ。夜モ通謀サルルノ懸念多ク安眠出来ズ。

七月十五日 月曜

引続キ天候悪ク飛行機モ飛ビサウニナシ。次第二シヤウサウノ気分強クナル。何レニシテモ奉天ニ居ルコト間違ヒナキヲ以テ一応安心。

昼ハ暇ノアルマ、癩予防ノコトニツキ主任部長ヨリキク。

夜ハ三市関係者ト紫明館ニ呑ミ日高〔三郎 宮崎〕市会議長ト深更マデ痛飲。待望ノ快報、紫明館ニ来ル。!!

七月十六日 火曜

鶴首待望、去ル七日ヨリ待チニ待チタル仲道逮捕ノ朗報昨夜ウケテ、昨夜中ウレシクテ寝ラレズ。朝亦早く目ヲサマシ、〔渡辺喜逸〕刑事

課長ノ来訪ヲウケテ協議。

家宅搜索関係書類ヲ領置セシム。仲道ハ直チニ刑務所ニ収容。愉快ナリ。

夜ハ刑事課員慰労会、紫明館ニテ開催。十一時帰宅。

七月十七日 水曜

新聞紙ニ報道サレタルヤウニテアチコチ物議ヲカモシツツアリ。

午後一時ヨリ宮崎合同トラツクノ社屋落成式アリテ、コレニ出席。合同トラツクラシキ社屋建築サル。

仲道勾留ニ伴フ事項ニツキ何かト多忙ナリ。書類ナドハ勿論見ル気モセズ。夜ハ早く家ニ帰ヘリ就寝。

七月十八日 木曜

仲道ノコトヲ聞キツケアチコチヨリ来訪客多シ。午后ハ〔柴田高義〕学務部長トモ懇談。新聞記者連中ヲ紫明館ニ招キ懇談。深更午後十一時閉メ出シヲ食フマデ痛飲快談。

七月十九日 金曜

相変ラズ来客多シ。夜ハ紫明館ニテ九州電気ノ一ツ瀬川ノ工事完成ノ披露宴アリ、疲労セルニツキ早く帰宅。

県電問題未ダ落チツカズ。地元ニ於テ技師連中ガガヤ／＼言ヒ居ルガ如シ。手当方〔遠山信一郎〕総務部長、〔寺田甫〕土木課長ニ伝フ。

七月二十日 土曜

久邇宮〔朝融王〕殿下、軍艦八雲艦長トシテ美々津ニ敵前上港演習ノ



タメ御来県ニツキ、美々津ニオ迎ヘニ行ク。八雲艦上ニテ拝謁ヲ賜フ。御疲労ノ上風波荒キタメ御上陸取り止メノ御趣。小学校、幼稚園通信簿ヲウク。

身長 cm	体重 kg	胸囲 cm	座高 cm
良子 一一四、二	一九、二	五二、五	六五、五
良彦 一〇九、八	一九、〇	五八、五	六三、二
博 九九、〇	一六、〇	五三、〇	五七、五

良彦六才ナルガ六才、七才計十一人中胸囲ハ第一等ナリ。  
〔欄外、良子について〕読方甲、算術甲。

七月二十一日 日曜

アマリ天氣良キ日曜日ニアラズ。

朝、立岡〔辰馬カ 巡查部長・情報課勤務〕君ノ問題ニツキ〔木下英一〕特高課長來訪。今日ハ一人デ海水浴ニ出カク。海水浴中降雨アル位ナリキ。

内閣ノ交送ニ伴ヒ内務省モ人事異動アルヤノ風評多ク気分落チツカズ。

七月二十二日 月曜

立岡部長辭職問題ニツキ種々考慮ノ結果、本人ニ辭職ノ申渡ヲナス。來客多シ。  
県下町村長幹事会アリ、懇談。知事四時半ノ急行ニテ帰庁。  
夜ハ紫明館ニテ町村長連中トノ懇談アリ。早く帰宅。

七月二十三日 火曜

朝〔宮崎地方裁判所〕検事局ニ〔青山春斎〕検事正、利光〔晟次

席〕検事ヲ訪フ。長時間懇談、仲道君ノ問題モ愈々本筋ニ入ラントス。昨日〔長谷川透〕知事帰庁、注意アリテ特ニ検事局ニテハユツクリ懇談。一兩日中起訴セラルル筈ナリ。

知事帰庁ニテ県電問題仲道事件等イロ／＼ユツクリ話ヲス。仲道事件ハコレカラ愈々肚ヲ定メテカ、ルベキ事件ナリ。

七月二十四日 水曜

立岡君ノ辭表、一応書類等整頓セルニツキ〔湯浅定晴〕警務課長ニ渡ス。水曜会ヲ開キ懇談。事務ヤ、閑散トナル。夜ハ日向興業銀行總會ニ伴フ宴会アリ。  
土用ノ上天候モ晴レテ暑サ次第二厳シクナレルモ案外厳シカラズ。

七月二十五日 木曜

一度海水浴ニ行カント知事ノ許可ヲモ得タルニ來客アリテ行ケズ、残念ナリキ。午後四時早々帰宅シテ薪割りヲナス。運動ニモナリ日光浴モ出來テ一挙兩得、經濟上ニモ都合良シ。  
事務閑散、所謂夏枯レカ。

七月二十六日 金曜

内務三役異動ニ伴フ地方長官異動ニテ本県知事動カズ、一応安心セリ。警察官優遇モ愈々実現可能性アリト見ラル。  
退庁後、例ニヨリ薪割り。日光浴健康ニ良シト確信。  
夜ハビール一杯ヲ傾ケテ早く就寝。  
仲道事件ニツキ刑事事連中ニ薄謝ヲ呈ス。

七月二十七日 土曜

地方部長級ノ異動、新聞紙ニ見ユ。変ラズシテ安心。

午后ハ待望ノ海水浴ニ行クコトトシ青島ニ至ル。天候良ク気分良シ。

コレニテ本年海水浴第三回目ナリ。少クトモ十回ハ行キタキモノナリ。

日高三郎氏〔宮崎市会議長〕ノ来訪ヲ求メ仲道事件ソノ他ニツキ懇談。

七月二十八日 日曜

一人ニテ海水浴ニ行クコトトス。弁当持参ナリ。青島モ大勢ニテ賑カ  
ナリ。天気モ良ク充分ニホシテタ刻帰宅。夕食甘シ。

七月二十九日 月曜

暑サ愈々甚シ。先日来、目ボロガ出来テ閉口。海水浴ニ行ツテハキル  
モノノ気分モ悪ク、外観モ良クナキモノナリ。

県営電気ノ問題、例ニヨリゴタ／＼シテ困却。遠山〔信一郎〕総務部  
長ノ居ル限り続クモノト考ヘラル。

七月三十日 火曜

所謂夏枯レニテ公務ヤ、閑散ナリ。米ノ配給、ラヂオ体操等ノ問題ニ  
ツキ部課長会議アリ。

夜ハ〔長谷川透〕知事ヨリ電話アリテ紫明館ニ至ル。浦上新六トカイ  
フ同盟ノ記者来リ居リ痛飲。深更、知事ト共ニ帰宅。

七月三十一日 水曜

県会協議会開カル。県営電気ノ問題ナドニツキ懇談アリ。午后ハ町村  
長会総会アリテ、斎藤〔虎一〕県議、会長ニ選挙セラル。

夜ハ紫明館ニテ県会トノ懇談会アリ。鈴木油津町長トモ一緒ニ飲ム。  
愉快ナリキ。

八月一日 木曜

午前七時宮崎神宮ニ参拜。昨夜相当ノ降雨アリ、稲田ノタメニモ好カ  
リシト聞ク。八時ヨリハ県庁ニテラヂオ体操。気持チ良キモ合図ガ時  
間ニ合ハズ令感心セズ。

興亞奉公日デアリ、家ニ在リテ勉強。  
夜〔岩崎義一〕宮崎署長来訪。気分悪シ。

八月二日 金曜

先日来ノ目ボロ次第二大キクナリ、本日ハ一寸人ノ前ニ出ルノガ恥シ  
イ程度トナル。県立病院ノ診察ヲウケ、後家ニ帰ヘリテ静養。気分悪  
シ。

八月三日 土曜

引続キ欠勤静養。当地ニ来テヨリ風邪モ引カズ、県庁ヲ休ムノハ初メ  
テニテ残念ナリ。致方ナシ。病院ニ行ク。一日中ブラブラト静養。

八月四日 日曜

目ボロノハレモ大分引イテ気持チモ幾分楽トナル。午前中歩イテ病院  
ニ行ク。

夜、博ガ怪熱ヲ出シ一時ハ大分心配セルガ、結局大シタコトモ無シト  
認メ医師モ呼バズ一夜ヲ明カスコトトス。

八月五日 月曜

博モ大シタコトナシ。自分モ殆ンド良クナリ本日ハ出勤。片眼ヲツプスコトハ1-2ノ視力ヲナクスコトデナク1-5ノ視力又ハソレ以上ノ視力ヲ失フコトナリ。病氣ニハナリタクハナイモノナリ。

八月六日 火曜

目ノ方ハ本日病院ニ行キテ、之ヲ以テ一応治マレリ。有リガタキコトナリ。所謂夏枯レニテ事務モ閑散トナリ退庁モ早シ。家ニ在リテモ暑サト蚊群トノタメ勉強出来ズ早く就寝。

八月七日 水曜

本日ノ水曜会ハウナギヲ御馳走スルコトトス。午前中来訪会多シ。午后ハ二時ヨリ第一小学校ニテ戦歿者ノ市葬執行セラレ、三名中二名マデ警察官ナルヲ以テ知事ニ代リ臨場、弔詞ヲ朗〔読〕ム。遺族ノ心情痛惜ニ不堪。

武徳会夏期講習剣道ノ部、本日終了式ヲ行フ。之ニ臨ミ一場ノ訓示ヲ述ブ。

福日ノ安元君〔安本明カ〕福岡日日新聞社工務局勤務〕来訪、紫明館ニテ食事ヲ共ニシ後、知事ヨリ御馳走ニナル。

八月八日 木曜

コノ間ヨリ暇アリテ夜ナドモユツクリ休ム。目ヲ覚マスト秋ノ虫ノ声盛トナリ立秋ノ感ヲ深クス。今年ハ立秋ノ感特ニ深シ。

本年モ二、六〇〇年モコレテ過ギタリノ感ヲ懐ク。転任後早ヤ五ヶ月

ヲ経、緊禪一番勉強ノ要痛感。

八月九日 金曜

知事他ノ部長出張シテ、例ニヨリ留守師団長タリ。ツマラヌ書類ノミ決裁ヲ求メラレ、留守居ハ閉口ナリ。早く家ニ帰ヘリテ静養。

八月十日 土曜

先日來降雨多ク、斯クナレバ又晴レルコトヲ望マザルヲ得ズ。家ニ帰レルモ暇アリ、来訪者モナク囲碁ノ對手モナク、ブラ／＼散歩セルガ活動ノ見ルベキモノモナク、ソノマ、帰ヘレリ。久シブリニテ無聊ノ苦シミヲ味フ。

八月十一日 日曜

子供ヲ連レテ海水浴ニ行ク予定ノトコロ、子供ハ俊子ガ活動ヲ見ニ連レテ行クト言フニヨリ一人ニテ青島ニ行クコトトシ、正午前出發、青島ニテ昼食。先日來目ヲ痛メテ海水浴ハ久シブリナリ。海水浴第五回目ナリ。

夜ノ内ニ女中逃ゲテ帰ヘリ困却。

八月十二日 月曜

県営電気ノ問題ニテデマ多シ。午后ヨリ都城署視察。県會議員補欠〔選挙〕状況視察、ソノ他署長ト懇談。

八月十三日 火曜

〔長谷川透〕知事今夜上京ニツキ、上京後ノコト県営ノコト人事ノコ

ト各種ノ問題ニツキ知事ト懇談。

波多野大朝支局長栄転ニツキ、今夜紫明館ニテ送別宴ヲ催ス。幸ヒ新支局長モ着任ニツキ一緒ニ懇談。新山口支局長（山口徳馬カ）ハ愉快ナ男ナリ。

八月十四日 水曜

県電問題相モ変ラズウルサキモノナリ。結局（遠山信一郎）総務部長ノ人格ニ関スル問題ナリ。

波多野君ヲ駅頭ニ送ル。駅二人ヲ送ルノハ久シブリナリ。

夜ハ宮崎市警防団幹部ト紫明館ニ会食、深更ニ至ルマデ痛飲快談。近來ニナイ愉快ナ宴会ナリ。

八月十五日 木曜

要務ニツキ（岩崎義二）宮崎署長ヲ招致。忙ハシキ一日ナリキ。

八月十六日 金曜

高岡、小林両署視察ニ出張。内倉（武 高岡警察）署長トモ久シブリデ会ヒ、要務ソノ他懇談。正午過、小林ヘ向ツテ出発。警防団臨時点検ソノ他視察。

夜七時半帰宅。ビールヲ半分傾ケルト酔ッテシマツテ風呂ニモ入ラズ就寝。

八月十七日 土曜

才盆ニテ昨日来家ニ帰ヘルモノ多シ。昨夜来ノ降雨モ晴レ、午后ハ家ニ帰ヘリテユツクリス。

新聞統合問題モ機愈々熟シ、立案着手スルノ決意ヲ固ム。

八月十八日 日曜

天気晴朗ナリ。青島へ海水浴ニ出テユクコトトス。昼食ヲスマシテ出発。海水浴第六回目ナリ。今日ハ或ハ最後カト考へ充分水浴日光浴ヲナス。帰途（湯浅定晴）警務課長、佐々木君ト共ニ西橋むさしニテ夕食ヲ共ニス。

八月十九日 月曜

公務閑散。経済保安課大岐（政種 経済保安課次席）警部辞職ニ伴フ善後措置ニツキ懇談。

夜ハ退窟ナルマ、散髪ニユキ、序デニ活動見物「支那ノ夜」ヲ見ル。

八月二十日 火曜

立岡（辰馬 巡查部長・情報課勤務）部長辞表処理、大岐警部後任補充ト共ニ（古藤一衛）情報課長交迭問題ヲ考慮中ノトコロ、本日（木下英一）特高、（湯浅定晴）警務課長ニ懇談。立岡君モ愈々二十年間ノ生活ヲ清算。

夜ハ退窟ナルマ、活動見物ニ出カク。「支那ノ夜」後篇ヲ見ル。

八月二十一日 水曜

午後、岩切章太郎（宮崎商工会議所会頭）君来訪。当面ノ県政問題、特ニ仲道（政治）君関係ノ問題ニツキ色々雑談。本日ヨリ三日間交通安全週間実施。

八月二十二日 木曜

二十日ガ近ヅキ天候悪シ。殊ニ当地ハ湿氣ガ多クテ閉口ナリ。朝〔長谷川透〕知事東京ヨリ帰庁。知事ハ元氣ニテスグ出勤。留守中ノ要談ヲナス。

夜ハバルブノ重役来県シ、紫明館ニ晚餐ノ招待ヲ受ク。

八月二十三日 金曜

公務ヤ、閑散。警察ノ仕事ハ割合単純ニテ、慣レテ来ルト具合良シ。

八月二十四日 土曜

降雨多シ。午后ハ本県工業振興委員会第一回会合アリ。熱心ニ論議セラル。高鍋ニテ鉄興社ノ工場〔鉄興社宮崎工場〕落成式アリ。紫明館ニテ披露宴アリ。新聞社ノ常会創立トカ言ヒテ別室ニテオソクマデ痛飲。

八月二十五日 日曜

天候悪シ。ユツクリ寝テ外出モセズユツクリス。竹下〔豊次〕貴族院議員来訪、要談ヲナス。良キ人ナリト考フ。活動見物ニ出カク。此ノ頃無聊ノトキハ活動見物ニ行クヤウナレリ。心境ノ変化カ、環境ノ影響カ。

八月二十六日 月曜

宮崎市ノ防空訓練実施。市内ニテハ関係者予期以上ノ気乗リト熱意トヲ有シ、各組合競走のナリ。防空ノ仕事ハ今マデ馬鹿ニシテキタガ、自分ノ仕事トナルト別ナ意味ニ於テ熱意ヲ有スルコトトナル。

八月二十七日 火曜

防空訓練第二日目ナリ。係員ヲ随行セシメテ市内視察。夜ハ知事ト共ニ家庭警防組合ノ活動状況視察。今回ノ訓練ハ特ニ徹底シアリ熱心ナリ。夜ノ演習ノ如キハ行き過ぎノ感アリ。

県庁モ一定ノ想定ノ下ニ訓練実施。新田原飛行場、練習機多数応援ノタメ飛来、緊張ヲ加フ。

八月二十八日 水曜

防空訓練第三日ニテ最終日ナルニツキ、午后市内挨拶ニ廻ハル。各分団トモ熱心ナリ。夕刻風邪気味ニテ帰宅後早く就寝。

八月二十九日 木曜

署長来訪。要談。早く帰宅。遠山〔信一郎〕総務部長岩手県ニ転任。幾多ノ功罪ヲ後ニ愈々転任トナル。

八月三十日 金曜

降雨多シ。閉口。夜ハ市ノ警防団ノ連中ヲ紫明館ニ案内、先日ノオ礼ヲナス。元氣良ク呑メルニ遠山総務部長送別会ノ方へ案内ヲサレ、アマリ度々ニテ立腹〔腹〕。深更帰宅。

八月三十一日 土曜

帰宅後活動ヲ見ニ行ク。館内暑クテ閉口ナリ。

夜ハ部落常会アリテ之ニ出席。葬儀簡易化ニツイテノ懇談協議アリ。ダラ／＼ト長クテ閉口。

九月一日 日曜

本日ハ二百十日ナリ。百性〔姓〕ハイツモ天候如何ニ左右サレ、ムツカシイ仕事ナリ。幸ヒ本年ハ荒レ模様モナク無事ナリ。

午前中九州プロツク会議ノ用意ヲナシ、午后ハ三重野〔老吉カ〕宮崎市會議員・宮崎船用品社長・九州宝生流流友〕氏宅ニ於ケル謡曲、囲碁会ニ列席。篠原〔勲平〕宮崎地方裁判所〕予審判事モ一緒ナリ。夜十時十六分発ニテ福岡ニ向フ。車中暑クテ閉口。

九月二日 月曜

午前十時過、ナツカシノ福岡着。銀行集会所ニ於ケル會議ニ出席。内務省赤羽〔穰〕警保局経済保安〕課長、商工省最上〔章吉〕物価局第三部価格第三〕課長出席。ツマラヌ議論多シ。暑サトツマラヌ協議ニウダリ閉口。夜八時開放サル。

長岡ニ於ケル農務課員ノ歓迎会ニ臨ミ「フクロ」、泉ナド飲ミ歩キ、夜十二時「すみや」ナル下等旅館ニ投宿。

九月三日 火曜

旅館ハ上等ナラザルモ、イツモ懇意ニセルトコロトテ親切ナリ。朝ハパンノミニテ節米ノ状況想像セラル。散髪ヲナシ、悠々県庁ニ出デ、久シブリニテアチコチ買物ヲナシ、赤司氏宅〔福岡県勤務時の隣人〕ヲ訪ヒオ悔ミヲナス。夕食御馳走ニナリ、夜行ニテ帰庁ノ途ニツク。

九月四日 水曜

朝帰宅。用意ヲナシ遅ク出勤。遠山〔信一郎〕総務部長出発、駅頭ニ送ル。送り送ラル、共ニ淋シキモノナリ。役人生活ハアハレナリ。夜ハ早く就寝。

九月五日 木曜

〔木下英一〕特高課長、會議ヨリ帰庁。新聞統制ノ問題ニツキ内務省ノ意嚮モ明瞭トナリ、愈々一県一紙トシテ速急ニ着手スルコトトス。又問題ガ増加セリ。

良彦五、二〇〇匁、イクラデモ増ヘルモノナリ。〔欄外〕5200

九月六日 金曜

新聞統制ノ進捗相談。愈々積極のニ乗り出スノ決意ヲ固ム。早く退庁シテユツクリス。

九月七日 土曜

新聞統制ノ問題ニテ特高課長刑務所ニ仲道〔政治〕君ト面談。仲道君トシテハ無条件ニテ宮崎新聞廃刊ニ賛成セリ。一応コレデ進捗出来ルコトトナル。

午后退庁後、大根、白菜ナドヲ植ヘルタメ畑イヂリヲナス。氣持チ良シ。

九月八日 日曜

天氣良キ日曜日ナリ。珍ラシク來客モナク、午前中ハユツクリ勉強ス。

午后ハ鳥小屋ヲ作り野菜植ヘノ後始末ヲナス。天氣良キトコロパンツ一枚ニテ日光浴旁々ノ労働ハ氣持チ良シ。ビールヲ傾ケテ就寢。

九月九日 月曜

朝県庁ニテラヂヲ体操。月曜日ノコトトテ公務多忙。

新聞統合ノ問題ニテ特ニ來客多シ。

中川〔剛毅〕新総務部長來県着任。夜ハ浜田〔国幹〕宮每〔宮崎毎日新聞〕社長來宅。自我主張ノ強イ人デネバラレテ閉口。

九月十日 火曜

素人娘ノ支那慰問演芸、公会堂ニテ詮衡セラレ実演ヲ見ル。何レモ熱心。良クモ若い娘ヲ遠イトコロマデ、出ス者モ出ス者、行ク者モ行ク者ナリ。

二百二十日ハ明日ニテ、本日暴風雨警報出ル。夕方ヨリ風雨強ク、夜半ハ家ガユスブラル位トナル。勸銀債券懇談会公会堂食堂。

九月十一日 水曜

二百二十日ニテ市内電灯消エ、公衆警察両電話共市外ハ通ジナイトコロ多ク、夜通シノ暴風ニテ氣味悪シ。只朝方風ガ東北カラ南ニ變リ、台風次第ニ遠ザカレルヲ感ズ。

午后本町橋ニテ兩巡查警備中、橋ト共ニ流失、ビツクリセルガ無事タスカレリ。

風未タ止マザルモ殆ンドヨクナレリ。

九月十二日 木曜

佐野〔虎太〕陸軍歩兵大佐 熊本陸軍教導学校長〔前歩兵第二十三連隊長〕部隊長戦地ヨリ還レリ、挨拶ノタメ來宮。正午官民ヲ公会堂ニ招キ挨拶セラル。夜ハ泉亭ニテ佐野部隊長ノ歓迎会アリ。ツマラス芸者ニテ不愉快ナリ。

佐野部隊長ハ立派ナ武人ト認メラル。

九月十三日 金曜

司法保護記念日ナリ。午前十一時ヨリ裁判所ニテ記念式挙行セラレ、コレニ出席ス。ゴク簡素ナ記念式ナリ。

ガソリン消費節約ノヤカマシク言ハルル折柄、ソロ／＼氣候モ良クナレルニツキ本日ヨリ徒歩ニテ通勤ノコトトス。

九月十四日 土曜

朝徒歩通勤。公務ヤ、ユツクリス。午後三時ヨリ武徳殿ニテ全国警察官武道大会出席者壮行会ヲ開ク。

夜ハ大成座ニ宮本武蔵ヲ見ニユキ、帰途湯河君ト着任以來ハジメテカフエーニ行ク。アマリ感心セズ。

彬三貫四十匁アリ。

九月十五日 日曜

忙ハシキ日曜日ニテ朝食後間モナク出勤。電気委員会出席。最近ノ県電問題ニツキ懇談アリ。満洲出征兵士ノ慰問団出發、壮行会ニ出席。

四時、都城ヨリ石原南九州氏、六時飢肥ヨリ西村〔安喜カ 飢肥毎日新聞社長〕飢肥毎日氏來宅。新聞統制ニツキ懇談。何レモ県ノ方針ニ

順応、卒先廃刊ノ手續ヲトルコトナル。

九月十六日 月曜

全国警察官武道大会出場選士推戴式、神宮外苑ニテ挙行、神宮参拝。

午前九時半発、之ヲ駅頭ニ送り行ヲ杜ニス。

午前九時半ヨリ新課長会議、引続キ愛国婦人会總會準備打合。

新聞統合ニツキ浜田国幹君ト懇談、更ニ夜来宅。

九月十七日 火曜

新聞統制ハ田滿裡ニ進捗。中川〔剛毅〕総務部長歓迎会紫明館ニテ開催。

水入ラズノ宴会ニテ深更ニ及ブ。柴田〔高義カ 学務部長〕君コ

ノゴロ身体ヲ破ハセル様ニテ本日モ出席セズ。

九月十八日 水曜

連日多忙。浜田国幹君モ愈々アキラメタルガ如ク、本日卒先廃刊届提出。

北白川宮〔永久王〕殿下北支ニテ戦死遊バサレ、本日弔葬行ハレ廢朝

仰セ出サル。

滿洲事変記念日、九・一八物価停止ナド思ヒ出多キ日ナリ。

家ニ帰ヘリテ早く就寝。

九月十九日 木曜

貸金委員会開催。女子未経験者ノ貸金決定。岡山県ヨリ大野〔正夫

カ〕、小野〔清一郎カ〕ソノ他計四人ノ県会議員、県電視察ノタメ来

県、公会堂ニテ昼食ヲ共ニス。

都城ヨリ川越〔実カ 三州日日新聞社長〕氏来県、川越氏モ愈々廢刊届提出。

コレニテ大体届提出ノコトナル。

夜ハ知事官舎ニ行キテ新聞問題、人事問題協議。十二時過帰宅。

九月二十日 金曜

昨日ヨリ全国警察官武道大会開催。第一回戦ハソレドモ勝チテ、本日

ノ第二回戦ニ臨ムコトナル。

昨日モ今日モ特ニ神武サマニ勝利祈願参拝。

剣道ハ滋賀、青森、香川ナドヲタホシ全国第三位トナル。

夜ハ紫明館ニテ産業関係団体ノモノト会食、深更。

九月二十一日 土曜

連日夜オソクナレルモ朝早く、相当ノ努力ヲ要ス。ソノ代リ八時ヨリ

夜六時マデ働クト一寸働ケテ仕事モ進捗。

参事会ニテ警察官三十二名ノ増員決定、一安心ナリ。

夜、柳島〔劫 宮崎中央新聞社長〕君来訪、新聞統制問題ニテ懇談。

九月二十二日 日曜

朝ユツクリ寝坊ス。

午前十時ヨリ河原ニテシヨウ夷弾実演アリ出場。午后一時二十五分発

〔長谷川透〕長官上京ニツキ、駅頭ニテ新聞統制ノ相談ヲナス。南九

州新聞本日廢刊届提出。コレニテ全部ノ廢刊届揃フ。

午后四時半、武道選士帰県、之ヲ駅頭ニ迎ヘ神武様参拝、富士越ニテ

慰勞宴。夜オソク帰宅。



九月二十三日 月曜

秋季皇靈祭ナルモ天気悪シ。家ニ在リテ新聞ノ整理ナド多忙ナリ。

夜、郵便局方面ヨリ〔小林武治〕熊本通信局長来県ノ案内アリ。紫明館ニテ御馳走ニナル。

九月二十四日 火曜

本日ヨリ柔道ノ稽古ヲナサントセルモ、武徳会ノ方ニ差支ヘアリテ取り止メトス。

情報課長外警部以下警察官ノ異動ヲ断行スルコトトシ、原案決定。

良子二、三日前ヨリ顔ニムクミアリ、明日県病院ノ診察ヲ求ムルコトトス。

九月二十五日 水曜

警察部異動断行。

良子病院ノ診察ヲ受ケタルニ腎臓炎ナリト。全ク寝耳ニ水ノ重難病ナリ。成程顔ノムクミモ引カズ、近来始メテノ病氣ナリ。学校モ休マセテ養生セシムルコトトス。

九月二十六日 木曜

本日ヨリ三日間刑事講習会アリテ、当初訓示ヲナス。一時間バカリシヤベルト汗ダクナリ。

午后ハ武徳殿ニユキテ、二十年振りニテ柔道ヲナス。汗ガタンマリ出テ氣持チ良シ。チヨイ／＼ヤル積リナリ。

夜富士越ニテ刑事連中ト、紫明館ニテ狐友会連中ト会食。帰ヘルト夜中、良子ガ熱ナク脈多クナキニ呼吸変調ニテ一夜中心配。県病院ヨリ

医師診察ヲ受ク。

九月二十七日 金曜

連日鬱陶シキ降雨ニテ閉口。

午后ヨリ刑事講習会懇談会アリテ出席。県下各署ヨリ集レル刑事諸君ノ苦心談、自慢談面白ク聴ク。愉快ナリ。オ蔭デ本日ハ午后柔道ニ行ケズ、ソノ点残念ナリ。

日独伊三国同盟ベルリン総統官邸ニテ調印。外交上ノ大躍進ナリ。

九月二十八日 土曜

航空記念日ナルモ降雨ノタメ飛行機モ飛バズ致シ方ナシ。

慰靈祭アリテ之ニ臨席。

降雨中、刑事講習会終了式及写真撮影。

柔道ノ稽古出来ズ残念ナリ。

〔長谷川透〕知事帰庁サレ、上京中竹下〔豊次カ〕氏ト協議ノ結果ナド話ヲキク。

九月二十九日 日曜

午前八時ヨリ武徳殿ニテ武徳祭及演武大会アリテ之ニ出席。一日中演武ヲ観ル。

九月三十日 月曜

降雨ヤマズ。午前中、照宮〔成子内親王〕殿下及東伏見宮〔依仁親王妃周子〕殿下御来県ニツキ関係者ノ打合会ヲ開ク。知事室ニテ〔中川剛毅〕総務部長ト三人会食。

博覧会関係ニテ岩切〔章太郎カ 宮崎商工会議所会頭・日向建国博覧会会長〕氏ノ招宴アリテ、知事ナドト共ニ出席。  
朝、知事ヨリ日独伊三国同盟及風水害御下賜金ニツキ庁員激励ノ訓示アリ。

十月一日 火曜

第三次総合防空訓練実施。国勢調査施行。国勢調査施行ノタメ防空訓練第一日ハ一般民間ニ関係ノ分ハ実施セラレズ。  
雨中興垂奉公日神社参拝。警察官ノ規律正シキヲ痛感。  
柔道ノ練習ニ行ク。  
夜、一ツ葉ソノ他雨中ノ料理屋検分。帰途自動車破損。

十月二日 水曜

竹下〔豊次〕貴族院議員ノ代理トシテ有村〔忠恕カ〕ナル者来県。新聞経営ノコトニツキ懇談。相当信用ノ出来ル人物ノ如シ。  
宮新、宮毎両新聞社ヲ視察、新聞合併ノ参考トス。  
午后三時半、竹下氏ヲ新社長トシテ交渉中ノ旨公表。  
夜ハ県庁ノ非常召集真夜中ニアル筈ニテユツクリ寝レザルマ、召集ナク過セリ。

十月三日 木曜

防空訓練タケナハナリ。  
午后ヨリ延岡市ニ於ケル防空訓練状況視察ノタメ出張。高鍋、富島視察、夜ノ延岡状況視察ノ後、終列車ニテ帰宅。  
午前零時、庁員非常召集アリ。三時頃帰宅。今晚ハ殆下一睡モ出来ズ

閉口。

十月四日 金曜

都城訓練状況視察ノタメ自動車ニテ出張。途中風邪気味ニテ気持チ悪シ。  
新聞統制ノ問題ニテ〔木下英一〕特高課長ニ注意ヲ促ス。  
翌午前三時、警察官総動員警備訓練ノ非常召集ヲ行フ。一同元氣ニテハリ切り居リ愉快ナリ。風邪気味ナリシモ押シテ登庁。

十月五日 土曜

風邪ヲ無理シテ非常召集ニ登庁セルタメ悪クナリ、睡眠不足モ加ハリテ本日欠勤。  
日向建国博覧会開館式アリシモ得〔ママ〕出席セズ残念ナリ。一日中臥床。  
夜八度四分ノ高熱トナリ〔高部練兵〕衛生課長ノ来診ヲ得。

十月六日 日曜

天気晴朗ナリ。一日中静養、熱下リ漸次気持チヨシ。来客多シ。  
夜、博ノ唇ハレ、或ハ変ナリニナリハセヌカト心配ニナリ小児科医長ノ来診ヲ得。先日来ノ痺〔蕁〕麻疹トノコトニテ一応安心。

十月七日 月曜

熱モ下リ出勤。来客万来ナリ。良子ノ腎臓炎モ大分良ク、大体平素ト変リナキ程度トナル。彬ノ病氣モ赤痢系統トカニテナホリニクキタメ、本日才尻ヨリ注射ヲウク。博モ腎臓カト心配セルガ腎臓デハナイトカ

ニテ一応安心。コノトコロ病氣続出ナリ。  
無理ヲセザルタメ県庁早く退庁。  
武道合宿練習始ム。

十月八日 火曜

風邪氣味モ次第二氣持チ良クナリ執務。多忙。  
水谷〔好矩〕保健課〔健康保険課〕長栃木県二榮転ニツキ送別会紫明館ニテ開ク。

十月九日 水曜

書類山積。来訪者続出。多忙ヲ極ム。水谷君出發、滿洲皇軍慰問団帰還。公会堂ニテ歓迎会アリ。

十月十日 木曜

照宮〔成子内親王〕殿下、東伏見宮〔依仁親王妃周子〕殿下御二方中甸御成リニナリ、十五日ノ部長會議ニテ御警衛上差支ヘアリ。本日取急ギ御成リ先キヲ見分ス。鶴戸神宮マデ片道一時間半ヲ要シ、往復ニテ相当疲労ス。

博ノ痺〔葺〕麻疹モ殆ンド良クナリ良子ノ病氣モ殆ンド快復セルラシク、兩人順調ナリ。

十月十一日 金曜

〔長谷川透〕知事、竹下〔豊次カ〕両氏帰県。新聞統制ノ問題ニツキ懇談。安山〔圭三カ 宮崎県會議員〕氏副社長トノ意見出デ、考慮ヲ要スルコトトナル。一日中新聞ノ問題ニテ多忙ナリ。

夜ハ宴会後、神田橋ニ竹下氏ヲ訪ヒ懇談。充分意思疏通出来ズノ分ル。

十月十二日 土曜

新聞統制ノ根本方針ヲ決定スべく打合進捗。部長會議ニ上京ニ先ダチ幹部組織モ決定。  
夜十時十六分發上京。

十月十三日 日曜

退窟ナ車中ナリ。只今回ノ車中ハ靖国神社臨時祭典参列ノ遺族多数乘リ込マレ、狭クテ閉口。寝台ノ用意ガ出来テホツト安心。

十月十四日 月曜

七時半東京着、学士会館投宿。少雨ノナカラ内務省ニ出頭。先輩、知人ヲ訪問。

事務打合ヲナシ、同盟通信ニ堀〔義貴カ 同盟通信社常務理事 宮崎中学校出身〕氏ヲ訪ヒ新聞統制ノ打合ヲナス。

夜ハ麓氏ト共ニ支那料理ヲ會食、一晩翠軒。

十月十五日 火曜

部長會議ニ出席。重要ナ事項ハ何モカモ明日ノ懇談会ニユヅルトイフワケデ、ツマラス會議ナリ。退窟ス。

夜ハ局長ノ招宴雅除〔叙〕園ニ開カル。帰ヘリテ学士会ニテ囲碁。

十月十六日 水曜

本日退京ノ予定ニツキ、事務打合せニカケメグレリ。午后ヨリ懇談会。実ノアル会合ナリキ。会議終了後ソクサト退京。

十月十七日 木曜

早朝大阪着。朝食ヲ食フトコロナクアチコチ歩ク。大阪商船ニテ明日ノ出発ノコトヲ打チ合ハセ帰省。  
叔父等来リ、殊ニ伊豆〔勝次カ 良三の郷里での友人〕君来訪。田舎ニカヘルノハ楽シイモノナリ。

十月十八日 金曜

正午筒井出発。大阪朝日ヲ訪問セルモ、社長不在ニテ致方ナシ。少々買物ヲナシ、四時半発天保山、一路別府ニ向フ。錦丸トテ千七百トン、良キ船ナリ。愛国婦人会総裁宮〔東伏見宮依仁親王妃周子〕殿下ト御一緒ノ船ナリ。

十月十九日 土曜

午前十時半過、別府着。大阪商船事務所ニテ正服ニ着カヘ拜謁。御警衛シツツ宮崎ニカヘル。午后四時半着ナリ。久シブリニテ家ニ帰ヘリテ夕食ヲナス。

十月二十日 日曜

愛国婦人会〔宮崎県支部〕総会ナリ。行事多シ。ソノ間宮崎神宮、八紘台ナドニ御案内。無事諸行事終了。総会途中少雨アリタルモ大雨ニ至ラズ、先ヅハ結構ナリ。夜ハ御泊所ニテ御陪食ノ光栄ニ浴ス。家族同伴ナリ。

十月二十一日 月曜

総裁宮殿下都城ニオ成リニツキ御警衛申上グ。帰途青島御巡覽被遊、幸ヒ雨モ降ラズ、島内アチコチ予定外ノ時間ニテ御視察被遊。夕刻恙ナク御泊所御着、コレニテ御警衛第三日モ無事終了。夜ハ随行者一同ニ対シ紫明館ニテ夕食ヲ招宴。

十月二十二日 火曜

宮殿下愈々当県ヲ御退出。朝御泊所ニテ拜謁。記念ニセヨトノ御思召御言葉ニテ品物拝受。帰宅後見レバカフス、ポタンナリキ。  
延岡市ニテベンベルグ〔旭ベンベルグ絹糸延岡工場〕御視察、無事御予定全部ヲ終ヘサセラレ、佐伯マデ御見送り申シ上グ。御名残り惜シイトイフ感ジニテ一杯ナリ。

十月二十三日 水曜

殿下御警衛事務一段落ニテ、ヤット新聞統制ニ手ヲ下シ得ルコトナリ、午前中県内有力者懇談会、午后廢刊九社ヲ集メテ暖簾代申渡シヲナス。何レモ大体平穩裡ニ終了。  
夜ハ新聞記者ヲ集メテ紫明館ニテ宴会、愉快ニ痛飲。

十月二十四日 木曜

新聞ノ方モ案内順調ニ進行中。本日ハ午后愈々新社ノ幹部申渡シヲナスコトトシ、一部予定計画ヲ変更スルコトニ決定、午后関係者ヲ集メテ公表。ナカ／＼ムツカシキ問題ナリ。良ク苦シキ計画ヲ披瀝諒解ヲ求ム。

宮地〔昌幸カ〕君歓迎会ヲ紫明館ニ開キ、オソクマデ痛飲快談。

十月二十五日 金曜

昨夜ノ申渡シニツイテノ諾否ヲ本朝キクベキトコロ、磯野〔金作カ  
祖国日向新聞社長代行〕君アチコチニテ返事聞ケヌタメオクル。  
新聞ノコトニテ一日中ゴタ／＼ス。夜〔木下英一〕特高課長ヲシテ磯  
野君ニ会ハス。

十月二十六日 土曜

一応各幹部ノ入社返事アリテ、新社設立ニ邁進スルコトトナル。本日  
ハ宮崎神宮例祭ニテ有リガタキ日ナリ。

午后モ多忙ヲ極メ、九州山口沖繩各県武道大会用意ノタメ武徳殿ヲ見  
ル。

知事予算査定アリ。

十月二十七日 日曜

天気良シ。本日ハ宮崎神宮御神幸ノ祭ナリ。聞ケバ馬鹿ラシキ計画ノ  
如シ。天気良キタメ午前中家ニ在リ、午后ヨリ新聞問題協議ノタメ県  
庁ニ出デ、御神幸祭知事代理ヲ勤ム。コレ亦馬鹿ラシキ仕事ナリ。各  
県部長来県ニツキ泉亭ニテ懇談会。新聞ノ連中モハジメテ泉亭ニテ宴  
会。

十月二十八日 月曜

各県参列者ヲ青島鞆戸ソノ他ニ案内。天気快晴ニテ気持ち良シ。新聞  
ノ方氣ガカリナリ。夕刻ヨリ県庁ニテ協議会。夜ハ紫明館ニテ部長、  
泉亭ニテ審判員諸君ヲ御馳走ス。

愈々明日ガ運命ノ定マル日トナル。

十月二十九日 火曜

四月以来待チニ待チ、今日アルガタメ鍛ヘニ鍛ヘタ日ガ来タ。朝武徳  
殿ニ行クト選士一同何レモ元氣ニテ安心。

〔長谷川透〕知事不在ノタメ行事ハ凡ベテ知事代理ヲナス。

柔道剣道共ニ第二回目ニ福岡ト当リ、柔道ハ二対零ニテタホシ優勝確  
実、剣道ハ最後ニ長崎ヲタホシテ共ニ優勝、個人仕合モ優勝、優勝、  
優勝。富士越ニテ祝賀会。蓬台君来リ紫明館。

十月三十日 水曜

昨夜遅クナリ、今日ハユツクリ登庁。朝神武様ニ優勝報告祭。昨夜来  
ノ浄雨ニテ清浄セラレタ神武神域ノ神々シサヨ。

朝香大將宮〔鳩彦王〕軍事参議官トシテ御来県、紫明館ニテ昼食御陪  
食。佐伯マテ御警衛旁々知事代理トシテ奉送ス。

十月三十一日 木曜

新聞ノ問題ニツキ竹下〔豊次カ〕氏ト議論ス。ツマラヌ男ナリ。  
大蔵省ヨリ官吏来県、紫明館ニテ会食。

三宮殿下ヲオ迎ヘシタ十月モ無事サヨウナララス。

十一月一日 金曜

興亜奉公日ナリ。明日新聞社株式募集ノタメ関係者ヲ集ムルニツキ、  
竹下〔豊次 日向日日新聞社〕社長ト取扱ニツキ意見ヲ異ニス。  
久シブリニテ酒ト縁ヲタチユツクリト夜ヲ過ス。

十一月二日 土曜

新聞ノ問題ニツキ知事ト懇談。午后株主タルベキ者ヲ集メタルモ氣乘  
リセズウヤムヤノ内ニ終ル。不愉快ニテ其ノ俣帰宅。  
夜ハ官界ノ児玉君來訪シ紫明館ニテ会食。深更ニ至ルマデ痛飲。

十一月三日 日曜

三日ニテ部落常会ニテ溝サラヘヲナス。後、関門日々新聞社主催ノ西  
日本高専角道大会ニ行キテ祝辞ヲ述べ、拝賀式ニ参列、国宝表彰ノ式  
典ニ参列、角力見物。全ク忙ハシキ祭日ナリ。  
夜ハ禅院君ト会食。

奈良県会議員連中來県。

十一月四日 月曜

新聞社創設ヲ急グコトトナリ、株式募集ソノ他ノ準備ヲナシ、新聞関  
係者ヲ集メテ協議。連中ノヨリヲモドスコトニ尽力。ナカ／＼ムツカ  
シク不愉快ナモノナリ。

夜ハ武道大会祝賀会アリ。第六区代ギ員会開カレ議長トシテノ要務ヲ  
ツクシ、コレモ紫明館ニテ招宴。

別ニ〔長谷川透〕知事ト呑ミ、オソク帰宅。

十一月五日 火曜

新聞統制ソノ用意ニテ多忙ナリ。関係者ヲ集メテ協議セシム。  
夜ハ神宮ニ〔牧野貞亮〕侍從御差遣ニツキ之ヲ才迎ヘシテ、又県庁ニ  
出デ新聞社発足ニツキ懇談。万難ヲ排シテ本月二十五日發刊ノコトニ  
決定。

十一月六日 水曜

安山〔圭三 日向日日新聞社〕副社長ヲ中心ニ新聞ノ協議ヲナサシム。  
一面定款ノ作成印刷等ヲナサシメ発足ヲ急グ。  
紀元二千六百年式典参列者今夜東上。家ニ歸ヘリテ早く就寝。

十一月七日 木曜

本日ハ知事上京ニテ、新体制支部人選ニツキ新シクイロ／＼相談ヲ得。  
四時退庁ト共ニ乗馬。久シブリニテ一汗ナガシ、夜ハ利光〔晟 宮崎  
地方裁判所検事局次席〕検事ト二人ニテ紫明館ニテ飲ム。深更ニ及ブ。

十一月八日 金曜

留守師団長トナリユツクリス。四時退庁ト共ニテニスヲナス。  
此ノ頃痺〔蕁〕麻疹出デ、又目坊ガ出来テ閉口。コレハ要スルニ運動  
不足ニテ体力弱リタルタメト認メラレ、コレヨリ大奮發、大イニ運動  
ヲスルコトトス。中年ヲ運動デキタヘル必要痛感。

十一月九日 土曜

新聞新社設立モ軌道ニ乗ル。  
午後ハ木下〔英一カ〕君ト馬ニテ一ツ葉ニ至ル。茲ニ三日悠々タル日  
ヲ送り得ルコトトナル。

明日ハ紀元二千六百年式典ニテ、参列者ハ楽シイコトダラウト羨望シ  
ツツ、疲労シテ早く就寝。

十一月十日 日曜

紀元二千六百年祝典施行セラルルノ日ナリ。快晴ニテ那家ノタメ慶賀

二不堪。祝典ニ参列ノ光荣ヲ得ズ残念ナリ。羨望ニ不堪。

神武社頭ニテ式典、引続キ西神苑ニテ県市合同祝典挙行。知事代理ノ職務執行。馬鹿ラシキコトナリ。

午后、同盟ヨリ事業部長来訪、県庁ニテ懇談。三重野〔老吉カ〕氏宅ニ謡曲ニユク。清経ヲアゲ。

十一月十一日 月曜

祝賀会当日ナリ。引続キ快晴ニテオ目出度キコトナリ。

公務閑散。退庁後テニスヲナス。秋季演習ニテ兵隊サン二名宿泊。愉快ナルガ忙ハシクテ俊子閉口。演習ニテ来宮セル藤田少将外佐官級以上ノ連中ヲ公会堂ニテ御馳走ス。

十一月十二日 火曜

兵隊サン引続キ滞在。今夜十一時過出発ノコトトナル。

東京ヨリ村田氏ト知事照会〔紹介〕ノ北條君来訪。紫明館ニテ御馳走ヲナス。深更帰宅。

十一月十三日 水曜

先日来ジシ麻疹出デ酒ヲ呑ムト尚甚シクナルノデ、本日〔高部練兵〕

衛生課長ニカルシウムノ注射ヲ願フ。ソレガ為本日ハ運動セズニ帰宅。家ニ帰ヘリテ夕食スルモ亦良シ。

十一月十四日 木曜

カルシウム注射続行。紀元二千六百年式典参列者続々帰還。安山〔圭三カ〕氏トモ新聞問題ニテ懇談。

夜ハ活動ヲ見ニ行ケルモツマラスノデ間モナク帰宅。

十一月十五日 金曜

例ニヨリ点検操練アリ。今日ハ相当ミツチリヤリ元氣アリタリ。

新聞統制ソノ後次第二進捗。二十五日ヨリノ発刊ニテ一段ノ緊張ヲ要ス。

〔長谷川透〕知事帰庁。宮殿下御成リニツキ御警衛事務打合ヲナス。

十一月十六日 土曜

新聞統制等ニテ来訪多シ。十万円資本中残り一万円アリテ、一万円ノ募集ニツキ三重野〔老吉カ〕宮崎市会議員〔氏ヲ呼ブナド苦心ヲ重ヌ。理想的ニハマイラヌモノナリ。〕

阪野定一〔鹿児島県学務部長 良三ト入省同期〕君来県、久シブリニオ目ニカ、ル。夜ハ軍人招待ノ意味ノ歓迎会アリ。ユツクリト飲ム。

十一月十七日 日曜

飢肥警察署落成式アリテ出席。往復各二時間、相当ニ疲労ヲ覚ユ。尤モ警察署ハ地方ノ有志ノ全体的支援ニヨリ出来タルモノニテ感謝ニ不堪。夕刻六時半帰宅。

十一月十八日 月曜

県参事会アリ、県電気委員会アリ。好イ機会ナルニツキ、新聞ノ問題ニツキ県会議員連中ニ説明ヲナス。

宮崎市ヲ中心ニシテ日高三郎〔宮崎市会議長〕ソノ他新聞統制ニ賛成セヌ連中多ク、投資ヲ得ルニ苦心多シ。

県会始マルニツキ野井〔憲樹 宮崎県会〕書記長ヲ御馳走シテヤリ、後、野村〔嘉久馬〕議長ト安山〔圭三カ〕ノ問題ニツキ懇談。深更帰宅。

十一月十九日 火曜

新聞ニ関シ安山氏ノ問題ニツキ本人ト会フ。意見強固ニシテ致方ナク妥協ノ方法ヲ講ズ。

県会本日ヨリ始マリ、午前中神武様参拜。午后知事予算説明アリ。知事予算説明ナド聴ク暇モナシ。新聞問題ニテ多忙ナリ。夜、安山氏ト会ヒ新聞ニツキ懇談。協調スルコトトナル。

十一月二十日 水曜

新聞ノ株式払込ノ問題ニツキ一日中奔走、多忙ヲ極ム。日高三郎氏ナド帰ヘリ、投資問題ニツキ関係者ノ動き活発トナル。

賀陽宮〔恒憲王・敏子〕両殿下、夜六時三十三分着ニテ御来県、紫明館御投泊被遊、本日夫妻同伴ニテ御陪食ノ光栄ニ浴ス。

十一月二十一日 木曜

地元宮毎、宮新両新聞ハ昨日付ヲ以テ発行ヲ休止シ、本日ヨリ地元新聞ナキコトトナル。

賀陽宮両殿下、本日午前中両神宮ト青島、八紘台御参拝御視察ニテ、御警衛扈從申シ上グ。殿下ノ同伴ヲ申スコト何ト言ツテモ有リガタキコトナリ。

午后二時、宮新楼上ニテ新シキ新聞ニ従事スル者ニ対シ訓示ヲナス。新聞人ニ対スル訓示ハ始メテナリ。

十一月二十二日 金曜

御警衛、新聞問題相ツギ多忙ナリ。投資者ノ問題ニツキムツカシイ問題多シ。

ノモンハン方面郷土部隊長トシテ新シク出征ノ部隊長歓迎会アリテ、夜ハ宮殿下奉迎各種事務打合ヲナシ、深更帰宅。

十一月二十三日 土曜

国幣小社津〔都〕農神社ニ新嘗祭幣帛供進使トシテ参向。同社ハ大黒主命ヲ奉祀セリ。

帰宅後〔日向建国〕博覧会ヲ見ルナド一寸暢気ナトコロアリ。夜ハ土木会議ノ招宴アリテ紫明館ニ至ル。

十一月二十四日 日曜

午前六時五十一分宮崎駅発、高松宮〔宣仁親王〕殿下才迎ヘノタメ佐伯ニ向フ。早クテ閉口ナルモ、公務致方ナシ。佐伯ニテ三時間程待チ、殿下ヲ才迎ヘシテ旅館マデ同伴申シ、夜ハ御旅館紫明館ニテ御陪食ニ預ル。光栄コレニスギズ。尤モ今度ノ御警衛ハ大任ナリ。

十一月二十五日 月曜

紀元二千六百年奉祝会各行事アリ。先ヅ第一境域ソノ他ノ奉献式、右奉告祭、直会ナド何レモ奉祝会ノ行事ニシテ、佐々木〔行忠〕侯爵仕会ノ下、殿下ノ台臨ヲ仰ギ壯嚴ニ举行セラレ、午後ハ八紘ノ基柱竣工式ニ殿下台臨アラセラル。厳肅極マリナキ行事ナリ。夜ハ更メテ御陪食許サレ、市民ノ提灯行列ナドアリ。泉亭ニテ〔中山正善〕天理教管長ナドトオソクマデ飲ム。



十一月二十六日 火曜

中山君ナドヲ自動車ニテ鶴戸神宮ニ案内セシム。

本日ハ大日本青年団西部動員大会各種行事ニ〔高松宮宣仁親王〕殿下  
台臨、幸ヒ昨日ヨリ二日ツヅキ好天候ニテ何ヨリ幸セナリ。

夜ハ更〔厚〕生省主催、宮崎ウネビ駅伝競走出発式ニ台臨、夜ノコト  
トテ御警衛ニ苦心一方ナラス。結局十時十六分発、無事殿下ヲオ送り  
申シ上ゲ、ヤット胸ナデオロセリ。

十一月二十七日 水曜

大任無事終了セルモ安心シテユツクリスルノ暇ナシ。大政翼賛会支部  
役員詮衡ニツキ、知事ノトコロテ部長相集リ協議会アリ。

久ブリニテ水曜会ヲ開ク。

午后ハ久シブリニテ署長会議ヲ開キ、打合終了後、紫明館ニテ晚餐ヲ  
共ニス。

十一月二十八日 木曜

紀元二千六百年奉祝警防団警防報国祈誓大会開キ宮崎神宮マデ行軍。

午后ハ事務打合会ヲ開ク。

山川寛〔鉄道省門司運輸事務所長〕君来訪。弥太家デ飲ミ深更マデ将  
棋ヲサス。

十一月二十九日 金曜

県会開カルコトトナル。総体質問ナルモ低調ナリ。公務多忙ナリ。

夜ハ日名子〔実三〕彫刻家「八紘之基柱」の制作者〕氏ヨリ一同ヲ  
紫明館ニ案内セラル。宴会モ毎日ツツクト却ツテ閉口ナリ。

十一月三十日 土曜

総体質問第二日ナリ。日高〔源次 宮崎県会議員〕氏ヨリ質問ヲウケ、  
経済警察ニツキ初答弁。

古武道振興大会ノタメ古山会長〔小山松吉カ 日本古武道振興会会  
長〕来県ニツキ紫明館ニテ夕食ヲ共ニス。九時頃帰宅。

十二月一日 日曜

興亜奉公日。古武道大会開催。日曜日トイフモ日曜日ラシキ日曜日ハ  
ズツト無シ。午前八時宮崎神宮前祈願式参列、午前九時ヨリ大会開始。  
ホラ貝、手裏剣ナド見タコトモナキ面白イモノアリ。

県立健康相談所竣工式ニ臨ム。

本日ハ興亜奉公日ニテ家ニ在リテ夕食ヲトル。

十二月二日 月曜

県会総体質問最終日ナリ。質問者九人トカニテ一瀉千里ニ進ム。

夜ハ〔長谷川透〕知事招宴、泉亭ニアリ。深更マデ痛飲、帰途自動車  
ヲマチ悲哀ヲ感ズ。

二、三日来初メテ冬ラシキ寒サトナル。

宮家ニ御礼言上ノ要務ニテ知事今夜上京。

十二月三日 火曜

本日ヨリ分科会ニ入り学務、警察一緒ニテ、学務ヨリ進ムコトトナル  
警察ハ後廻ハシトナル。

新聞ノ問題モ一寸手ガツカズ、県会中却ツテ忙中閑ヲ得。夜ハ日高君  
ヲ紫明館ニ招待。深更マデ馬鹿話シラシテ遊ブ。宮地〔昌幸カ 警察

部情報課長) 君同席。

十二月四日 水曜

新聞ノ問題ニツキニ、三手当テヲナス。

夜ハ日名子〔実三〕氏ヲ招キ慰勞会ヲナス。深更帰宅。

毎日オソクナリテ閉口ナリ。

十二月五日 木曜

西園寺〔公望〕公国葬。廃朝ナリ。県会モ弔意ヲ表シ休会。

延岡市会議員選挙、違反続出ノ傾向アリテ、督励ニ延岡市ニ出張。

夜ハ家ニ在リテ夕食、久シブリニテユツクリトス。映画モ休メルニツキ散髪。

十二月六日 金曜

謡曲ニ熱中。公務閑散。早ク退庁。子供等ト共ニ夕食。コノゴロ毎日徒歩ニテ往復。

十二月七日 土曜

午后四時頃、新聞社ヲ廻ハリテ帰宅。家ニ在リテ夕食。此ノ頃ハ又成續良シ。

夜ハ新聞ノ整理ソノ他勉強。

十二月八日 日曜

日曜日ナルモ連中多忙ナリ。

大政翼賛会支部発会式、公会堂ニアリ。県下市町村長連中集マリ午后

一時ヨリ開会。講演アリタルモツマラヌタメ途中ヨリ引キ上ゲテ、謡曲ノ会ニ行ク。篠原〔勲平 宮崎地方裁判所〕予審判事ニ会ヒテ、帰途仲道事件懇談。夕食後早く就寝。

十二月九日 月曜

県会開会中ナルモ本日ハ途中一寸閑散ヲ得。家ニ在リテ夕食、県会分科会用意ナドヲナス。

十二月十日 火曜

鹿児島県会トノ懇親会アリ。午后柴田〔高義カ 宮崎県学務部長〕、大塚〔兼紀カ 宮崎県経済部長〕両君トテニスヲナス。紫明館ニテ宴会アリ。深更マデ痛飲。

十二月十一日 水曜

鹿児島県トノ懇親協議会終了。裁判所ニ篠原氏ヲ訪フ。紫明館ニテ囲碁、終リテ夕食ヲ共ニス。

十二月十二日 木曜

県会予算分科会開カル。午前ヨリ午後ニ互リ僅カノ質疑アリタルノミナリ。

夜ハ紫明館ニテ懇親会、猪肉ニテ飲ム。始メテ美肉ヲタバテ愉快ナリ。議員連中モ面白ク痛飲。才蔭デ袴ガ酒デ台ナシトナル。

十二月十三日 金曜

分科会終了。結局新聞問題ヲ論議サレタル訳ナリ。

夜ハ興銀ノ宴会アリ。宴会モ続クト閉口ナリ。

十二月十四日 土曜

快晴。朝〔渡辺喜逸〕刑事課長来訪。延岡高女女教諭殺害サレ居ル趣

ニテ、刑事課長同地ニ急行ノコトナル。

宮崎競馬本日ヨリ始マリ、午后監督旁々見物ニ出カク。

夜ハ九州奥村〔茂敏 九州水力電気〕総務部長ノ招宴アリテ紫明館ニ

至ル。池田君共ニ来リ別室ニテユツクリ懇談。

十二月十五日 日曜

朝久シブリニテユツクリ寝ム。

奥村氏来訪要談。刑事課長ト共ニ競馬見物ニ出カク。天気良クテ気持

チ良ク見物。久シブリニテ家ニ在リテ夕食。

十二月十六日 月曜

県会最終日近ヅキ大団円トナル。結局新聞統制ノ問題ニテ最後マデヤ

カマシ。夜ハ紫明館ニテ〔根井久吾 宮崎〕市長招宴。

十二月十七日 火曜

新聞統制ノ問題ニテ午前中全員協議会ニテ相当ニヤカマシ。一応マト

マリ午后本会議。案外アツケナク終了。

夜ハ〔野村嘉久馬〕議長ノ発議ニテ県会連中県庁側ヲ招待。

十二月十八日 水曜

先日木下〔英一〕特高課長兵庫県ニ転出ノコトトナリ、本日紫明館ニ

テ送別会ヲ開ク。毎日ノ宴会ニテ閉口。県会終リテ閑散。

十二月十九日 木曜

新聞統制問題ニテ〔長谷川透〕知事ト意見合ハズ。

平田〔健吉 陸軍中将〕砲兵監来宮。紫明館ニテ晚餐。知事今夜発上

京。

十二月二十日 金曜

公務閑散。ヤツトユツクリス。

夜ハ水曜会ニテ木下君送別会。本日ハユツクリ飲ム。

十二月二十一日 土曜

木下君出発、駅頭ニ送ル。競馬見物。競馬場ハ見晴ラシ良ク気持チ良

シ。

夜ハ武道大会優勝セルニツキ教士連中慰勞会、延引シナガラ本日開ク。

深更ニ至ルマデ一緒ニ痛飲。

十二月二十二日 日曜

朝ユツクリ寝ム。午后ノ汽車ニテ刑事課長ト共ニ延岡市ニ出張。林絢

子氏〔延岡高等女学校教諭 十三日に殺害〕遭難後ハヤ十日トナリ、

延岡署ニ激励ノタメ出張。夜ハ特ニ署ニテ刑事連中ヲ集メテ協議。丁

度利光〔晟〕検事モ一緒ニテ、深更ニ時半マデ話ス。菊池旅館投宿。

十二月二十三日 月曜

朝ユツクリ寝ム。福岡指紋庁ヨリ犯人指名シ来リ、ニハカニ活気ヲ呈ス。一縷ノ不安アリ。犯人ノ捜査ヲススムルニ從ヒ不安ツノレリ。一日中カレコレ捜査ノ結果、結局指紋照合ノ間違ノコト判明。一同ガツカリス。致方ナシ。  
夜十時半帰宮。

十二月二十四日 火曜

練習所教習生卒業。武徳会支部納会。行事多シ。教習生卒業ニ伴ヒ警部補以下警察官移〔異〕動発令。  
夜ハ紫明館ニテ情報課転出入者ノ送迎会、深更マデ飲ミ歌ヒオドル。

十二月二十五日 水曜

朝ユツクリ床ニ在リ。久シブリニテホントウノ休日ヲナス。  
宮地〔昌幸カ 情報課長〕、池田〔聖カ 警部補 二十四日付で経済保安課兼商工課勤務から情報課勤務へ転任〕君ナド来訪。

十二月二十六日 木曜

年末モ押シ迫リ心セハシキコトナル。  
朝〔町村金五カ 内務省大臣官房〕人事課長ヨリ来信アリ。拓務省ニ転出シナイカトノコトナリ。  
湯河君ノ結婚ノコトニツイテモ同時ニ手紙アリ。  
拓務省ニ転出ノコトハ一身上ノ重大問題ナルニツキ終日念頭ヲ離レズ。考ヘ抜ク。結局断ルコトトス。  
知事慰安会、〔野村嘉久馬〕議長、〔小田彦太郎〕副議長ト共ニ紫明館ニテアリ。

十二月二十七日 金曜

朝早く起キテ人事課長宛返事ヲ書ク。ムツカシイ返事ニテ閉口。結局断リノ手紙ヲカク。遅ク出勤。  
宮バスノ総会アリテ恒例ノ宴会泉亭ニ在リ。

十二月二十八日 土曜

御用納メナリ。式、才祓ヒ、神社参拝ナドアリテ午后二時頃帰宅。ノンビリシタ御用納メナリ。  
昨年年末ト比ベテ今昔ノ感ニ堪ヘズ。女中、午后約二ヶ月振りニテ帰来。情報課員一同掃除ノ手伝ヒニ来ル。年末掃除ニ多忙ナリ。一寸遅レ気味ニテ忙シ。夜ハ紫明館ニテ奉祝会慰労会アリ。

十二月二十九日 日曜

掃除延長。何かト多忙ナリ。一日中家庭奉仕ナリ。相川〔勝六 広島県知事〔前宮崎県知事〕〕先長官、八紘台等視察ニ来県。県公会堂ニテ一般歓迎会、引続キ紫明館ニテ歓迎会アリ。深更ニ至ルマデ痛飲。

十二月三十日 月曜

延岡署慰問ノタメ出張。夜ハ宮崎署歳末警戒激励。紫明館ニテ飲ム。

十二月三十一日 火曜

午を買物旁々市内散策。良彦、博ヲ連レテユク。忙ハシイナガラ夜ハ早く就寝。  
光輝アル紀元二千六百年ヲ送ル。

## 解説

### 内務官僚奥田良三と宮崎の「光輝アル紀元二千六百年」

上西晴也

#### 一 はじめに

「奥田良三日記 昭和十五年」(以下、「日記」)は、内務官僚奥田良三(一九〇三〜一九八九、以下、良三)が、昭和十五年一月から十二月にかけて記した日記である。前年同様、福岡の百貨店玉屋で購入された当日日記にペン字で記入され、一日最大百字程度の記述が、空白なく継続的に記入されている。遺族の証言によれば、良三は生涯にわたって日記を記していたものと思われるが、現存するのは昭和十四年、昭和十五年の二冊のみである<sup>(1)</sup>。

「日記」において、良三の身上に起こる大きな変化が、三月八日に発令された、福岡県農務課長から宮崎県警察部長への異動<sup>(2)</sup>である。三月七日、前年に引き続き、農務課長として、早魃対処のための政府米払い下げの手当てに忙殺される日々を送っていた良三のもとに、「寝耳二水」の異動の知らせが飛び込んでくる(「日記」三月七日条)。

前稿の「解説」で述べたように、昭和十一年九月福岡県商工課長に着任以来、商工課、農務課と経済畑の課長職に三年半にわたって留まり続けていた良三は、部長への昇進を待望していた<sup>(3)</sup>。経験がない警察部への転任は「全ク寝耳二水ニテビツクリセル」知らせであったが、大きな喜びだったと考えられる。「愉快ナリ」(三月八日条)、「警察部長トシテノ乗り込ミハ愉快ナリ」(三月十一日条)、「痛飲馬食、愉快ナリキ」(三月十九日条)、「警察部長トシテ始メテノ会議ナルガ洵ニ愉快ナリ」(五月十五日条)と、たびたび警察部長に就任した「愉快

快」を記している。

一方、新任警察部長を迎える宮崎では、良三はその経歴から「経済通」<sup>(4)</sup>「米穀通」<sup>(5)</sup>と紹介され、また「子福長者」<sup>(6)</sup>、「酒嫌の方ではなく隠し芸の一つも飛出すと言ふ明朗さ」<sup>(7)</sup>といった評判が伝えられていた。以下では、日記の流れに沿って、(1)県政問題、(2)県電問題、(3)新聞統合、(4)皇紀二千六百年奉祝、の四点を中心に、警察部長奥田良三が遭遇した、当該期の宮崎県政の主要な問題を概観したい。

#### 二 県政の混乱と警察部人事異動

皇紀二千六百年を控え、宮崎神宮を擁する「肇国」の地宮崎では、昭和十二年七月に着任した相川勝六知事のリーダーシップのもと、精勤運動の推進などの精神運動と、県営電気事業、川南原国営開墾事業、記念造林等の紀元二千六百年記念事業が推進されていた。良三着任時の知事長谷川透への交代は昭和十四年九月だが、この時点で、県庁の四人の部長のうち、学務部長上塚弘、経済部長多田雄次郎、警察部長本田忠男はいずれも一年半以上在任しており、総務部長遠山信一郎のみ、四月に着任したばかりだった。遠山は長谷川とは東大法学部で同期の間柄であり、二月には県庁では稀少な、知事以外で勅任官待遇を得た官員となっていた<sup>(8)</sup>。長谷川よりも着任が早く、県営電気建設部長、県精勤事務局長などの職を兼帯する遠山総務部長は、地元新聞からは「副知事的地位を占め」<sup>(9)</sup>ているものと目されていた。長谷川の知事着任後、県庁では皇紀元二千六百年奉祝会事務局、祖国振興隊などの機構改組が進められたが、これらは遠山の意向が強く反映されたものと見なされていたのである<sup>(10)</sup>。

良三が着任する三月前後は、長谷川・遠山の県庁運営に対する不満

が県政界・メディア界の中で高揚し、政治問題化した時期であった。二月十九日に行われた、地元出身の地方課長谷川高德の課長職を解いて県奉祝会事務局専従とする人事をきっかけに、地元有力紙『宮崎新聞』が、二十日から二十五日にかけて連日、県庁人事を批判する記事を掲載した。『宮崎新聞』はさらに、二月二十六日から三月三日にかけて、「県政想観」と題したコラムを連載し、・宮崎放送局の紀元二千六百年記念放送での総務部長の演説内容・県奉祝会事務局の機構改組・県会議長柿原政一郎との対立などを論点として遠山総務部長批判を大々的に行った。

これを受けて、三月七日、長谷川知事は県政記者団に対して、『宮崎新聞』を名指しで批判し、「総務部長攻撃新聞記事の責任者」である宮崎新聞社長仲道政治に県奉祝会委員を辞任させること、「県政批判演説会の計画等」に関係した県会書記長野井憲樹の県会史編纂事務嘱託を解くことを発表した<sup>(14)</sup>。四月十一日、全国総務部長会議から帰県した遠山総務部長も、「県政を攪乱する不良分子の排撃に関しては本省も県政振興上重大問題であるとして肅清工作には十分援助するから遠慮なくやれと激励されたので今後は大いにやる考へだ」と述べ、全面対決の姿勢を示した<sup>(15)</sup>。反総務部長勢力の排除については内務本省のお墨付きを得ている、という主張である。なお、この間、三月八日に交代した警察部長に続き、四月十日には学務部長と経済部長が交代し<sup>(16)</sup>、県庁の四人の部長のうち、総務部長以外の全員が相川前知事時代から入れ替わっている<sup>(17)</sup>。

他方、こうした県庁の体制をめぐる対立は、宮崎県政界の派閥対立とも連動していた。宮崎県会には元来、県政倶楽部（政友会）、民政党、丁巳会（中立）の三派が存在していたが、昭和十二年の通常県会

において「よろしく三者一体となり、渾然融和して、県会の挙国一致の実をもって示」すべく政党解消が決議され、県会最終日の十二月二十一日をもって各党派は解散していた<sup>(18)</sup>。しかし、昭和十五年時点においても、旧政友会系の野村嘉久馬の一派と、旧民政党系の柿原政一郎の一派が激しい勢力争いを繰り広げており、良三が赴任した時点では両派が交替で正副県会議長を出すという密約のもと、柿原派の柿原政一郎が議長、同じく小田彦太郎が副議長に就いていた<sup>(19)</sup>。柿原派が遠山総務部長と対立する一方で、「野村派と市町村長県会議員は総務部長及び県支持の空気が濃厚」であり、三月中旬の県会内において、柿原派は「正面に県と確執し背後に県会多数の反対を受け頗る苦境」の状況であった。結局、三月十三日の臨時県会において、柿原政一郎は議長を辞任し、野村嘉久馬が後任に就くこととなる<sup>(20)</sup>。

良三が宮崎に到着した三月十一日は、県会では参事会が開催されて各派間の工作が活発化している最中、県庁内では学務部長上塚弘が県奉祝会副会長を辞任する直前であり、県政が混乱を極めている中で赴任であった。親遠山総務部長、親柿原派のどちらの立場からも「人事の刷新」「県政の明朗化」が主張される中<sup>(21)</sup>、警察部においても部長交代によってただちに大幅な人事異動が行なわれることが確実視されており、地元紙ではその内容に注目が集まっていた<sup>(22)</sup>。

四月七日になって長谷川知事と「警察部人事異動ニツキ隔意ナキ意見交換」を交わし（四月七日条）、異動の打診を開始（四月八日条）した良三は、四月二十四日に至って、老年の警察署長三名を退職させる「大異動」を「断行」し（四月二十五日条）、「コレニテ着任以来ノ懸案解決」することとなる。「日記」には「異動評判良キガ如シ。」（四月二十四日条）、「各新聞大体評判良シ。」（四月二十五日条）、「異

動益々評判良シ。」(四月二十六日条)と、良三が新聞紙上での評判を気にしている様が記述されている。警察部内の異動はその後八月二十日、九月二十五日、十二月二十四日(各日条)に行なわれたが、良三が「異動評判」について特記したのは四月の異動の時のみである。それは、単に部長としての初采配だったからだけではなく、県庁人事が県政上の一大争点となっていたからこそだと見えよう。

### 三 県電問題

前節で述べた、長谷川知事―遠山総務部長／野村派と柿原派の対立において、大きな争点となっていたと考えられるのが、県営電気建設問題である。<sup>(23)</sup>

以下、主に『宮崎県電気復元運動史』および梅本哲世の研究により、宮崎県の県営電気事業について概観する。宮崎県は、発電に適した河川を多数擁する、九州地方最大の水力電源県であり、第一次大戦以降、多数の県外大資本が水利権獲得競争を繰り広げていた。<sup>(24)</sup>これに対して、大正九年には、九州水力電気、九州電灯鉄道等の県外資本が、五ヶ瀬川の水利権獲得の受け皿として九州送電株式会社を設立するに際して、県内で大規模な「県外送電反対運動」が発生した。<sup>(25)</sup>この結果、県は各電力会社との間に、水利使用寄付金の納付、発電量の五割までの県内優先供給、県内の電気料金最恵待遇を条件とする覚書を結んだ。<sup>(26)</sup>しかし、その後、県内の電力需要の乏しさから県内優先供給の条件は形骸化し、<sup>(27)</sup>一九三〇年代初頭には、福岡の九州水力電気が宮崎県内の電源の大部分を掌握するに至った。<sup>(28)</sup>

他方、大正七年の通常県会において水力電気事業県営の建議が採択されたが、財政難のためすぐには具体化しなかった。県が県営電気事

業の創設に動き出すのは、一九三〇年代後半に、県内の大川で唯一水利権未許可だった小丸川の開発計画が浮上してからである。<sup>(29)</sup>昭和十二年の通常県会において、小丸川水力発電事業を、国営で予定されていた川南原開墾事業と一体で実施し、両者を紀元二千六百年記念事業に位置づけることが決議され、政府に対する県営電気認可の運動が開始された。<sup>(30)</sup>

県電認可の功労者として語られているのが、宮崎市長柿原政一郎(在任一九三五年七月―一九三七年六月)<sup>(31)</sup>と、宮崎県知事相川勝六(在任一九三七年七月―一九三九年九月)<sup>(32)</sup>である。柿原自身の回顧によれば、電力国家管理法案が議会で審議される直前の昭和十四年一月下旬、柿原、岩切正、日高源次の三県議、県会書記長野井憲樹、宮崎新聞社長仲道政治らが上京工作を行い、二月に相川知事が関係官一同とともに願書を持って上京し、内務・通信両省の認可を得たという。<sup>(33)</sup>

県営電気の事業計画は、電力需要の逼迫や経済上・資材上の事情からしばしば変更が行われ、昭和十五年初頭の時点では、第一期工事として小丸川下流の川原発電所、第二期工事として上流の石河内第一・第二発電所、第三期工事として支流の渡川発電所が建設される予定であった。<sup>(34)</sup>また、県内で電力を消化するために、高鍋に鉄興社宮崎工場、富島に日本電気製鉄伏見工場が誘致され、いずれも昭和十五年中に操業を開始している。<sup>(35)</sup>

そして、第一期の川原発電所は昭和十五年二月十一日に竣工し、三月四日貯水開始、同十四日通水試験、四月五日竣工式を行って、四月二十二日に発電を開始したが、<sup>(37)</sup>前節で見た通り、この竣工の前後から、長谷川知事―遠山総務部長と柿原派の対立が激化してくることとなる。二月―三月頃の『宮崎新聞』の紙面からは、長谷川と柿原がそれぞれ

上京して、県営電気に関して何らかの折衝を行っていることが確認できる。<sup>(38)</sup>「日記」や新聞において、両者の具体的な争点がどこにあったかの記述は少ないが、一つには、柿原側が三月上旬に「県営電気局」を設置することを主張していたのに対し、遠山は「電気庁あたりの空気がしてその必要なし」としていたことが対立点だったようである。<sup>(39)</sup>

また、柿原の回顧によれば、柿原は「長谷川知事、遠山総務部長により、一時県営工事の直営を廃し、大阪工業会連中に委託経営したらという案が持込まれ」たのに対して、「自分は県会議長のいすを投げ出して県電直営論をがん強に主張した」のだという。<sup>(40)</sup>これについて、四月十三日の臨時県会総体質問では、議員安山圭三が「県営電気に関する問題でありますから、建設部長でありますところの総務部長より明確なる御答弁を得たい」として質問に立った。<sup>(41)</sup>

安山によれば、「最近県営電気に関しましてはなほだ奇怪なる宣伝放送が行なわれて」いるという。すなわち「将来県営電気は第一発電所でありますところの川原発電所の工事だけにして後の第二、第三の発電所はこれはむしろ県営でやらずして大阪方面の資本家をもつてこれを行なわしめるといことが得策であるといことの見を県の首脳部においてお持ちになつていという宣伝」であり、「私が先般上京いたしました際に電気事業に関係をしているところの有力なる知人」からもこの話を聞いたとして、事実かどうか答弁を求めた。

これに対して、遠山は「私はいまだかつてかのごときことを考えたこともなければしたがつてそういうことを人に語つたことも全然ありません」と否定した。遠山は、むしろ「実は昨年の八月の末でございますが、県営電気を発送電をしてやらせるといような空気が中央において動いているということを、当時上京中の渡辺工務課長より相川

前知事に報告」された際、自分が上京して「第二の発電工事ができるように方策を講じてまいつた」として、「第二のかの石河内の工事進行」への自身の貢献を強調する。従つて、「私本件につきましては県の方針をあくまで遂行せしむるとい方針」であり、また電気庁としても、事業を取り上げて日本発送電に行わせる空気の中で「他の事業会社にこれをやらせるといことが理論上から考えても、あるべきはずがない」として、「それらの放送が全然無根なものである」「まつたくデマ放送である」ことを強調した。<sup>(42)</sup>続いて長谷川も、着任以来「県営電気につきましては下僚よりいろいろ話を聞いております」が、「第二期以後の工事を県営でやらずに民間の者をもつてやらせるとい」話は一度も聞いたことがなく、第二期工事の認可と進捗に努力してきたこと、東京においても誤解はないことを答弁している。<sup>(43)</sup>

既述の通り、この四月十三日の県会において柿原政一郎が議長を辞任し、県会内の混乱は終息に向かう。県営電気をめぐるとい話題も一旦新聞紙面上から消失する。しかし、六月後半、工務課長兼小丸川建設事務所長として県電建設の技術面の総責任者であった、渡辺秀幸技師の辞職をめぐつて、問題が再燃することとなる。六月二十四日の「日記」は、「県営電気渡辺工務課長退職ノ問題ニツキ、同氏ヨリ知事ノ申渡ニ応ゼザル旨ノ回答アリタルニヨリ、黒幕柿原氏ト懇談。」すなわち、長谷川知事が渡辺に対して辞職を求め、渡辺が拒否したこと、そこで「黒幕」柿原政一郎との懇談が持たれたことを伝える（同日条）。以後、「ズット静養中ニテ出勤」しない遠山総務部長（六月二十七日条）に代わつて、良三は柿原ら県会有力者との折衝に当たる（六月二十五日条、六月二十八日条）が、話をまとめることはできず、二十八日、渡辺は辞表提出を保留したまま上京する（同日条）。



七月五日、県庁において県営電気建設部が県電気部に改組される一方、柿原政一郎が「県営電気の前途多難を覚ゆる説」と題した意見書を公表した。<sup>(46)</sup>その内容は、①渡辺技師は、県電認可に際して「内務通信両省の技術首脳部に相川知事より我々は素人ばかりだから任せてやらせられる人物」の推薦を特に依頼して得た人物であり、その進退は単なる一県吏の人事として取り扱うべきではない ②時局困難の中、第一期工事を急速に完工させた功績 ③第二期工事が第一期よりさらに難工事となる予測と、全国的な技術者の払底 ④人物資材の欠乏期にあつて今後いっそう中央の援助が必要であり、「渡辺氏の推薦を煩はした中央方面の御意向」を尊重する必要 の四点を挙げて県当局に再考を迫るものであった。なお、「日記」には記されていないが、意見書公表後に柿原と面談したのも良三であり、欠勤を続ける遠山に代わって良三が県電問題の対応を担当していたことがわかる。

柿原が意見書を公表した七月五日には、上京中の渡辺技師からも「退職ノ意思ナキ旨ノ回答」が県庁に届き（同日条）、やむなく、八日に「場合ニヨリ懲戒免職ノコト」を視野に入れて渡辺の停職命令が出される（同日条）。翌九日、渡辺から「知事宛十一日朝帰県し辞表提出する旨の入電」<sup>(48)</sup>があり、依願免職となるか懲戒免職となるか最後の折衝を行うべく、良三も待機していたが（七月十一日条）、渡辺の帰県は予定より遅れた。<sup>(49)</sup>

結局、十二日朝に長谷川・遠山と面会した渡辺は、長時間の懇談の末辞表を提出し、懲戒免職は回避された。午後の記者会見で長谷川は、免職の理由を述べ、第二期工事を大阪の資本に売り渡す噂も、県営電気局設置の主張も渡辺から出たものであるとして、「柿原氏の県に対する誤解も渡辺君から出発したものが多く」と、柿原派との対立の原

因は渡辺の言動にあつたと主張した。

渡辺の免職後も、問題は収束しなかった。渡辺の停職を受けて、七月十一日に県営電気の幹部九名が、県電職員全員の辞表を提出して出県したためである。<sup>(52)</sup>七月三十一日には県会議員全員による協議会が開催されて、長谷川知事と県電問題について懇談した。<sup>(53)</sup>八月十日頃から遠山総務部長、長谷川知事、複数の県議、電気事業委員が次々上京して関係省庁を訪問、<sup>(54)</sup>八月二十七日の臨時県会では県電第二期工事を「予定通竣工せしむるよう資材関係に付特別なる御配慮」を願う意見書が決議され、議長野村嘉久馬・副議長小田彦太郎が上京して関係各大臣に提出することとなった。<sup>(56)</sup>

この間、「例ニヨリ留守師団長」として県庁に残った良三は、「地元ニ於テ技師連中ガガヤ／＼言ヒ居ルガ如シ。」（七月十九日条）、「県営電気ノ問題ニテデマ多シ。」（八月十二日条）、「県電問題相モ変ラズウルサキモノナリ。」（八月十四日条）と、種々の交渉・宣伝が錯綜している様子を記している。

良三が「県営電気ノ問題、例ニヨリゴタ／＼シテ困却。遠山総務部長ノ居ル限り続クモノト考ヘラル。」（七月二十九日条）と書いたように、工務課長の後任や今後の資材配給の手配とともに焦点となっていたのが、総務部長遠山信一郎の進退であった。八月二十九日付で遠山の岩手県総務部長への転任が発令されると、九月一日に県電の幹部三名が長谷川知事に面会し、「電気部長である遠山総務部長の岩手県への転出を機とし」全員の辞表を撤回することを申し入れた。<sup>(58)</sup>県庁と県電現場の間で、遠山の更迭を取引条件とした事実上の手打ちがなされたことがわかる。以後、「日記」で「県電」が言及されるのは、電気事業委員会の開催日と、良三の旧任地である岡山の県会議員の視察

を応対した際（九月十九日条）のみであり、事態は沈静化していったものと思われる<sup>(59)</sup>。

このような、知事・総務部長と県会議長・県電現場がそれぞれになんらかの「中央」の意向をちらつかせつつ対立した、昭和十五年段階での県営電気をめぐる動きは、従来、県営電気事業史の叙述の中では、『宮崎県電気復元運動史』のように全く言及されないか、『宮崎県政八十年史』のように柿原政一郎の回顧の内容がそのままなぞられてきた<sup>(60)</sup>。本解題では、県営電気をめぐる宮崎県内の動きと政府レベルでの電力政策の関係を考察することはできなかったが、「日記」の「県電問題」に関する記述は、宮崎県の電気事業に関して、従来注意されていなかった部分の過程を知る手がかりとなるものである。

県電問題をめぐっては、自らが矢面に立つこととなった六月末以降、「遠山総務部長ノヤリ方ニハ閉口。」（七月五日条）、「結局総務部長ノ人格ニ関スル問題ナリ。」（八月十四日条）と遠山に批判的な目を向けてきた良三だが、遠山が宮崎を去る際には、「送り送ラル、共ニ淋シキモノナリ。役人生活ハアハレナリ。」（九月四日条）と、感傷と共感をもって見送っている。

良三は福岡県時代にも、上司である田村浩経経済部長の退職を「人間一度ハ其ノ時期到来スベク」（二月二十八日条）と書き、「感慨無量」で見送った（三月十五日条）。良三には、「酒嫌の方ではなく隠し芸の一つも飛出すと言ふ明朗さ」の一方で、実家を立つ際に「今後何日帰省出来ルカ一寸見当ノツカヌ別レ」と述べたり（五月二十一日条）、宴会で「痛飲」した帰りに「悲哀」を感じたり（十二月二日条）するように、故郷を離れて任地を転々としていく「役人生活」への無情さ、よるべなさの感覚がある。それが、去りいく同僚に対する、他人事な

らざる感概をもったまなざしにも繋がるのであろう。戦地に肉親を送り出す人々に対しての「同情」「痛惜」（八月七日条、昭和十四年三月二十六日条、同四月二十五日条）もまた、その延長線上に自然に芽生えたものかもしれない。

#### 四 仲道事件、新体制運動、新聞統合

七月から八月にかけての「日記」において、県電問題とともに懸案事項として頻出する話題が「仲道ノ問題」「仲道事件」、すなわち、宮崎県における地元最有名紙であった『宮崎新聞』の社長仲道政治の検挙問題である。『三州日日新聞』によれば、仲道検挙の理由は「バス合同」をめぐる横領<sup>(62)</sup>だったというが、当該期の他の県政問題と全く無関係に起きた事件とは考えにくい。

既述のように、「宮崎新聞」は親柿原政一郎派の立場を取り、<sup>(63)</sup> 県電問題では二月以来遠山総務部長批判の論陣を張って、長谷川知事から名指しで指弾を受けた新聞である。県内紙の中では圧倒的な発行部数を持ち、後の新聞統合に際しても、良三が真っ先に獄中の仲道の意向を窺い（九月七日条）、「新聞合併ノ参考」に「宮新、宮毎両新聞社」を視察した（十月二日条）ように、統合の核となる存在であった。七月前半の「日記」には、政治的に極めてセンシティブな案件であったこの問題について、仲道の身柄確保と情報の秘匿に良三が神経を尖らせている様子が記述されている。

なお、仲道検挙後、特別功労章持ちのベテラン巡查部長であった、情報課勤務立岡辰馬<sup>(64)</sup>の辞職問題が浮上し、立岡は八月二十日に依願免職となる<sup>(65)</sup>。さらに九月二十五日の警察部異動では、四月の異動で情報課長となつたばかりの古藤一衛警部が宮崎県属・健康保険課勤務に移

され、宮地昌幸警部補が警部に昇任して後任となった。<sup>(67)</sup>「日記」からは、七月中にすでに立岡巡查部長に関して何らかの問題が起き（七月六日条、七月二十一日条）、辞表提出が良三からの要求によるものであること（七月二十二日条）、立岡辞職時にはすでに「情報課長交代問題」が考慮されていること（八月二十日条）が確認できる。

九月の警察部異動は「新体制に即応」するものと観測され、この頃から新聞紙面には、保安課長や特高課長による、新体制推進や防諜意識向上を宣伝する寄稿がしばしば掲載されるようになる。<sup>(69)</sup>とりわけ、十二月二十四日の警察部異動は情報課と経済保安課の増員を中心として行われており、<sup>(70)</sup>当該期の宮崎県警察部に、新体制運動下の時局に対応するための情報警察・経済警察強化の意図があったことは疑いない。<sup>(71)</sup>他方で、八月～九月の情報課をめぐる人事は、情報課からの情報漏洩の疑い（七月十三日条）があった仲道事件が、直接的な要因であった可能性も考えられよう。

九月以降の「日記」の中心的な話題となるのが、「新聞統合」「新聞統制」である。里見脩によれば、新聞統合は昭和十三年八月、第一次近衛内閣の末次信正内相により、「その発想は戦時下の思想取締りの強化と検閲作業の円滑化、紙パルプ（新聞用紙）の節約という消極的言論統制にあり、統合は新聞側の自発的廃刊という手段を用いる」企図で開始された。<sup>(72)</sup>その過程は「悪徳不良紙」が整理された第一段階（昭和十三年秋～十五年五月）、「弱小紙」が整理された第二段階（昭和十五年六月～十六年八月）、「一県一紙」が完成した第三期（昭和十六年九月～十七年十一月）の三期に時期区分される。<sup>(73)</sup>しかし、統合の根拠法令が制定されなかったため、「あくまで新聞の自発的意思により、それを地方庁（都道府県）が指導（懇諭）することを建前とし

ており内務本省の主導は隠蔽する必要があった」ため、「都道府県の新聞統合の進捗は不揃いで、その要因として各地方の新聞の分布状況や、地域的特性、さらに地方紙の統合に対する意識などが挙げられる。なかでも、各地方庁（都道府県庁）の長官（知事）や警察関係者の熱意の強弱が、進捗に大きく作用した」という。<sup>(74)</sup>

里見は、宮崎県を、第二段階中に「一県一紙」を完成した十一県の一つに位置づけ、「全国紙や福岡日日など他県紙が激しく侵入し、一方の地元紙は有力紙がなく弱小紙が競い合っているという分布構図」から、早期に地元紙自身による統合働きかけが存在していたことを指摘する。<sup>(75)</sup>実際の統合は、相川勝六知事のリーダーシップによって進められ、一九三九年六月には地元日刊紙社長の会合により

- ①「紀元二千六百年記念」と銃後強化のため現在の日刊十一紙を解体し、新体制組織に参加する
- ②実行の時期ならびに方法は県当局の斡旋に白紙一任する
- ③新体制による新聞の第一号発刊と同時に各紙は廃刊することが申し合わされた。そして、後任知事長谷川透によって、昭和十五年九月時点の現存九紙に対して九月二十日までに自発的廃刊届提出が要請され、「八紘之基柱」竣工式に合わせた十一月二十五日に『日向日日新聞』が設立されたと概観している。<sup>(76)</sup>また、里見も記述の多くを依っている『宮崎日日新聞社史』は、日向日日新聞社の人事は県当局の主導によって「幹部には整理統合の対象となった新聞の社長級の大半を当てるといふ、いわば『呉越同舟』の観があった」と述べ、<sup>(77)</sup>統合の主導者として長谷川知事と並んで奥田良三警察部長の名を挙げている。<sup>(78)</sup>

「日記」において、新聞統合の話題が初登場するのは、八月十七日、

「新聞統合問題モ機愈々熟シ、立案着手スルノ決意ヲ固ム。」という一文においてである（同日条）。以後、八月中は言及がないが、九月五日、上京して内務省を訪れていた特高課長木下英一が帰県する。翌日の『宮崎新聞』には、次のような木下の談話が掲載された。

「文化部門の新体制として地方新聞の統制は重要である。新聞紙法の改正も今議会に提案されることになるが、それよりも各府県では政府の方針をくみ其の趣旨を体して率先して新体制に即応して貰ひたい。そのためには中央新聞の地方進出も或る程度は阻止する。統制の理想としては一県一紙であるが地方の事情によつては必ずしも一紙とは限らぬ。この方針で懸案解決に進みたいと思ふ」<sup>(79)</sup>

右のように、公表された談話は必ずしも「一県一紙」の方針を断定はしていないが、「日記」からは、良三が「一県一紙トシテ速急ニ着手スル」のが「内務省ノ意嚮」に沿う方針と捉えていたことが窺える（九月五日条）。以後、「日記」には九月七日から九月二十二日にかけて、各紙の社長と面談し廃刊届を提出させていく様子が描かれている。ついで十月二日以降は、貴族院議員竹下豊次、その側近有村忠恕、<sup>(80)</sup> 県議安山圭三ら首脳部予定者との交渉が、十一月初頭からは新会社立ち上げのための具体的な手続きに入っていく様子が記され、各紙廃刊から『日向日日新聞』発足までの流れを追うことができる。

「日記」には、良三が新社長の竹下（十月三十一日条）、新副社長の安山（十一月十九日条）、廃刊各紙の幹部（十一月四日条）、長谷川知事（十二月十九日条）とそれぞれ意見対立し、議論となっていることが記されているが、とりわけ良三が苦心したのが、新会社の株式募集問題であった。十一月二日、「新聞社株式募集ノタメ関係者ヲ集ムル」に際しては竹下と意見が一致せず（十一月一日条）、またその会

合は「気乗りセズウヤムヤノ内ニ終ル」結果となった（同二日条）。募集難航の背景には「宮崎市ヲ中心ニシテ日高三郎（宮崎市会議長）ソノ他新聞統制ニ賛成セヌ」反対勢力の存在があり（十一月十八日条）、良三は趣味の謡曲で指導を仰いでいた（九月一日条、十一月十日条）宮崎市会議員で財界有力者の三重野老吉に助力を要請するなど「苦心ヲ重ヌ」（十一月十六日条）こととなる。「日記」は、『宮崎日日新聞社史』が「県知事、警察部長が積極的に進めた、資本金十九万円五千元の株式会社を設立する当初計画が支障を来たすと、資本金を十万円に減額する苦肉の策がとられた」と叙述する、<sup>(82)</sup> 宮崎の「一県一紙」完成前夜の過程と、そこでの新聞統合をめぐる宮崎政財界の分裂・反対の様相を明らかにする史料と言えよう。

##### 五 官僚奥田良三と「光輝アル紀元二千六百年」

「奥田良三日記」の昭和十五年は、奈良県生駒郡筒井村（現…大和郡山市筒井町）の実家で正月を迎えた良三が、郷里を立つ前に「一人ニテ紀元二千六百年ノ檀原神宮ニ参拜」するところから始まり（二月六日条）、十二月三十一日、宮崎の官舎で就寝する際の「光輝アル紀元二千六百年ヲ送ル。」という一文で締めくくられている（同日条）。檀原神宮を擁する奈良県に生まれ、前年から神事と皇室に対する敬慕の心情をしばしば「日記」に記してきた良三にとって、官僚として「光輝アル紀元二千六百年」の一年を過ごすことには特別な感慨と意気込みがあったものと思われる。二月十一日、紀元節の日には特に「紀元二千六百年紀元節ナリ。千歳一遇、栄ユル御世ニ会ヘルヲ想ツテ愉快ナリ。」と記している（同日条）。

三月の宮崎県警察部長への異動に際して、「日記」には任地が宮崎

であることについて特に感想は記されていない。しかし、着任時の記者会見において、良三は「皇紀二千六百年にあたり聖地日向に赴任して来たことは、私としてこの上もない喜びを感じます。発展途上にある聖地日向の治安維持の重責を負ふた私は皆様の御協力と御後援により職責を全ふする覚悟です」と語っている<sup>(84)</sup>。新聞の側でも「奥田部長の人間味はその出生地大和の国奈良県と並ぶ大聖地日向の県民性とピツタリ呼吸が合ふのではないだらうか」と、良三が奈良県人であることが好意的に取り上げられた。「皇紀二千六百年」の「二大聖地大和・日向」という縁は、良三自身意識するところがあり、新任地に溶け込むためのとっかかりとなるものでもあったのだろう。着任後、良三は県内の神社・聖地を順次訪れ、特に高千穂と鶴戸神宮では「高千穂峡見物。古代ノ神事ヲ偲ブ。」(三月二十二日条)、「途中鶴戸神宮ニ参拜。豪壮雄大ナル神域ニ感激オクトコロヲ知ラズ。全ク他ニ類ヲ見ザル結構ナ神様ナリ。」(三月二十四日条)と「感激」を記している。

その宮崎では、紀元二千六百年にあたって、様々なレベルでの奉祝行事が進行中であった<sup>(86)</sup>。以下、『宮崎県史』によって、良三と直接関係する県レベルの動きを概観する。宮崎県では昭和十二年二月に知事を会長とする紀元二千六百年祝典宮崎県奉賛委員会(後に紀元二千六百年宮崎県奉祝会)が設置され、

- ① 県内全神社の祭典執行
- ② 上代日向研究所の設立
- ③ 八紘一字の御柱の建立
- ④ 神武天皇の聖蹟保存顕彰
- ⑤ 遠祖慰霊祭の執行

の五大記念事業が企画された他、既述のように県営電気事業、川南原国営開墾事業、記念造林などが関連事業に位置づけられていった。また、中央においても、昭和十三年七月に宮崎神宮神域拡張整備が檜原

神宮の整備に次ぐ第二位の行事に位置づけられ、宮崎県は三六万円の予算を獲得した<sup>(87)</sup>。そして、昭和十五年十一月の奉祝式典挙行に際して、県は次のような方針を示して奉祝を行っていった。

一 市町村・学校・各種団体・会社・工場・鉱山などにおける奉祝式の実施。

二 東京の式典での万歳奉唱時に、宮城遥拝と万歳三唱を行う。

三 各戸国旗の掲揚。

四 神社において臨時祭典を執行し、多数参列すること。

五 実情に応じ講演会・演芸会・競技会・団体行進などをおこない、奉祝の熱意を表明するとともに、戦時下国民の士気を昂揚する催しをおこなう。実施例として武道大会・体育大会・講演会・映画会・素人芝居・郷土舞踊大会・音楽行進・勤労奉仕など<sup>(88)</sup>。

「日記」から窺える、警察部長奥田良三にとつての奉祝行事挙行にあつての最大の関心は、皇族の警衛である。紀元二千六百年の宮崎には、宮崎神宮参拜、軍事演習、そして各種行事への臨席のため、次のように皇族が続々来県した。

東久邇宮稔彦王 五月十二日～十三日

久邇宮朝融王 七月二十日

東伏見宮依仁親王妃周子・照宮成子内親王 十月十八日～二十二日

朝香宮鳩彦王 十月三十日

賀陽宮恒憲王・同妃敏子 十一月二十日～二十一日

高松宮宣仁親王 十一月二十四日～二十六日<sup>(89)</sup>

「日記」には、「本日が殿下御警衛上最モ戒心ヲ要スルノ日デアル。」(五月十三日条)、「御警衛上差支ヘアリ。本日取急ギ御成り先キヲ見分ス。」(十月十日条)、「御警衛、新聞問題相ツギ多忙ナリ。」(十

一月二十二日条)、「尤モ今度ノ御警衛ハ大任ナリ。」(同二十四日条)、「夜ノコトトテ御警衛ニ苦心一方ナラズ。」(同二十六日条)と、皇族警衛についての「戒心」「苦心」が多く記される一方、各種行事に際して自身の出席と皇族警衛以外の業務について特記されることはほとんどない。

皇族を奉迎することは、職務上の責任だけでなく、良三自身にとつての最大級の喜びであり、やりがいでもあった。以下に見るように、昭和十四年の「奥田良三日記」においては、御真影伝達式を知事の代理として行った際に書かれたのみである(昭和十四年四月二十六日条)。「光荣」という言葉が、昭和十五年の「日記」にはたびたび登場する。いずれも皇族と接する場面である。

東久邇宮陪食の際の「総務部長以下殿下御陪食ノ榮ヲ得。」(五月十二日条)、東伏見宮妃陪食の際の「夜ハ御泊所ニテ御陪食ノ光荣ニ浴ス。」(十月二十日条)、賀陽宮夫妻陪食の際の「本日夫妻同伴ニテ御陪食ノ光荣ニ浴ス。」(十一月二十日条)。直宮である高松宮の奉迎・陪食の際には特に「光荣コレニスギズ。」と書いた(十一月二十四日条)。また、賀陽宮夫妻を迎えて「殿下ノ才伴ヲ申スコト何ト言ツテモ有リガタキコトナリ」(十一月二十一日条)、東伏見宮妃の離県にあたっては「御名残り惜シイトイフ感じニテ一杯ナリ。」(十月二十二日条)と感想を述べている。

このように、個人としての皇族と、施設としての神社に対して率直な敬慕の情を示す一方で、良三は、それらを顕彰する式典・行事に対しては冷淡な態度を示すことがしばしばある。十月二十七日の宮崎神宮神幸祭について、「聞ケバ馬鹿ラシキ計画ノ如シ。」「御神幸祭知事代理ヲ勤ム。コレ亦馬鹿ラシキ仕事ナリ。」(同日条)と書き、十一月

十日の紀元二千六百年奉祝式典当日にも「神武社頭ニテ式典、引続キ西神苑ニテ県市合同祝典挙行。知事代理ノ職務執行。馬鹿ラシキコトナリ。」(同日条)と書いている。興味深いのは、その前に「祝典ニ参列ノ光荣ヲ得ズ残念ナリ。羨望ニ不堪。」と記していることである。

宮崎の「県市合同祝典」で「知事代理ノ職務執行」するのは「馬鹿ラシキコト」であるのに対して、東京の「祝典ニ参列」するのは「光荣」「羨望」である。神幸祭で「御神幸祭知事代理ヲ勤ム」のは「馬鹿ラシキ仕事」だが、同じ宮崎神宮で「檀原神宮ニテ紀元二千六百年奉祝会主催全国祈誓大会開カレルニツキ」「秩宮殿下ノ勅語捧読ヲラゾオニヨリ庁員一同ト共ニ拝聴」するのは「感激ニ不堪」(六月十九日条)ことである。前者と後者の差は、天皇・皇族の肉体・肉声の存在である。その場に皇族の肉体や肉声があつて、自らがそれを受ける立場として「参列」する時、式典は「光荣」「感激」であり、その場に皇族が不在で、自らが主催者になり代わって「職務執行」する立場で臨む時、式典は「馬鹿ラシキ仕事」になる。

日記帳の紙幅の都合もあるだろうが、「日記」において、式典・行事の際に具体的なイベントの内容が論評されることは少ない。個別に言及があるのは、「狭野神社ニテ直会。「ヘコ踊」ヲ見ル。珍ラシキ踊ナリ。」(六月五日条)、「午前八時宮崎神宮前祈願式参列、午前九時ヨリ大会開始。ホラ貝、手裏剣ナド見タコトモナキ面白イモノアリ。」(十二月一日条)など、風俗として新奇で未知のものに遭遇した時くらいである。

同様に、神社・聖地を訪れた際に個別の建物や器物について具体的な感想が記されることも少ない。檀原神宮での「嘗テ参拝セルトキト全ク変リ、各種ノ奉仕ニテ神域拡張セラレ数十年後ノ神々シサヲ偲

ブ。」(一月六日条)、鶴戸神宮での「豪壯雄大ナル神域ニ感激オクトコロヲ知ラズ。」(三月二十四日条)、宮崎神宮での「昨夜来ノ浄雨ニテ清浄セラレタ神武神域ノ神々シサヨ。」(十月三十日条)といった賞賛からは、良三にとつて聖地に「神々シサ」をもたらしすものは、広大な境内が全体として体現する「豪壯雄大」さ、「清浄」さであつて、個別の建物やモニュメントの表現の如何にはあまり関心を抱いていないことが窺われる。

紀元二千六百年奉祝事業の一つとして整備されたモニュメント「八紘之基柱」<sup>90</sup>の定礎式に参列した良三は、「折アシク風雨強ク、会場ノ設備悪シキタメ参列者一同閉口。又神嚴ヲオカセルノ嫌ヒアリテ甚ダ遺憾ナリキ。」(四月三日条)と、あまり好意的でない感想を記している。文章上、「神嚴ヲオカセルノ嫌ヒ」の指す対象が何であるかは不明瞭だが、モニュメントの建設を歓迎していないようにも読める。ところが、県の奉祝行事と合わせて「八紘之基柱」の竣工式に高松宮が臨場した際には、「紀元二千六百年奉祝会各行事アリ。(中略)殿下ノ台臨ヲ仰ギ壯嚴ニ舉行セラレ、午後ハ八紘ノ基柱竣工式ニ殿下台臨アラセラル。嚴肅極マリナキ行事ナリ。」(十一月二十五日条)と述べている。「馬鹿ラシキ仕事」だったり「甚ダ遺憾」だったりした他日の行事と、内容に劇的な違いがあるとも思われぬ式典に「莊嚴」「嚴肅」をもたらししたものはやはり、皇族の肉体の存在であつた。

防空演習に際しては「防空ノ仕事ハ今マデ馬鹿ニシテキタガ、自分ノ仕事トナルト別ナ意味ニ於テ熱意ヲ有スルコトナル。」(八月二十六日条)と述べ、大政翼賛会宮崎県支部発会式で「講演アリタルモツマラスタメ途中ヨリ引キ上ゲ」(十二月八日条)る。あるいは、「事変第三周年ノ興亜奉公日」<sup>92</sup>にあつては「三年ト言ヘバ一口ニ言ヘルガ

長期聖戦ダ。日露、日清ノ両役ハ一年半位テ終ツタノダカラ。」と戦争が長引いていることを指摘し、宮崎市内の自肅状況を視察して「サガニ暗黒ナ氣持チノ悪イヤウナ街ナリ。」と感想を漏らす(七月一日条)。祝典に限らず、自らも当事者であるはずの国家的な事業に対して、良三は時折、冷静とも冷笑的とも言える態度を見せる。

防空演習において「今回ノ訓練ハ特ニ徹底シアリ熱心ナリ。夜ノ演習ノ如キハ行キ過ギノ感アリ。」(八月二十七日条)と、参加者の「熱心」に「行キ過ギノ感」があると考えたり、「雨中興亜奉公日神社参拝。警察官ノ規律正シキヲ痛感」(十月一日条)したりするように、良三には、自分を取り巻く出来事について、周りの「熱心」を他人事として、一定の距離感をもつて冷然と観察し評価しているところがある。

九月十日の、「素人娘ノ支那慰問演芸、公会堂ニテ詮衡セラレ実演ヲ見ル。何レモ熱心。良クモ若イ娘ヲ遠イトコロマデ、出ス者モ出ス者、行ク者モ行ク者ナリ。」(同日条)という記述は、そうした良三の思考の特質がよく表れたものと言えよう。ここに言う「素人娘ノ支那慰問演芸」とは、県社会課の企画による、有志の女性を募集して華中および満洲駐留の郷土部隊将兵のもとへ派遣する慰問団である。<sup>93</sup>すなわち、良三にとつて直接自らの管轄ではないにしても、れっきとした県庁主催のイベントであつた。ここでの、「出ス者モ出ス者、行ク者モ行ク者ナリ」という感想が、讃嘆の意を示すものか、非難の意を示すものか、解釈は難しい。しかし、いずれにしろ、自らも当事者であるはずの出来事について、そこに参画してくる人々の「熱心」に、合理的判断を超えた異様さ(「良クモ若イ娘ヲ遠イトコロマデ、出ス者モ出ス者、行ク者モ行ク者」)を感じ取る、官僚奥田良三の他人事的

な冷静さ、鋭敏さが、ここには表れていると思うのである。

他方で、良三が、自ら「熱心」に打ち込み、推進する施策もあった。「運動」と「武道」の振興である。良三が宮崎へ赴任した時期は、「国民体力法」（昭和十五年四月八日公布、同九月二十六日施行<sup>94</sup>）が公布され、徴兵の対象となる青年男子の「機能面からする「体力」の把握が試みられ」「政府は体力検査の結果に応じて被管理者の「体力」向上に関して「必要なる措置」を行うことができる」国民体力管理制度が整備されていた時期である。警察部長となった良三が真っ先に注目したのも、警察官の体力の問題だった。

三月二十六日、県内に十二箇所ある警察署の巡視を終えた良三は、その感想として「激務の為か警察官の病気が多い様であるがこれに対する保護療養には万善を期したいと思ふ」と述べ、さらに各署での訓示において、「非常時局の警察官は武道の振興によつて心身を鍛錬し警察官精神の向上を期すること、警察官はすべてに実践躬行の活模範を示すこと、自己担当の事務は完遂し責任を全うすること、戦地第一線に在る勇士の心構へを以て職務に当ること」と、「武道の振興」を第一の課題に掲げた。<sup>96</sup>

福岡時代から、良三は夏期には頻繁に海水浴場に通い、海水浴を行つた日数を熱心に「日記」に記録している。昭和十四年の場合には、七月八日から九月七日まで計十七日通つて「本年ハ大イニ努ムル積リニテ、マア十七回ハ成功ノ方ナラン」（昭和十四年九月七日条）と記した。一方、昭和十五年は「目ポー」（ものもらい）を患つたこともあり（七月二十九日条）、七月七日から八月十八日までの計六日しか海水浴行きを数えていない（八月十八日条）。しかし、宮崎の場合には、海水浴は良三個人の趣味的活動にとどまらず、警察部全体の施策

となつていたのである。

七月二十日、宮崎県庁では夏期に入るにあつて「夏期半休を廃止し七月二十一日より八月三十一日までの間を体位向上期間とし各部課毎に半数宛交代して正午より青島海水浴場におこなはせ海に鍛ふ」ことを決定した。<sup>97</sup>この「体位向上期間」の設定を受けて、警察部でも早速「秋を彩るあまた各種奉祝会行事の繁雑なるに備へて体位向上と健康増進の夏を利用し大いにこれにつとめることになつたが毎日交代制で正午から主として一ツ葉海水浴場におもむき炎熱に甲羅をほしてゐる。なほ各署へも体育奨励に拍車するやう極力促してゐる<sup>98</sup>」。荒天のため実現しなかつたようであるが、八月二十五日には「県警察部では二十五日の日曜日奥田警察部長以下各課長課員並にその家族一同打揃つて青島に赴き終日を水泳、綱引等を行ひ体位の向上にいそしむ」という企画まで浮上している。<sup>99</sup>

「日記」では七月二日時点で「署長会議ニテ、署員健康増進ノタメ日光浴運動ヲ提唱」（同日条）と記されており、県庁の「体位向上」の施策が、少なくとも警察部に関しては部長奥田良三の積極的な提案、推進によつて行われたことが確認できる。また、昭和十五年夏期には、相川前知事時代に始められた県庁でのラジオ体操を「八月一日からは各部課毎に全庁員が県庁玄関前に課長を先頭に整列し知事部長は玄関の石段から課員と向ひ合つて並び、敬礼、宮城遥拝黙禱のち体操を実施しあとで合唱し音楽があつて解散といふ体位向上の外に精神鍛錬を含めたものにする<sup>100</sup>」という施策も行われたが、これについても良三は「氣持チ良キモ合図ガ時間ニ合ハズ号令感心セズ。」（八月一日条）と積極的な感想を記している。

「先日來、目ポーガ出来テ閉口。海水浴ニ行ツテハキルモノノ気分



モ悪ク、外觀モ良クナキモノナリ。」(七月二十九日条) というように、良三自身においても「運動」がいつでも健康の改善に役立つわけではなかった。にもかかわらず、「此ノ頃痺麻疹出デ、又目坊ガ出来テ閉口。コレハ要スルニ運動不足ニテ体力弱リタルタメト認メラレ、コレヨリ大奮発、大イニ運動ヲスルコトトス。中年ヲ運動デキタヘル必要痛感。」(十一月八日条)、「退庁後、例ニヨリ薪割り。日光浴健康ニ良シト確信。」(七月二十六日条) というように、病気が起きる原因は「要スルニ運動不足ニテ体力弱リタルタメ」であり、「運動」と「日光」こそが「健康」と「体力」をもたらす、という思想は、良三にとっては経験的眞実であり、揺るぎない確信であった。<sup>(10)</sup>

諸種の「運動」の中でも、農務課長だった福岡県時代には「乗馬」の記述が多かったのに対して、宮崎県赴任後は、福岡では一度もなかった「武道」への言及が激増する。良三は、警察官武道大会での宮崎県の勝利を嬉々として記し(九月二十日条、十月二十九日条)、九月には自身も「二十年振りニテ柔道」の稽古を始めている(九月二十六日条)。「運動」への熱意という根本的な関心を持続させつつ、その時々の職掌に合わせて実現手段を柔軟に変化させていることが窺える。もともと、「武道」の意義は、「健康」と「体力」をもたらす「運動」の一種、ということにとどまらない。全国大会にあたって「昨日モ今日モ特ニ神武サマニ勝利祈願参拜」(九月二十日条)し、九州大会の優勝報告祭で「神武神域ノ神々シサ」を感じる(十月三十日条)ように、「武道」は檀原・宮崎両神宮の主神たる「神武様」への信仰と直結していたからである。「武道」こそは、良三にとって「心身を鍛錬」する最有力の方法であるのみならず、「光輝アル紀元二千六百年」下であり、かつ「長期聖戦」下である時代において、「実践躬行

の活模範」、「戦地第一線に在る勇士の心構へ」を顕示する何よりの成果でもあったのだろう。

#### 六 おわりに

以上、散漫ではあるが、「奥田良三日記 昭和十五年」に登場する問題のいくつかを取り上げ、良三と各問題の関わりを考えた。そこからは、時局とその中で自身が与えられる立場・任務の変転に対して、柔軟に順応して精神的に仕事を消化していく一面と、他方で何事に対してもある種冷やかな客観性を保って観察している一面とが混在する、官僚奥田良三の性格が浮かび上がってくる。それは、戦後も出身県の公選知事として、長く地方政界に生き残っていく人間の資質を窺わせるものでもあるだろう。

「日記」は無論、直接には当該期の地域史の史料となるものである。しかし、その対象となる地域が、「紀元二千六百年」において重要な意味を持ち、特徴的な政治・経済活動が展開された宮崎という土地であったことにより、いち地域にとどまらず、昭和十五年という時期と、その時期の行政を担った官僚の思考・行動の特徴をも析出する史料だと考える。

本解題では良三の福岡県勤務期については全く扱わなかった。宮崎県勤務期についても、拓務省転出の打診(十二月二十六日条)、良三が奈良県知事選に出馬する際に後援者となる天理教真柱中山正善<sup>(10)</sup>(十一月二十五日条)や「八紘之基柱」の設計者日名子実三(十一月二十九日条、十二月四日条)といった興味深い人物の登場等々、注目すべき話題は多いが、筆者の力不足により、すべてに言及することはできない。「日記」が今後幅広い研究に利用されることを期待して、筆を

掘きたい。

註

- (1) 他に、昭和三年に幹部候補生として陸軍に入営した際の日誌、約二ヶ月半分が現存しており、次号の『東京大学日本史学研究室紀要』での紹介を予定している。
- (2) 『官報』一九四〇年三月九日号。
- (3) 上西晴也・佐藤大悟・塚原浩太郎・谷川みらい・志賀賢二「翻刻と紹介」『奥田日記 昭和十四年』(『東京大学日本史学研究室紀要』二十二号、二〇一八)三九八頁。
- (4) 「後任部長奥田さん 奈良県の人」『宮崎新聞』一九四〇年三月九日夕刊。
- (5) 「奥田部長 十五日赴任の予定」『宮崎新聞』一九四〇年三月十日夕刊。
- (6) 前掲「後任部長奥田さん 奈良県の人」『宮崎新聞』。
- (7) 前掲「奥田部長 十五日赴任の予定」『宮崎新聞』。
- (8) 宮崎県編『宮崎県史 通史編 近・現代2』(宮崎県、二〇〇〇)三二五頁。
- (9) 前掲『宮崎県史 通史編 近・現代2』三二六〜三六二頁。
- (10) 前掲『宮崎県史 通史編 近・現代2』三六三〜三七七頁、宮崎県企画局編纂『宮崎県経済史』(宮崎県、一九五四)六〇六〜六一二頁。
- (11) 『官報』一九四〇年二月十日号。『宮崎新聞』の記事によれば、宮崎県庁では昭和六年の耕地課長林進士について二例目という。「遠山さん勅任官待遇」『宮崎新聞』一九四〇年二月十五日夕刊。

- (12) 「強い性格が県政に反映」『宮崎新聞』一九四〇年八月三十日朝刊。
- (13) 「県政想観 無感激なる事務化」『宮崎新聞』一九四〇年二月二十八日夕刊。
- (14) 「県政批判は甚だけしからぬ」『宮崎新聞』一九四〇年三月八日夕刊、「長谷川知事県政刷新へ邁進 野井書記長血祭」『三州日日新聞』一九四〇年三月九日朝刊。
- (15) 「県政を攪乱する不良分子を排撃 遠山総務部長帰任談」『三州日日新聞』一九四〇年四月十三日朝刊。『三州日日新聞』は都城市を拠点とする新聞で、県政問題では長谷川知事・遠山総務部長寄りの立場の記事を多く掲載している。
- (16) 『官報』一九四〇年四月十一日号。
- (17) なお、このうち学務部長上塚弘は、宮崎県の精勤運動組織である祖国振興隊の体制をめぐって総務部長遠山信一郎との対立が伝えられ、県奉祝会事務局企画部長への就任を拒絶し、事務官谷川高德の辞職を受けて奉祝会副会長を辞任するなど、遠山総務部長から距離を置く行動を取っていた人物だった。「県政想観 無感激なる事務化」『宮崎新聞』一九四〇年二月二十八日夕刊、「上塚奉祝会副会長 責任を感じ辞表提出」同三月十三日朝刊、「副会長辞任問題 知事も上塚部長も沈黙」同三月十四日朝刊、「活人剣」同九月三日朝刊。祖国振興隊については、前掲『宮崎県史 通史編 近・現代2』三四八〜三五五頁を参照のこと。
- (18) 前掲『宮崎県史 通史編 近・現代2』三四四〜三四八頁。
- (19) 「現県会はその内部的勢力を二分して柿原野村の両派を有し昨秋九月の総改選前後からこの両派が役員選挙をめぐって伯仲の事前

工作を演じたことは周知の事実でありその結果、柿原小田、野村有馬の両組の正副議長が前後期を折半して担当する紳士協定が出来たことも公然の秘密であつた」「野村県会議長生る」「宮崎新聞」一九四〇年四月十三日朝刊。

(20) 「県政打開の工作 第二段階に入る」『宮崎新聞』一九四〇年三月十九日朝刊。

(21) 遠山総務部長批判を展開している「宮崎新聞」が「明朗県会を待望」(三月十二日夕刊)、「県政明朗工作 連絡委員会開かる」(三月十九日夕刊)など「県政明朗化」への期待を述べる一方、「柿原議長が遠山総務部長に対し東京方面で不可解な行動を執つた」ことを問題視する『三州日日新聞』も、「県当局の部外不純分子の排撃、県政の核心浄化」による「明朗県政確立」の期待を述べている。「明朗県会再生? 柿原県会議長を繞る渦巻 議長辞任後の新事態が注目」『三州日日新聞』三月二十日朝刊、「柿原議長の立場も聴取 円満解決策を練る きのみ県議懇談会を開き 明朗県政へ邁進」同三月三十日朝刊。

(22) 「警察官異動近し」『三州日日新聞』一九四〇年三月二十七日朝刊、「警察の人事異動当分はやらない 奥田警察部長の肚」『宮崎新聞』一九四〇年三月三十日朝刊。

(23) 「県営電気問題では完全に両君の意見は対立してゐる、柿原君は三月上旬送電開始前に局設置の主唱者で県会もこれには総意の賛成がある。」「県政想観 両者の対立激化す」『宮崎新聞』一九四〇年二月二十六日朝刊、「この県対柿原議長の県政問題の確執の主なるものに県営電気の運営問題があることは間違ひなく、今後柿原議長の辞職と共にこの問題の進展には注目されるものがあ

る」 「近く県会全員協議会 鍵は県電問題」同三月三十日夕刊。

(24) 梅本哲世「戦前宮崎県における電気事業の展開」(同「戦前日本資本主義と電力」八朔社、二〇〇〇) 一〇二〜一〇四頁。

(25) 宮崎県電気復元運動史編纂委員会編『宮崎県電気復元運動史』(宮崎県電気事業復元運動本部、一九六三) 四六〜五七頁、前掲梅本哲世「戦前宮崎県における電気事業の展開」一〇三〜一〇六頁。

(26) 前掲「宮崎県電気復元運動史」五七〜六五頁、前掲梅本哲世「戦前宮崎県における電気事業の展開」一〇六頁。

(27) 前掲梅本哲世「戦前宮崎県における電気事業の展開」一〇六〜一〇七頁。

(28) 前掲梅本哲世「戦前宮崎県における電気事業の展開」一〇八〜一〇九頁。

(29) 前掲「宮崎県電気復元運動史」七五〜八〇頁、前掲梅本哲世「戦前宮崎県における電気事業の展開」一〇九〜一一頁。

(30) 前掲「宮崎県経済史」六〇八〜六一〇頁、前掲「宮崎県電気復元運動史」八三〜八七頁。

(31) 「三島知事を説いて小丸川電源開発の調査に踏み切らせたのは、そのころ宮崎市長であつた柿原政一郎である。注意しておきたいのは、それまでの県営電気事業をめぐる論議がもつぱら県財政の健全化という観点からなされていたのに対して、柿原においてはじめて電力供給による企業誘致という論理が正面に掲げられたこと、および小丸川という特定河川が対象とされたことである。」

前掲「宮崎県史 通史編 近・現代2」四五二頁。

(32) 「第二十九代知事として朝鮮総督府から赴任した相川勝六知事は、

三島知事に勝る剛毅果断の精神家で県電生みの親となった人である。」前掲『宮崎県電気復元運動史』八〇頁。

(33) 柿原政一郎「本県電気問題の回顧(4) 認可運動(一)」『日向日日新聞』一九五〇年六月二十六日朝刊、同「本県電気問題の回顧

(5) 認可運動(二)」六月二十八日朝刊。梅本哲世は、認可の背景として、宮崎県の事業計画が、内務省が推進していた「河川統制事業」の方針に合致し、内務省の後押しを受けていたことを指摘する。前掲梅本哲世「戦前宮崎県における電気事業の展開」一一頁。また、『宮崎県史』は、県会内の政党解消によって結成された「宮崎県振興会」が、挙県的な県営電気事業推進団体として機能していたことを指摘する。前掲『宮崎県史 通史編 近代2』三四七〜三四八頁。

なお、『宮崎県史』、『宮崎県電気復元運動史』等における県営電気認可の経緯に関する記述の多くが、上記の柿原政一郎が『日向日日新聞』に連載した回顧記事に依っている。

(34) 前掲『宮崎県電気復元運動史』一三五〜一三六頁、宮崎県編『宮崎県政八十年史 下』(宮崎県、一九六七) 八六三〜八六九頁。

(35) 前掲『宮崎県経済史』六四六頁、前掲梅本哲世「戦前宮崎県における電気事業の展開」一一二頁。

(36) 前掲『宮崎県政八十年史 下』八六九頁。

(37) 「電力日本の新偉力」『宮崎新聞』一九四〇年三月八日朝刊、「県電隧道の通水 十四日試験する」同三月十四日朝刊、「多年の宿望が叶ひ 県営電気第一期工事を完成」同四月五日夕刊、「川原発電所送電を開始」同四月二十三日朝刊。

(38) 「秋の基柱竣工式は十月下旬の予定 長谷川知事の帰庁談」『宮

崎新聞』一九四〇年二月二十九日夕刊、「議長の不在」同三月十日朝刊。また、二月末には県営電気建設部の工務課長渡辺秀幸と経理課長松本清明が上京し、三月一日には内務省の事務官が県電工事現場を視察している。「県電技師長」同二月二十七日夕刊、「郡事務官来県 一日県電視察」同三月一日朝刊。

(39) 前掲「県政想観 両者の対立激化す」『宮崎新聞』。

(40) 柿原政一郎「本県電気問題の回顧(6) 使用目的」『日向日日新聞』一九五〇年七月一日朝刊。

(41) 「昭和十五年臨時県会(四月) 第一読会(総体質問) (1) 県営電気工事のデマ宣伝について」宮崎県議会議史編さん委員会編『宮崎県会史 第七輯』(宮崎県議会議事事務局、一九六六) 五〇九〜五一〇頁。

(42) 前掲『宮崎県会史 第七編』五一〇〜五一二頁。

(43) 前掲『宮崎県会史 第七編』五一二〜五一三頁。

(44) 「問題の渡辺課長 県当局は停職処分」『宮崎新聞』一九四〇年七月十一日夕刊。

(45) 前掲『宮崎県政八十年史 下』八九八頁。

(46) 「県営電気の前途多難を覚ゆる説 県議柿原政一郎氏声明す」『宮崎新聞』一九四〇年七月五日朝刊、「柿原県議 県電問題で書簡」『三州日日新聞』七月六日朝刊。記事によれば、意見書は、六月二十八日に柿原が県政記者団と会見した際の応答内容をまとめたものという。

(47) 「県電の多難と措置」『宮崎新聞』一九四〇年七月五日朝刊。

(48) 「問題の渡辺課長 県当局は停職処分」『宮崎新聞』一九四〇年七月十一日朝刊。

(49) なお、この間、十日に野村嘉久馬・小田彦太郎ら十名の県電気

三十日朝刊。

事業委員が選任され、十一日の委員会で長谷川知事・遠山総務部長が県電工事の状況と渡辺の停職処分を説明しているが、選任された委員は「猛虎の勢ひをもつ二、三氏もおるが全体としてはおとなし」いメンバーだったという。「穏健揃ひの県電委員」

(57) 『官報』一九四〇年八月三十日号。  
(58) 「幹部二十余氏 辞表を撤回し復職」『宮崎新聞』一九四〇年九月三日朝刊。

「宮崎新聞」一九四〇年七月十一日朝刊、「渡辺氏後釜の専任課長 速急設置を要望」同七月十二日朝刊。

(59) なお、宮崎県知事長谷川透は、翌昭和十六年一月七日に依願免官となっている。『官報』一九四一年一月八日号。  
(60) 「総務部長遠山信一郎は、相川知事が去ったのち、柿原県会議長と県政問題についてしばしば意見が対立し、ことに手がけたばかりの小丸川県営電気事業の運営についても対立が甚しく、のちに小丸川県営発電所建設事務所長渡辺秀幸を突如やめさせたことから県政上に時ならぬ混乱を招き、ついに柿原県会議長は、県営電

(50) 「渡辺技師の出県」『宮崎新聞』一九四〇年七月十三日夕刊。

気をまもるため身を挺する決意を固め、昭和十五年四月議長の職をなげうって野に下った。』『宮崎県政八十年史 上』(宮崎県、一九六七)二八八頁。

(51) 「渡辺君の言ふことが人によつて違ふ又県電を大阪財閥に売るといふ問題の如きも自分の臆測で勝手なことを中央方面其他に云ひふらしてゐる。電気局設置のことも何うしても其うして貰はねばやつて行けぬといふことを各方面にいひふらし自分から辞めるといふことを発表して廻つた。」「停職の渡辺技師 けふ依願免職となる」『宮崎新聞』一九四〇年七月十三日夕刊。

(61) 昭和十四年九月時点の推定販売部数一萬部。なお、二位の『延岡新聞』が三千四百部で、他の九紙はすべて千五百部以下とされている。永代静雄編『日本新聞年鑑 昭和十六年版』(新聞研究所、一九四〇)第二編一〇四頁。

(52) このことは、一時「県当局からの懇談もあり紙上掲載を差控へ」られていたが、十四日に報道された。「第五列 県営電気現場の動揺」『宮崎新聞』一九四〇年七月十四日夕刊。

(62) 「仲道宮新社長検挙」『三州日日新聞』一九四〇年七月二十日朝刊。

(53) 「日記」七月三十一日条、「県営電気の完遂に 県を激励鞭撻す」『宮崎新聞』一九四〇年八月一日朝刊。

(63) 『宮崎新聞』の前身である、昭和二年に仲道政治が創業した『宮崎時事新聞』は、民政党系の立場を取る新聞だった。中村秀人「宮崎県新聞史」(日本新聞協会編『地方別日本新聞史』日本新聞協会、一九五六)四九一頁。

(54) 「日向の興隆を気負へ」『宮崎新聞』一九四〇年八月十一日朝刊。「活人剣」同八月十四日朝刊、「坂本委員は語る」同八月十五日夕刊。

(64) 「立岡巡查部長」『宮崎新聞』一九四〇年八月二十一日朝刊。

(55) 「昭和十五年臨時県会(四月) 県営電気工事用資材特配に関する件」前掲『宮崎県会史 第七輯』七七〇〜七七二頁。

(65) 「臨時県会で決定した意見書提出」『宮崎新聞』一九四〇年八月

(56) 「臨時県会で決定した意見書提出」『宮崎新聞』一九四〇年八月

- (65) 「警官異動」『宮崎新聞』一九四〇年八月二十一日朝刊。
- (66) 「警察官異動統報」『三州日日新聞』一九四〇年四月二十六日朝刊。
- (67) 「警官異動」『宮崎新聞』一九四〇年九月二十六日朝刊。
- (68) 「新体制即応の警察異動噂さる」『宮崎新聞』一九四〇年九月二十日夕刊。
- (69) 「防諜強化」『宮崎新聞』一九四〇年九月六日夕刊、「不健全なる生活を弾圧せよ」同九月二十日夕刊。
- (70) 「新任配置と警部補異動」『日向日日新聞』一九四〇年十二月二十五日朝刊。
- (71) 良三は、県内警察署初巡視後の談話で「署員の手不足の上に経済警察等の仕事は増してゐる」ことを述べており、県会では警察官の増員を要求していた。新聞報道によれば、五月三十日・三十一日開催の署長会議での主要な指示内容として「銃後治安維持特に万遺漏無きを期して非常警戒防諜、経済警察、防空、精動運動に関して」が挙げられ、七月二日の署長会議でも、「経済警察関係と銃後思想問題の一層取締りを強化すべきこと」が訓示されている。「武道で心身鍛錬 勇士の心構へで当れ 奥田警察部長の初巡視」『宮崎新聞』一九四〇年三月二十七日朝刊、「経済警察が主体 三十日から二日間県下署長会議」同五月二十八日朝刊、「県下警察署長会議」同七月三日朝刊、「日記」九月二十一日条。
- (72) 里見脩『新聞統合 戦時期におけるメディアと国家』（勁草書房、二〇一二年）六八～六九頁。
- (73) 前掲里見脩『新聞統合』七頁。
- (74) 前掲里見脩『新聞統合』七六頁。
- (75) 前掲里見脩『新聞統合』二二六～二二七頁。良三も「小サイ新聞多イノニハ一驚」と述べている。「日記」三月十八日条。  
なお、里見が引用する地元紙自身の動きの事例は、「昭和九年宮崎新聞社長仲道政治によって早くも県下各紙の合同統合が企てられ」というものである。永代静雄編『日本新聞年鑑 昭和十五年版』（新聞研究所、一九三九年）第二編一一五頁。
- (76) 前掲里見脩『新聞統合』二二七～二二八頁。
- (77) 宮崎日日新聞社史編纂委員会編『宮崎日日新聞社史』（宮崎日日新聞社、一九七五年）四五頁。
- (78) 「引き続き日刊紙の統制は長谷川知事、奥田良三警察部長の手で進められたが、実際の折衝には特高課が当たった。」前掲『宮崎日日新聞社史』四三頁。また、日向日日新聞社編集局長を務めた中村秀人が執筆した「宮崎県新聞史」は、「おりから宮崎県に赴任してきた木下特高課長が、この新聞統合の一大推進力となって活躍した。」とする。前掲『宮崎県新聞史』四九三頁。
- (79) 「新体制に即応して新聞統制懸案解決」『宮崎新聞』一九四〇年九月六日夕刊。
- (80) 「宮崎日日新聞社史」によれば、「門司で業界紙を発行していた」人物とされる。前掲『宮崎日日新聞社史』四五頁。
- (81) のちに宮崎商工会議所会頭に就任している。「宮崎商工会議所三十年史」（宮崎商工会議所、一九五九年）四三頁。
- (82) 前掲『宮崎日日新聞社史』四五頁。
- (83) 「二人ヲ連レテ箱崎宮参拜。官幣大社ノ大前ニ皇軍将士ノ武運長久ト家族一同ノ幸福トヲ祈ル。」「奥田良三日記 昭和十四年」一月二日条、「葛城村経済更生宣誓式」出席。神前ニテ宣誓ノ意義

深キヲ感ズ」同三月十八日条、「早朝靖国神社ニ参拜、護国ノ英  
靈ニ低頭。」同三月二十二日条、「知事、部長不在ニテ御真影ノ伝  
達式ヲ知事ニ代リテ之ヲ行フノ光榮ヲ担フ。」同四月二十六日条  
など。前掲「翻刻と紹介」奥田良三日記「昭和十四年」参照。

(84) 「皆様の協力援助で重責を果す」快男子奥田部長着任」『宮崎  
新聞』一九四〇年三月十二日朝刊。

(85) 「人情深い僕だ」心で叫ぶ警察部長 奥田さん初の太刀先」『宮  
崎新聞』三月二十一日夕刊。

(86) 古川隆久は、宮崎県を「紀元二千六百年奉祝の動きを利用して、  
全国でも有数の規模で地域経済の振興に乗り出すことに成功した  
例」と位置づけ、相川勝六知事の事績を中心に宮崎県の紀元二千  
六百年奉祝事業を概観している。古川隆久『皇紀・万博・オリン  
ピック』（中央公論社、一九九八）一五七〜一六四頁。

(87) 前掲『宮崎県史 通史編 近・現代2』三六三〜三六四頁。

(88) 前掲『宮崎県史 通史編 近・現代2』三六五頁。

(89) 「日記」各日条。

(90) 「八紘之基柱」については、千葉慶「戦略としての表象分析

『八紘之基柱』を読むということ」（『歴史評論』七六二号、二〇

一三）、坂口英伸「近代日本の記念碑再考 鉄筋コンクリートの  
観点から」（『文化資源学』十五号、二〇一七）を参照。なお、

「八紘之基柱」は「あめつちのもと（ば）しら」と読まれるこ  
とが多いが、昭和十四年十二月十六日の県会ではこれについて、  
議員山本茂から「私の知るかぎりにおきましては何ら公式の手続  
きを経ての読み方ではないと思っております。これに對しまして  
相当古義古文の詳しい方面から異議が出ているようであります。

この点につきまして学務部長はこの名前の最後の決定をなされるに  
当たり各方面の研究等をしんじやくされて決定をさせていただきました  
と思いますが、さような御用意がありますか」と質問がなされ  
ており、宮崎県としてあらかじめ定まった読み方が決定されてい  
たわけではないことがわかる。「昭和十四年 通常県会 第一読  
会 学務関係諸款 (5)八紘之基柱の読み方について（山本茂  
君）」前掲『宮崎県会史 第七輯』四八五〜四八六頁。

(91) 「八紘之基柱」題字の揮毫者である秩父宮が来臨する予定だった  
が、体調不良のため高松宮が代わっていた。前掲千葉慶「戦略と  
しての表象分析」七七頁。

(92) 「興亜奉公日」は昭和十四年九月以降、毎月一日に設定されてい  
た記念日。同年七月四日に国民精神総動員委員会で決定された  
「公私生活を刷新し戦時態勢化するの基本方策」に基づいて、八  
月八日の閣議で制定され、「当日全国民ハ拳ツテ戦場ノ労苦ヲ偲  
ビ自粛自省之ヲ實際生活ノ上ニ具現スルト共ニ興亜ノ大業ヲ翼賛  
シテ一億一心奉公ノ誠ヲ効シ強力日本建設ニ向ツテ邁進シ以テ恒  
久実践ノ源泉タラシムル」こととされていた。「興亜奉公日ヲ設  
定ス」国立公文書館所蔵（『公文類聚・第六十三編・昭和十四  
年・第五十八卷・官職五十五・任免二・分限・雑載、族爵・記章、  
儀典』請求番号：類02236100、件名番号：015）。

(93) 「こんどは北満の郷土部隊慰問」『三州日日新聞』一九四〇年八  
月十八日朝刊、「芸自慢のご婦人は遠慮なく申出なさい」同八月  
二十八日朝刊、「県議と演芸慰問団 愈々九月二十日頃出発」同  
八月三十一日朝刊、「演芸慰問団の選定試演会 十日県公会堂  
で」同九月三日朝刊。

(94) 『官報』一九四〇年四月八日号、同九月二十五日号。

(95) 高岡裕之『総力戦体制と「福祉国家」 戦時日本への「社会改革」構想』(岩波書店、二〇一一) 二六一～二六二頁。

(96) 「武道で心身鍛錬 勇士の心構へで当れ 奥田警察部長の初巡視」『宮崎新聞』一九四〇年三月二十七日朝刊。

(97) 「夏半休を廃止し体位向上を期する 県庁員交代で鍛ふ」『宮崎新聞』一九四〇年七月二十日夕刊。

(98) 「県警察部員の海水鍛錬」『宮崎新聞』一九四〇年七月二十四日朝刊。

(99) 「奥田部長以下青島へ」『宮崎新聞』一九四〇年八月二十四日朝刊、「日記」八月二十五日条。

(100) 「第五列 県庁のラヂオ体操」『宮崎新聞』一九四〇年七月三十日夕刊。

(101) 高岡裕之は、昭和十九年以降の「戦争末期における右のような「国民体育」体制の整備は、「一般には、今日の如く食糧逼迫の折柄、体操よりも休養安静がよいといふ声を聞く」という状況の下で、「体操すると腹がへるといふ理由で……体育を等閑視」することは許されないと(野津謙『産業体育』東洋書館、一九四四年一三頁)、強引に進められた」とする(前掲『総力戦体制と「福祉国家」』二七五頁)が、昭和十五年時点の「日記」の「運動」をめぐる記述は、そうした政策の背景にある当局者の思考、信念のあり方を照らし出すものと言えよう。

(102) 昭和十四年の「日記」では、一月十五日、二月十五日・十八日、五月六日、十一月二日・三日・五日・十二日の計八回乗馬していることが確認出来る。昭和十五年は四月二十一日、六月二十二日、

十一月七日の計三回である。

(103) 奥田良三「この道一筋に半世紀」(昭和会編『昭和会の五十年』昭和会、一九七七) 五四頁。